Cosmic Philosophy & UFOs

GAP JAPAN NEWSLETTER

宇宙哲学とUFO

静岡に頻出するUFO

沖縄に出現した宇宙人

スペースプログラムへの協力と宇宙的成長

転生とカルマ

テレパシー開発法(2)

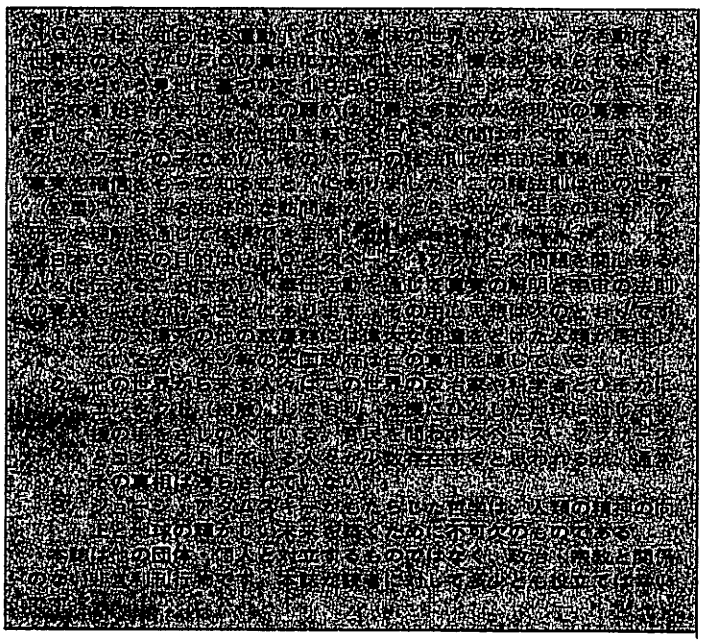
AUTUMN
1983

82

宇宙哲学とUFO　第82号目次

〈巻頭言〉アダムスキー全集刊行——1
静岡に頻出するUFO——野口敏治 2
沖縄に出現した宇宙人——新里義雄 9
スペースプログラムへの協力と宇宙的成長——伊藤達夫 14
〈映画解説〉ベン・ハー／パワーズ・オヴ・テン——18
転生とカルマ——久保田八郎 20
〈改訳〉テレパシー開発法(2)——G.アダムスキー 26
地方支部大会報告——34
読者の声「コズミック・ポスト」——36
〈予告〉秋田支部大会——37
〈広告〉アダムスキー全集——38
〈予告〉昭和58年度総会——39
日本GAP全国月例研究会案内——40

GAPとは

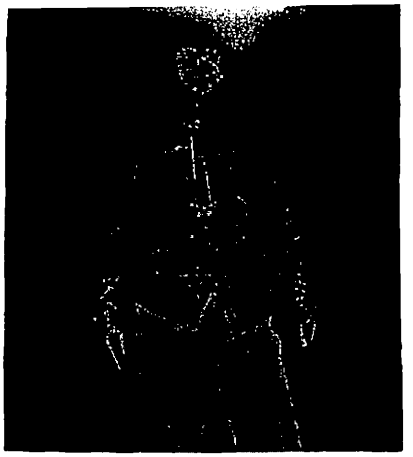


■表紙イラストは日本GAP会員・勝又英嗣氏（札幌）描く北極のUFO（左方）。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他の印刷物への無断転載を禁じます。

〈巻頭言〉

アダムスキー全集刊行



▲UFO観測中の編者

アダムスキー全集の第一巻『宇宙からの訪問者』がついに刊行された。箱入りハードカバー（厚手表紙）の豪華本で、少々値が張るけれども初版発行部数が二千部だからやむを得ないだろう。文久書林の勇断に心から敬意を表するしだいである。取次（卸し機構）を通してあるから一般の書店に出るのが建前だが、この部数では一万五千軒に及ぶ全国の書店に行き渡らぬから、入手希望者は発行元の文久書林へ直接注文されるとよい。詳細は本号38頁を参照されたい。

編者（久保田八郎）がアダムスキーの著書の邦訳版『空飛ぶ円盤実見記』（原題は（Flying Saucers Have Landed）を初めて読んで爆発的なショックを受けたのは今を去る三十年前の昭和二十八年八月の頃だった。T氏訳の日本語版はかなりくずれた訳文であることを後に知ったけれども（しかしロクな辞書のなかった当時、これを独力で訳されたT氏の業績に賛嘆するものである）、内容を即座に事実であると信じた編者は興奮のあまり二日二晩眠れなかったことを記憶している。

そして最初にアダムスキーに手紙を出したのが同年九月六日付で、それにたいしてアダムスキーから返事が来たのはなんと一年後の二十九年十月二十四日付であった。後に判明したのだが、アダムスキーが前記の著書を出して大ベストセラーになって以来、彼の所へ世界中から数千通の手紙が殺到したために、それを積み重ねておいて到着順に返事を出したという。

その後アダムスキーと文通を続けるうちに彼は二番目の Inside the Space Ships を三十年に出して、これまた大反響を起こしたが、思いがけず署名入りの本を一冊贈ってくれたので一読して驚嘆し、ぜひ自身の手で訳そうと思い立って郷里の自宅の薄暗い二階の部屋で豆炭のコタツにあたりながら（その頃電気ゴタツはなかった）翻訳を続けたところ、当時きわめて語学力の貧弱であった（今でもそうだが）編者を助けてくれる人はいないものかと思案中、英語の達者な小学校時代の同級生M氏がたまたま病を得て東京から帰郷されたため、渡りに舟とばかり入院先をしばしば訪れてご助力を乞い、完成した訳稿を『実見記』を出版したK社に持参し、当時同社の経理部長であった岸義信氏（現文久書林社長）に見せたところ、氏は周囲の強硬な反対を押し切って出版に踏みきり、これが『空飛ぶ円盤同乗記』の題で（この題名は編者がつけた）初版が三十二年に刊行され、以来わが国のUFO研究界に根強く浸透していった。

一方、文通によるアダムスキーとの交流は続いたが、彼の著書集はアダムスキー全集第三巻『UFOとアダムスキー』に改訳を収録の予定である。彼から来たぼう大な書簡は全部保存してあり、二十八年に編者が最初に彼宛に出して以来の当方の手紙のコピーも全部保存してある。

彼は著書を刊行するたびに編者に贈ってくれたが、原文には彼独特の造語が多く（特に『テレパシー開発法』はそうである）、ときに訳読に難渋をきたすことがあったので、ぜひとも教養の高い英米人語学インフォーマント（知識提供者）が欲しいと切望していたところ、どうした風の吹きまわしか、外人の顔などめったに見られない島根県の片田舎に突如アメリカ人宣教師のC氏が家族づれで赴任してこられたので、天の恵みとばかり友人にして頂いてずいぶんご教示にあずかり、大助かりした。英会話も四年近く教えを受けたが、その他人間的に大きな影響を与えて下さったこのC先生は実に立派な方で、その後編者のアダムスキー関係訳業が一段落した頃にまた忽然と去って行かれた。まさに編者を助けるために出現されたとしか思えないこの方を当初はスペースブラザーではないかと思ったほどである。

とにかくM氏といいC先生といい当時の編者には不可欠の人物であったが、それが何かの筋書きみたいに身辺に現れたというのも偶然ではなさそうだ。その他現在までの多くの不可思議な体験を考えれば、GAP活動はどうみてもスペースブラザーズのご援助を頂いているとしか言いようがない。

今回出た『宇宙からの訪問者』は何度か改訳を試みた末の最終的な改訳決定版であって、書中の第一部にはアダムスキーの第一著 Flying Saucers Have Landed の内、アダムスキーが書いた金星人との会見記の部分のみを収録した。共著者デスモンド・レスリーの執筆になる部分は削除せよとの示唆をアメリカの故アリス・ウェルズ女史（アダムスキーの高弟）から受けたためである。第二部は Inside the Space Ships の完訳で、一部と二部を合わせて『宇宙からの訪問者』と題して（この題名も編者がつけた）某社から出したことがあり、絶版後更に徹底改訳したものが今回の文久書林刊全集第一巻である。

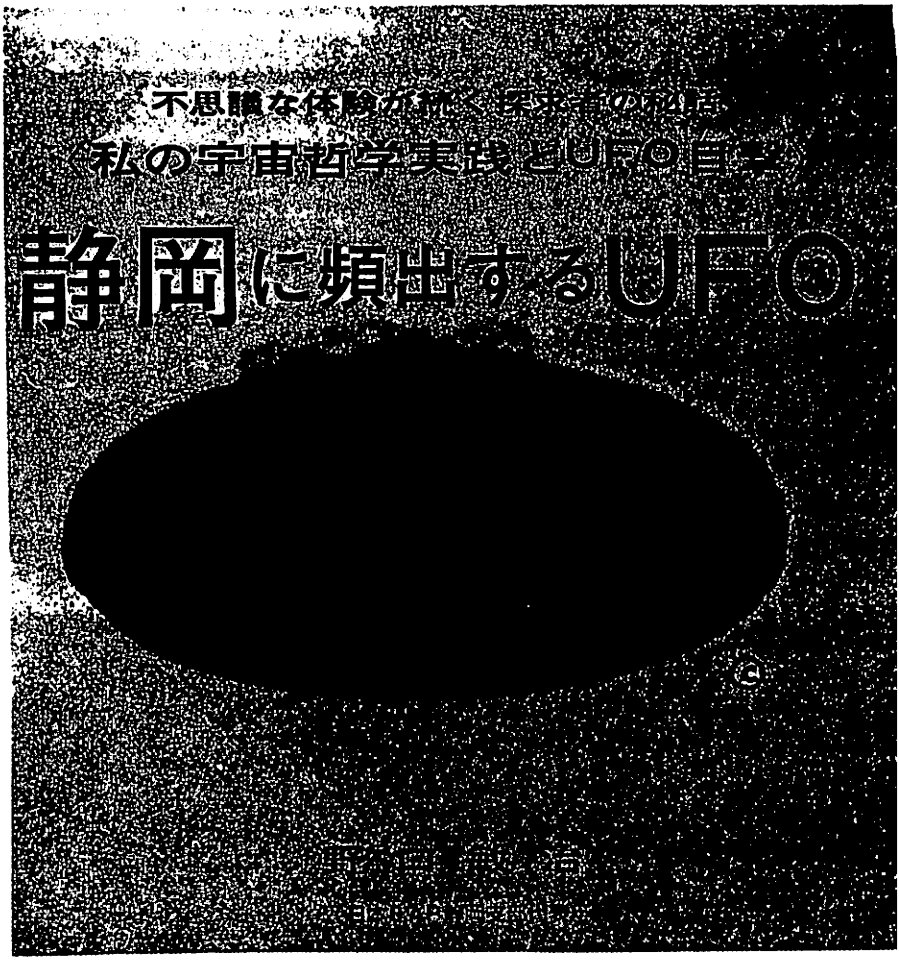
アダムスキーの著作を網羅して全集で出版するとは世界に例のないことだが、編者をも含めてアダムスキーに全く会ったことのない人々がこうまで多数結集して強力に支持活動を展開し続ける日本という国も不思議な国ではある。「日本人は特殊なカルマを持つ民族だ」というアダムスキーの言葉を想起せざるを得ない。

とまれこの全集の発行は約一千名の日本GAP会員諸兄姉のご支援の賜物であり、衷心より感謝するしだいである。

不思議な体験が続く探求者の私話

〈私の宇宙哲学実践とUFO目撃〉

静岡に頻出するUFO



筆者は日本GAP会員中トップレベルをゆく高次な宇宙哲学とUFOの探求者。多年にわたる実践中、たびたび不思議な体験を持ち、そして精神面でも抜群の進歩を示して、多数のGAP会員から実の兄のごとく慕われている。

沈黙を守っていた筆者が、このたび本誌の要請に応じて特に書きおろしの素晴らしい体験記を寄せられた。そしてUFOや異星人が筆者を注視していたという噂はこの記事により明白となった。

これが多数の真剣な会員にとってこよなき刺激となることを望む次第である。

▶写真はアダムスキー撮影の円盤。上部に雲のようなものがかかっているのは船体の極の変換によって生ずる現象。

私の小学生の頃の夢はパイロットになり大空を翔けまわることでした。年代が進み二十歳前後になると、「人間は何のために生きているのだろうか」、「生まれ変わりとはどんなことだろうか」、「どうして病気になるのだろうか」、「薬を使わないで病気は治せないだろうか」、「宇宙に果てはあるのだろうか」といろいろ考えるようになり、これらの疑問に答えてくれるものはないかと、あれこれ探しまわったのですが、これといった解答は得られないまま社会人になり、働くようになってからは社会の荒波に染まり、そのような考えはすっかり忘れてしまいました。

結婚して、責任感もつき、精神的にもすこし安定してきた頃、また以前の考えが起こってきました。人間の生涯には、いろいろなものとの巡り会いによって大きな転機があるものですが、私の場合は、結婚し、しばらくしてアダムスキー哲学と巡り会ったことが今生での一大転機となりました。

日本GAPを知り、一連のアダムスキー氏の書物を無我夢中で読みました。書物に述べられている事柄は、私が長い間探し求めていたものがやっと見つかったという感じでした。この宝物は絶対に手放さないぞと自分に固く言い聞かせたことを覚えています。

静岡支部を設立

アダムスキー氏の書物を読めば読むほどその奥の深さを感じさせられました。そしてある日『生命の科学』を集中的に読んでみようと思うようになり、一日に一課を二度づつ読み、感じた事、重要と思われるところなどを日記帳に毎日毎日書き続けてゆきました。そして九十日位過ぎた頃、「このような重大な内容を含んだアダムスキー問題は、もっと多くの人々に知ってもらわなくては」とか「なんとかしなければ」と思うようになってきました。

そこで、まず手近なところとして静岡市内の中学生や高校生などの若い人達を対象として、アダムスキー哲学の学びの場を作ってみようと思いたちました。それからいろいろと具体的に考えはじめて名称も『シズオカ・コズミック・スクール』ときまり、段取りも整い、あとは新聞広告を出すだけとなった日、家内が、「このような事をするには、久保田先生に相談したほうがいいのではないか」と言うのです。私はハッとしました。夢中になりすぎて先生に相談することをすっかり忘れてしまっていました。早速「静岡の若い人達を対象としてアダムスキー哲学の勉強の場を設けたい。そして日本GAPに入会するための基礎的な知識を身につけてあげたい」と手紙を出しました。三日後、久保田先生より電話で、「その会を日本GAP静岡支部としてやってみませんか」とご指導を頂きました。責任重大だが、「日本GAP静岡支部としてやらせて頂きます」と返事をしました。

返事はしたもののこれからが大変でした。果たして静岡支部として発足できるだろうか。返事をしたその日から日記帳

の備考欄には、「日本GAP静岡支部発足！」と書き続けました。ニューズレターに静岡支部設立準備中の案内を掲載させていただき、県内の会員の方々から多数の激励のハガキを頂いて、大いに元気づけられ、それから三カ月後の一九七八年八月六日、久保田先生をお迎えし、そして県内の会員の方々や県外からも熱心な会員の方々が駆け付けて下さり、日本GAP静岡支部は発足しました。この第一回の集まりで、久保田先生より「静岡の地に宇宙哲学を勉強する場が出来たことは大変喜ばしいことであります。どうか末長く活動されるよう頑張って下さい」と激励の言葉を頂きました。こうして静岡支部は発足し、今日も会員の皆さんと共に積極的に活動をしています。もし家内の一言がなかったなら日本GAP静岡支部は発足していなかったかも知れないと思うと、夫妻とはとても不思議なものであるということを深く考えさせられました。

支部報発行と月例研究会

支部が発足して毎月一回みなさんと会い、アダムスキー問題についていろいろと意見の交換などをすることはとても貴重であり、待ちどおしい月例会であるとともに、月例会が私の生活の一部分として定着してきました。今まで家でただアダムスキー氏の本を読んでいるだけであったが、家では学べない多くの事を月例会で学ぶことができて、お蔭で今までの何倍も視野が広がってきました。以前は自分のまわりのことしか考えつかなかったが、支部月例会に参加できない人達のことも考えるようになり、その人達とも連絡をとり合い、活動を広め、親睦を深めたいと思いましたので〝支部報の発行〟を思いついたのでした。久保田先生からご承認を頂き、一九七九年一月に創刊号が出来、当初は県内の会員だけだったのが現在では全国の会員のみなさんに読まれています。私自身もこの支部報の発行で大変多くの事を学ばさせていただいています。

静岡県は海岸線の長さが非常に長く、月例会に参加される方々も遠路大変ですので、年に一度位は出張月例会を開催して、その地元の人達も参加しやすいようにと考え、第一回の出張月例会は中伊豆の高梨和明氏のご尽力により中伊豆のホテルで開催しました。月例会当日の午前中、高梨氏の車で達磨山にドライブに行き峠のレストランで休憩中、三島市上空を飛ぶ円盤を高梨氏は目撃されました。幸先のよい月例会でした。

雪を頂いた日本一の富士山を眺めながらの月例会は、まさに最高の雰囲気であり、一段と高揚し、そして親睦も大いに深め合いました。月例会も無事終了し、ホテルの前からバスに乗り込んだとき、「上空に円盤がいる！」という強力な印象があったが、降りて上空を眺める時間はなく、バスは駅に向かって走り出しました。熱心にそして真剣にこのような会合に集まってくる人達には、必ず偉大に進化された別な惑星の方々が注目し、陰ながら応援してくれているということがはっきりし、これからのGAP活動に大きな自信と勇気が湧いてきた出張月例会でした。

第二回の出張月例会は、浜松市の小島国弘氏のご尽力で浜松の国民宿舎館山寺荘で開催されました。県外からも熱心な方々が多数参加して下さり、とても充実した月例会となりました。GAPのこのような集まりには何か不思議な事が起こり始めているように感じられました。月例会の際中、上空からの温かい激励の想念を感じとられた方も何名かいます。その他二～三の不思議な事もありました。同じ志をもった人達が集まり、お互い意見交換をすることはなんと素晴らしいことだろうとあらためて感じた浜松の出張月例会でした。

アダムスキー哲学の実践で万事不思議に好調

アダムスキー哲学の教えは、心のコントロール、宇宙の意識との一体化、万物との一体性、宇宙的な超能力といったように地球の殻を破った大変雄大な哲学です。今までは地球のなかで物事を考え行動し、解答を出そうとしてきたため、解明できないものも数多くありましたが、アダムスキー哲学にふれて、地球単位でなく、全宇宙単位で物事を考えてゆくようになると、少しづつ解明されてきます。

アダムスキー哲学は本を読むだけではあまり効果はなく、日常での刻々の実践が大きな効果をもたらしてきます。

私は手近にできることから始めてみました。万物の一体性とありますが、これはすべてのものと仲良しになるということですから、最少単位の家族がまず仲良く円満な生活を送るようにしようということで、今まではとかく各人の欠点が多く目につき、それらを指摘しすぎて、いろいろとトラブルの原因になってきたのがわかってきましたので、各人の持ち合わせている素晴らしい面を見つけ出し、そして自分もそれを見習おうというように、謙虚になり信頼し合うようになって、少しづつ良い結果が出てきました。謙虚になり信頼し合うということは人間が生活をしてゆくための最も基本となることではないでしょうか。

仕事でも私はお客様との人間関係を大切にして信用第一を目的としています。仕事でもいろいろとテレパシーを活用しています。注文を受けた仕事のなかでどの人が一番早く取りに来るか、ある人から近日中に注文が来そうだから前もって準備をしておこうとか、用事のある人にこちらへ来てほしいからとその人に想念を送ったりし、その他いろいろと役立てています。

今年四月中旬頃、ある仕事で見積りをして下さいと問い合せがありました。その仕事は、私の所では今までにない大きな仕事で三カ月位かかる仕事量でした。三カ月間、土曜日と日曜日を返上し、夜遅くまでやればなんとか出来そうでした。まとまった仕事なので経済的にも大助かりですが、私には仕事以外にGAP活動がありますので、GAP活動をストップするわけにはゆきません。五月一日には静岡支部大会、五月二十二日には山形・

仙台合同支部大会と仲人、六月、七月もいろいろとあり、それに毎月の支部報発行もあるので、この仕事だけは絶対に注文がこないようにと強力なミラクルワードを続けました。仕事の注文がこないようにとミラクルワードをする人は、そうは多くないでしょうが、私としてもこのようなミラクルワードは始めてでした。

（編注＝ミラクルワードというのは、望ましい物事を実現させるためにとなえる奇跡を発生させる言葉）

その結果、静岡支部大会も盛況に終了し、山形・仙台合同支部大会にも参加でき、仲人の大役も無事務めさせていただき、支部報の発行も続けてきています。現在の仕事量は多からず少なからず順調にあり、GAPの会合が近づいてくると急ぎの仕事は少なくなるという非常に良い具合に進んでいます。そして家族の協力も得て仕事もGAP活動も楽しく努めさせて頂いております。

プラスの想念貯金

楽しい良き人生を過ごすのには、常に良きイメージを描き、常にプラスの想念を唱えて外部からもぐんぐんとプラスの想念を自分の方に引き寄せるようにして、マイナス想念は間違っても絶対に起こさないこと、これが大切でしょう。

（編注＝プラスの想念とは宇宙的な明るい積極的想念。ポジティブともいう）

私は朝目覚めたときから夜寝るまで、できるだけプラスの想念を起こすようにしています。目覚めたとき、すぐいつもの私のミラクルワードを唱え、その後は、その日の予定している行事がすべてうまくゆくようにイメージを描きます。特に静岡支部月例会の日は力を入れ、会員の方々を思い浮かべ、私が円盤に乗って県内県外の方々の上空に行き、そこからテレパシーを送っているイメージを描き、また偉大に進化した惑星の方々に、「今日の静岡支部月例会にまた激励の想念をお願いします」と送念します。そして今日の月例会は大成功であるとイメージを描いてから起きます。このようにイメージを描いた効果はその日の月例会ですぐ結果が出ますので非常に楽しみです。

また、耳に聞える音はすべてプラスの言葉に変えて唱えています。たとえば、朝目覚めて雨が降っていたとき、「今日は雨か、いやだなあ」というのが以前でしたが、今では雨が軒に落ちるポトンポトンという音に合わせて「ありがとうございます。ありがとうございます」と唱えたり、ときには「健康、健康、若い、若い」と唱えたり、その日によっていろいろの言葉に変えて唱えています。歩くときも靴の音に合わせ、仕事をしているときも機械やいろいろな音に合わせて唱えています。夜は私の家の囲りにはまだ少し田んぼがあり、カエルの大合唱があって以前はとても気になったのですが、今では自分のプラスの想念と一緒になって大合唱してくれていると思っていますので全然気になりません。音という音はなるべくプラスの想念に利用させていただいています。

私はこれを〝プラスの想念貯金〟と名付けています。もうだいぶ貯金ができたと思いますが、先日は、ある事で大部分を引き出してしまいました。といいますのは、車を運転していて、それこそ間一髪で事故を免れたのです。ハンドルを握っている手が汗ばんできたのを覚えています。この時は「自分は救われている」と思ったのと同時に、「これでプラスの想念貯金はゼロになってしまった。また今から貯金のしなおしだ」と思い、ハンドルを握りなおして「ありがとうございました。ありがとうございました」とまた始めました。この貯金が多くなればなる程、私自身は良い事になり、そして私のまわりにも良い影響を与えてゆきます。

私一人がやってもこのように良い効果がありますので、このことを日本中の人達が、いや地球上の全人類がプラスの想念を唱え始めたらどうなるでしょうか。地球はプラスの想念で満ち溢れ、他の惑星からもプラスの想念を引きよせて素晴らしい惑星となることでしょう。

一度に地球全体の想念を変えるのは無理でしょうから、GAPの会員の皆さんが一人一人まず自分の身のまわりから実践し、少しづつその輪を広げてゆけたらどんなに素晴らしいことでしょう。

また、アダムスキー哲学のなかに心のコントロールということがありますが、このことに関して最近あった私の失敗例を恥をしのんで述べてみます。

喫茶店に入ることになり、歩きながら今日はミルクティーにしようときめました。店の入口まで来てウインドーの中を見ると美味しそうなグラタンが目にとまりましたのでそのグラタンを注文しました。

半分位食べてフォークを置きました。しかし残すのはもったいないし、これを作った人にも申し訳ないと思い全部食べました。すると十分間位したら胃のあたりがおかしくなりだし、冷汗が出て、血の気が引いてゆくのがわかりました。これはえらいことになったと思い、立とうにも頭がフラフラして立てません。頭をかかえ、うつむいたままじっとしていました。「今こそミラクルワードとイメージだ！」と思い強力に始めました。

十分か十五分位たったでしょうか、胃も落ち着き、冷汗も出なくなり、立っても大丈夫でした。

グラタンの油が強すぎたのか、少し古かったのかはよくわかりませんが、ミルクティーにすればこんなことにはならなかったのですが、大変恥ずかしい思いをしました。心のコントロール、つまり感覚器官のコントロールですが、私の場合は目の感覚器官がウインドーの中のグラタンを見て美味しそうだと思い、味覚の感覚器官も食べろと騒ぎ立てて、ついに負けてしまったのでした。

その時行ったイメージですが、これは五月一日の静岡支部大会で久保田会長が講演の中で述べられた事を思い出し、試してみました。胃の中に入ったグラタン（悪魔細胞）が大暴れし、これは大変なものが入ってきたと宇宙細胞は全身の細胞に応援を求めて胃に集合し、悪魔細胞との戦いが始まり、その宇宙細胞の総指令官として私がガンバレガンバレと指揮

している光景を描きました。これが大変効果があったように思います。

十数年前にも、ある店で焼肉を食べてこれと同じような症状になったことがありましたが、その時はGAPにも入会しておらず、ミラクルワードやミラクルイメージも知らなかったときでしたので大変な苦労をしたのを覚えています。それと比べると今回は随分早く治ったことになります。

ここでもプラスの想念の威力を感じさせられました。同時に私の感覚器官のコントロールのなさを知りましたが、考え方を変えれば、グラタンを食べたお蔭で久保田会長の講演内容を早速自ら体験でき、そして大いに自信を深め勉強になったのですから、逆にグラタンに感謝しなければいけないでしょう。世の中何が幸いするかわからないと言いますが、まったくそのとおりです。

自分に起こる出来事をすべて良い方に解釈するほどに大きな器の人間になれるよう頑張ってゆきたいと思いますが、これも常日頃のプラスの想念が大きな土台となってゆくように思われます。

素晴らしいUFOの出現

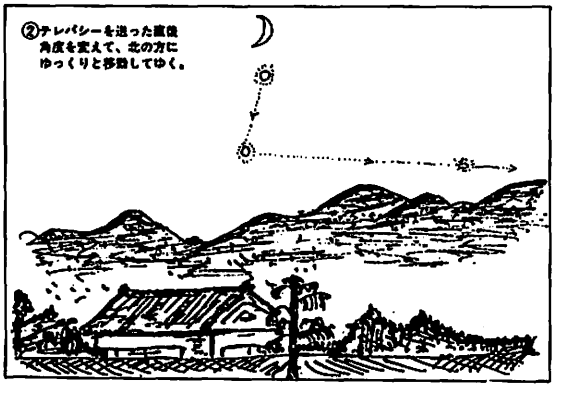
私達の地球には、大昔から偉大に進化した惑星の方々が、人間の真の宇宙的生き方を教えたり、その他いろいろと援助の手をさしのべてきてくれています。私への援助や激励と思われるUFO目撃例のなかから少し述べてみたいと思います。

〈1　オレンジ色の大きな光体に驚く〉

日本GAP静岡支部が発足する前年の一九七七年三月十五日午後九時三十分、仕事が終わり、外に出て、いつものように夜空を見上げたら、桜の木の上空に赤味がかった鮮やかなオレンジ色をし、その周囲に黄金色の光を放っているかなり大きな光体が停止していました。私は腰を抜かさんばかりにびっくりしました。もっと正確に見ようと、仕事場に双眼鏡が置いてあるのを思い出し、急いで取りに行き、外に出たときはもう消えていました。仕事をしている間、なにか自分の想念を観察されていたのかと思うと、とても恥ずかしい気持がしましたが、これからは常に良き想念を持っていようと励みにもなりました。

〈2　テレパシーに答えたUFO〉

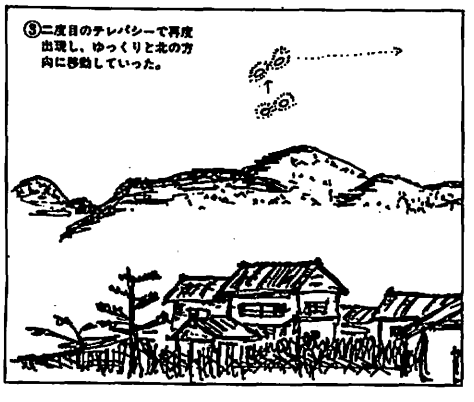
静岡支部が発足する二カ月前の一九七八年六月十四日午後九時、西の空にはきれいな三日月が輝いていました。するとその少し下にオレンジ色の光体がこちらの方にゆっくりと向かってきます。飛行機にしてはいつものコースとは違うなあと思って見ていると、なおもこちらに向かってきますので、テレパシーを送ってみました。すると突然角度を九十度に変えて、こんどは北の方向にまたゆっくりとした速度で飛んで行き、消えるまでかなりの時間目撃することができました。



〈3　UFO、激励に出現?〉

第一回の静岡支部大会が行われた四日後の一九七九年五月十日、夕食をすませて、また仕事に行く頃、西の空はまだすこし明るく、夕焼が残っていました。西北西の方向を見ると二個のオレンジ色の光体がプカプカと浮かんでいました。左側の方が右側より明るいオレンジ色をしていました。すこし明るい夕焼空にオレンジ色の光体が二個、とても美しい光景でした。しばらくしてテレパシーを送ってみたら、明るさがだんだん暗くなり消えてしまいました。そして「またどうぞ出現して下さい」とテレパシーを送ったら、今度はそれより上の所にまた出現してくれました。そして二個並んで北の方向にゆっくりと移動し見えなくなりました。

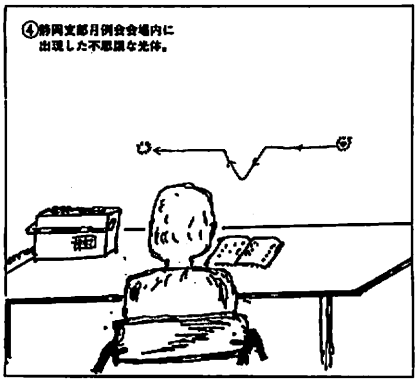
このときは、第一回の静岡支部大会を



開催した直後でもあり、大会を記念して県内の図書館にアダムスキー関係の書物を寄贈しようと思いつき、寄贈運動を展開し始めた頃でしたので激励に出現してくれたのかもしれません。

〈4　不思議な小発光体〉

一九七九年七月一日、この日は静岡支部の月例会で、静岡市民文化会館の会議室で、みなさんと久保田会長の「生命の科学」の解説講義テープを聞いているときのことでした。机の上の本から目を離して少し顔を上げたところ、あずきの豆粒くらいのオレンジ色の光体が、目の前二十～三十センチの右側から現れて水平に移動し、目の前で下に移動し、また上に上がって英語のV又はUという文字を描き、また水平に移動し、左側に消えてゆきました。音はまったく聞こえませんでした。唖然として声も出ず、ただ光体をじっと追っているだけでした。しばらくして冷静さをとりもどし、みなさんの方を見ると、なにもなかったかのように真剣に久保田会長のテープを聞いていました。これは今までの屋外の目撃例などとはまったく違ったもので、とても不思議な体験のひとつでした。



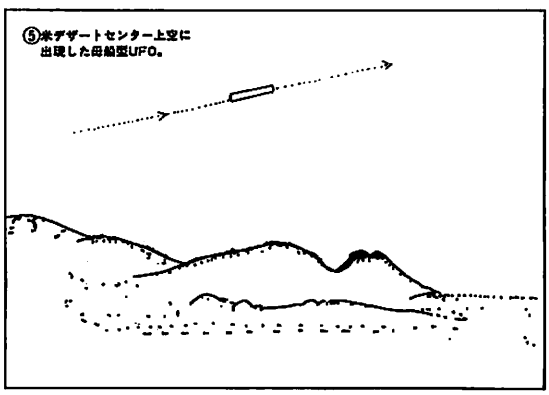
〈5　デザートセンター上空の葉巻型UFO〉

日本GAP企画の海外研修旅行「アメリカ南米宇宙考古学の旅」に参加させていただいた一九八〇年八月十五日のことです。アダムスキー氏と金星人が劇的な会見をしたことで有名な米カリフォルニア州デザートセンターのコンタクト地点の見学の日で、早朝ビスタの町を出発し、朝食をとるためレストランに寄る途中のバスの中で「今日は何かありそうだ」と一人心をわくわくさせていました。

朝食のとき同席のメンバーの一人が、「野口さん今日は（UFOが）出現しそうですか」と質問があり、ドキッとしました。前年の旅行のデザートセンター見学のときは何も出現しなかったのです。その旅行に行く前に見た夢ではデザートセンターに二機の円盤が出現する夢を見たのですが、それは実現しなかったわけですが、質問したメンバーの方も前回の私の夢のことを思い出して質問したのでしょう。

デザートセンターに昼頃到着し、バスを降り、コンタクト地点まで歩いてゆく途中、上空が気になり、見上げるとジェット機が飛んでいました。コンタクト地点に着き、久保田先生の説明を聞き、そして全員記念写真を写そうとしていたとき、隣にいた橘口眞市氏が私の肩をたたくので振り向くと上空を指しています。見ると白銀色の長い物体が静かにゆっくりと移動しているのです。太陽を反射してとてもきれいでした。来る途中で見たジェット機と比べるとかなり大きい。橘口氏はもう一機違う方向から上空を通過していた母船を目撃していました。この日は二機出現していたのです。前年にデザートセンターで二機の円盤が出現する夢を見たのが一年後に実現したわけです。それも円盤が母船に変わるというおまけつきでした。デザートセンターで母船が出現したことはかなり重要な意味があると思われますが、その真相はわかりません。

（編注＝この二機のUFOは編者と他の数名の人も目撃した）



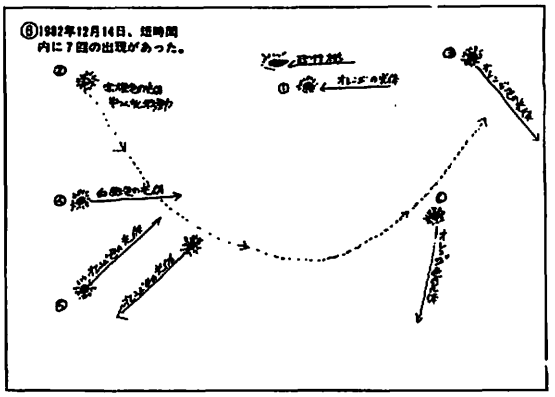
〈6　短時間で七回も光体が飛ぶ〉

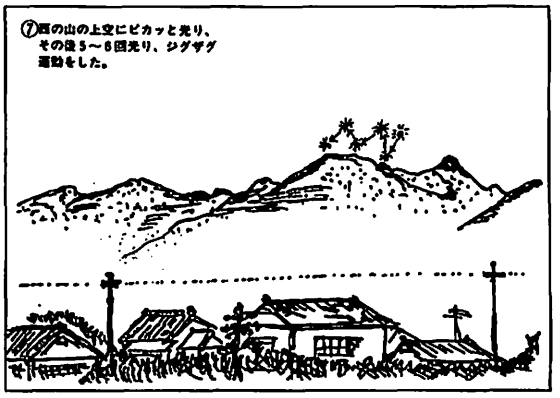
一九八二年十二月十四日午後九時三十分、この日も仕事が終わり、外に出て星を眺めていたら、飛行機が西から東へいつものように赤い光を点滅しながら飛んでいました。するとその斜め後方の下に飛行機と同じ速度でオレンジ色の光体が同じ方向へ飛んで行きます。飛行機はそのまま東へ飛んで行きましたが、オレンジ色の光体は途中で消えました。次に東の方から先程のオレンジの光体を少し暗くした感じの赤橙色の光体がこちらにゆっくりと向かって来ます。私のいるところから向きを変え、南の方へゆっくりと移動して行きました。その赤橙色の光体が消える直前にその方向で西に向かってオレンジ色の光体が走りました。しばらくしてこんどは左手の方向で北東から西に向かって白銀色の光体が走りました。また同じ左手の方向で北から南へオレンジ色の光体が走ります。こんどは右手の頭上から北西の方向にオレンジの光体が走り、しばらくして左手の頭上から北の方向にオレンジの光体が走りました。

このように短時間で七回も目撃したことは始めてのことで、しばらくは無心で夜空を眺めていました。この目撃は私にとって何を意味するのか今もなお考えています。

〈7　テレパシーに応答してジグザグ運動〉

一九八三年二月十五日午後六時、仕事が終わり、西の空を見上げると金星が美しく輝いていました。あまりにもきれいなのでしばらく見とれていました。そし





てアダムスキー氏の書物に述べられている金星の様子などをあれこれ回想していました。そしたら金星に直接テレパシーを送ることを思いつき、十五分間位送り続けました。夕食のために家にもどり、いつもは二階に上がることはしないのですが、なぜか二階に上がり、そしてめったに雨戸を閉めることはしないのですが、この日は雨戸を閉めようと思い、窓を開けると西の山の上にピカッと光るものが見えるのです。「おや！」と思い凝視していると、ピカ、ピカ、ピカと光体がジグザグ運動を五～六回くり返しました。

テレパシーを送った直後でしたので、なぜか胸に熱いものが込み上げてきたのを覚えています。

偉大に進化した惑星から飛来してくる宇宙船を自分の目で一度でも確認することは、アダムスキー哲学を学んでゆくうえでも非常に価値あることと思います。今までの目の前のモヤモヤが一瞬にして晴れ、大宇宙の中に飛び込み、自分も大宇宙の中の一員なのだと強力に感じられるようになります。

各人によって目撃の意味はいろいろあると思われますが、自分なりにその意味を解明するためにも、もっともっとテレパシー能力を身につけてゆかなければならないと痛切に感じています。

驚くほど親切だった医師は異星人！

数年前私の父が病気で入院したとき、こんなことがありました。

病院に入院すると、一日に一回主治医の先生が診察に来てくれるのが普通のようですが、父の場合にはもう一人の若い先生が一日に何回となく診察に来てくれていました。私は病院のことはあまりよく知らなかったのでこれが普通だと思い、よくみてくれる病院だなあと思っていました。

母はこの若い先生が、あまりにも親切すぎるので不思議に思っていました。そして心付けをそっとその若い先生に渡そうとしたら、「お気持は大変ありがたく思いますが、病院ではそのようなことはしておりませんので受けとれません。最善をつくさせて頂きます」と丁重に断られたということでした。

ときどき、その若い先生と話をしているとき、落ち着かないときがありました。そしてある日、父の容態のことで別の室に呼ばれ、いろいろと説明を受けて、最後に、「何か質問はありませんか？」とおっしゃった言葉が何か含みのあるように感じられましたが、よく理解できませんでした。そして席を立ち、お礼を言って室を出ようとしたとき、うしろから非常に温かいものを感じ、そしてなにかに包まれているような感じがしました。

言葉ではうまく表現できませんが、黄金色の光の輪ですっぽり包まれているような、そしてなんとも言いようのない温たかさを感じました。それを言葉で表現するとなると難しいのですが、例の『生命の科学』にある「宇宙の意識の意志は親切で豊かで美しい」といった感じがぴったりではないかと思います。

このような体験は生まれて始めてでしたので、室にもどっても雲の上にいるかのようにフワフワした状態でした。

そして、しばらくして先生が二人の看護婦さんと一緒に診察に来てくれました。診察が終わり、室を出て行くその後姿に向かって「スペースブラザーの方ですか？」とテレパシーを送りました。

（編注＝スペースブラザーというのは友好的な偉大な異星人のこと）

すると先生は立ち止まって振り向き、目と目が合って「そうです」と答えてくれました。その返事は音声で聞こえたのか、それともテレパシーだったのかよくわかりませんでしたが、私と先生の間には看護婦さんと母がいましたので、二人ともそのとき、全然表情に変化はなかったし、あとで母が何か言うかと思いましたが、なにも言わなかったところをみるとテレパシーの線が強いようです。

母はその頃から、私と若い先生の間には何かあるのではないかと思うようになり、「あんたたち二人はどうなってるの？あの先生は私には何も話してくれないよ。敏治ばかりに話をしてて、敏治がいないときは息子さんはどうした、息子さんはどこへ行ったと探してばかりいる」と一種のやきもちをやくようになってきました。

まったく親切な先生でありました。あるとき血液の検査をしたいと言ってみえました。採血は普通は看護婦さんの仕事ですが、先生が直接採血し、そしてそれを検査するのも専門の検査係がいるので

すが、時間外で係の人は帰ってしまったらしく、先生がみずから検査して、私に報告してくれました。「血液は汚れていません。きれいですよ」と言ってくれました。私には、すぐにはこのことが何を意味しているのかわかりませんでしたが、しばらくしてわかりました。

また、朝は早くから「どうですか?」とみてくれたり一日に何回となく診察に来てくれていました。ある日などは、私が仮眠していて起きたとき、母が「今さっき来てくれたよ」と言いました。時計を見ると夜の十二時を過ぎていました。そこで、私は先生の顔を思い浮かべて、「ありがとうございました」と感謝しました。しばらくしたら小さくノックする音がしてドアーが開き、先生が入ってきたのです。私はびっくりしました。さっき診察したばかりなのにまた来てくれたのです。しかも深夜にです。一応、父の顔色をみて無言で出て行きました。

「テレパシーを受けとったよ」と知らせにやってきてくれたのでしょうか。それとも、病院という暗い想念に満ちたところで毎日仕事をしているので、たまに私のような少しでも宇宙問題に関心がある者が来ると先生も嬉しいのでしょうか。私も親しい人と会うように言葉を交わさなくても顔を会わせるだけで満足でした。

いろいろお世話になり、母と弟が診断書をもらいに病院に行ったとき、先生はこころよく書いて下さり、廊下のところまで見送ってくれましたが、エレベーターのところまでついてきて一緒にエレベーターで一階まで行き、先生は一階に用事があるかなと弟は思いつつ病院の玄関まで来ましたが、まだ先生は一緒について来たそうです。そして駐車場のところまで来てくれ、車に乗り、病院を後にしたが、先生は車が見えなくなるまで見送ってくれたということでした。病院の一先生が見ず知らずの一患者にそしてその家族の者に、こうまで親切にして下さるそのお気持には、まったく感謝の言葉がありませんでした。

高貴な隣人の地球援助活動

隣近所の人に何かあったとき、すぐ飛んで行って助けてあげる人が何人位いるのでしょうか。それが隣の町の見ず知らずの人の事になると、どうでしょうか。それが隣の県の人では、それが外国となればどうなるでしょうか。「まったく私達には関係ないことだよ」と言う人がほとんどではないでしょうか。

しかしそれを実践している人がいるのです。しかも、もっともっと離れているのにもかかわらず援助の手をさしのべているのです。それは地球の隣の惑星などで、惑星単位で地球を援助してくれているのです。地球の住人が助けて下さいと特別お願いしている訳でもないのですが、太陽系全体のレベルアップをも含め、大昔から、強力な愛と強力な信念と、絶対にあきらめない力を駆使して、地球の住人の宇宙的向上のため、一丸となって援助の手をさしのべてきているのです。

この事実をほんとうに理解し知っている地球の住人は何人いるのでしょうか。

私達日本GAP会員は、アダムスキー氏の体験と教えを日本で紹介して下さった久保田会長のお蔭をもちましてこの事実を知っています。しかし、知っているだけでなにもしないでいては、援助に来ている方々に申し訳ないと思います。彼らが一番望んでいることは、彼らの教えてくれた宇宙の法則を生活の中で各自一人一人が実践し、そしてその輪を広げて宇宙的向上を図ってゆくことだと思います。

また彼らは、地球上ばかりでなく、地球のはるか上空でも、この地球に対して良くない目的で来る他の惑星の人からも守ってくれているのです。彼らの地球への思いやりは、私達の通常の理解をはるかにこえた大変偉大なそして高貴なものです。これが本当に宇宙の法則を生かしている実践者達なのでしょう。

(記事中のイラストは筆者描く)

▶筆者・野口敏治氏。去る五月一日、静岡支部大会において静岡支部報五十号発行記念として支部会員より祝を贈られた。

沖縄に出現した宇宙人

そのとき懐かしい感じに満たされた――

●新里義雄〈日本GAP沖縄支部代表〉

今を去る十八年前、沖縄にUFOと異星人らしき〝人間〟の出現にキモをつぶした人がいた。赤嶺幸雄氏がそれである。話の大要は次のとおりだ。

氏が中学三年の頃、高校入試がせまって毎夜遅くまで受験勉強をやっていた時期のある寒い日、五人兄弟の母子家庭のため、食事当番から水汲みや洗濯などはすべて当番制で兄弟がやっていたので、その日水汲みの仕事を割り当てられた氏は、夜になって家から二十メートル離れた井戸へタライをかついで行った。

▲目撃者・赤嶺幸雄氏

暗闇の中を月明かりだけを頼りに、鼻歌まじりにタライに水を入れて食器を洗っていたとき、ふと西の空を見上げた氏は、心中、大声で叫んだ。「あれは何だ？」

血が凍るような思いで見つめる暗黒の夜空に、赤味がかったオレンジ色のあざやかな奇妙な物体がぽっかり浮かんでいるのだ。それまで見たこともない変形物である。

音もなく空中に停止しているこの不思議な物体を少年は呆然と見つめていたが、しばらくしてその物体は左の方へ移動して森の彼方に消えるかと思われた。しかしまもなく森の中から上方へまっすぐに昇り始めた。そして視界から消え去ったのである。

我に返った赤嶺少年は大声で母を呼んで、一部始終を話したところ、母親は笑って言った。

「おまえが見たのは人魂(ひとだま)だったんでしょう」

しかし少年は母の話を信じきれずに、その夜はショックの激しさで勉強が手につかず、そのまま夜をすごした。

二、三日後、二階の勉強部屋にいた少年は学習の手を休めて、背伸びをしようと立ち上がった。午前二時頃である。

外で人の話し声がするのを不審に思い、戸をあけないで戸の節穴(ふしあな)から外をのぞいた少年は心臓がとまるほど驚いた。

月光をあびた二人の人間らしい姿がはっきりと見えるではないか。

どちらも背が低くて男女の区別はつかない。頭部はヘルメットのように見えて、着ている服は赤色とも金色ともつかぬ色でキラキラ光っている。

約三分間見つめていた少年は、夢を見ているのではないかと自分を疑い、節穴から顔を離してわが目をこすってから、ふたたび穴をのぞいてみたが、もう人間の姿は消えていた。

勇気を出した少年は戸をあけて、あたりを見まわしたが、だれもいない。寒い深夜になぜ人間二人がこんな場所に？そしてあの奇妙な服装は？

複雑な思いにかられながら森の方を見ると、二、三日前に見たのと同じ物体が森の中から西の空へ上昇して行くのが見えて、少年はまたも驚愕した！

以上の事件はまぎれもない事実として今なお沖縄の刊行物に載ったりする。筆者は某ガイド誌に掲載されたこの事件の記事が真相をかなり簡略化し、最も重要と思われる部分が省略してあることを知って本人とのインタビューを試みることにした。

この事件には他の目撃例に劣らぬほどの重要な意義が含まれていると思う。目撃中、驚きながらも恐怖心は起こらず、むしろ本人をとらえていた特異な感情とUFO目撃後二、三日して今度は乗員とおぼしき二人の〝人間〟が目前に姿を現したからだ。

以下は今年二月五日（土）、沖縄市で行った目撃者・赤嶺幸雄氏との対談である。氏は現在二十余名の社員をかかえる総合食品卸商会の社長として活躍している。

――あなたが他の天体のことについて関心を持たれるようになったのは何歳頃からですか。

「私は銀河系とか太陽系といったことが好きで、これは小学校五、六年頃に芽生えました。本もこうしたもの以外はあまり読みませんでしたね。そのうちに、実際にあの場面に直面してしまって――。とにかくあの気持は実際に見た人でないとわからんだろうね。怖いという感じがなかったんです。とにかく何と言いま

すか、引きずり込まれてゆくような感じなんです。ジーッと見ていてボケーッとしてしまうんです」

目に残らぬ不思議な輝き

――その物体の大きさはどの程度だったんですか。

「ものすごく大きな物ですよ、あれは。こんな程度の物ではないんです（両手を広げて表現する）。距離は目測で一キロぐらい離れた位置でした。空中にジーッと静止しているんです。本体は円い物だったろうと思います」

――直径が十～十二メートルぐらいで、高さは二～三メートルといったところでは？

「そうかもしれません。とにかくワーッと燃えているみたいなんです！　私は人魂を何度も見ていますから、あれが人魂でないことはわかるんです。

とにかくまぶしいんですが、かといって目に残らないんです。たとえば輝いている電球をジーッと見たあとで目をそらすと、それが目に残りますね。それがないんです。そしてとにかく、すごく鮮やかなんです。色は真っ赤にも見えたし、黄色いような感じもありましたね」

――普通はオレンジ色と言っていますが。

「ええ、ダイダイ色のような――いわばダイダイ色ですよ、あれは。そして〝周囲が燃えている〟といった感じなんです。

かといって何というか――すごく軽そうにも見えましたね。周囲とは違って中の方は色が違っていましたよ。何かを包んでいるようでした。

しばらくジーッと見ていました。ただもうあまりにも不思議な物ですから――。

そしたら、そのうちに左の方へ移動を始めて、山の後ろへスーッと隠れてしまったんです。あっけにとられていたら、しばらくしてから、またそれがスーッと上昇して現れたんです。要するにさっきとは直角に上昇して行ったわけです。そしてそのままま すぐに昇って行って、しまいには見えなくなりました。最近はその山に市営住宅が建っていますがね」

安らかな懐かしさを感じる

――最初の目撃の場所はどこですか。

「田場です。具志川市の田場です。そこが私の出身地です。田場という所は山の間の盆地のようになっているんです。電波も届きにくい所です」

――何時頃だったんですか。

「十時頃か――とにかく十二時より前でした。ですからほかにも見た人がいたかどうかは知りませんがね」

――そのときはお母さんの手伝いをなさるというんで、夕食の茶碗などを洗うために井戸のそばにおられたそうですね。

「そうです。ちょうどその日は私の当番になっていたんです。母子家庭だったもんですから――。母は畑仕事やら何やらいろいろと一人でやっていましたからね。食事の仕度まで――。ですから夕食のあとかたづけは皆で当番をきめてやっていたんです」

――そうですか。ところでUFOを見ていたときに、妙な安心感があったということですが――。

「そうなんです！　ズーッと引き込まれる感じで、ただもう〝非常に懐かしい〟といった感じでした。初めて見る物なのにですよ！

たとえば母親のふところの中で赤ちゃんが眠るような感じとでも言いますかね。別に怖いという気持がないんです。初めての体験がこれなもんですから――。それで鮮明に憶えているんです。ですからだれに話しても何千回話すとしても同じことしか私には話せないんです。二、三度人に話したことはあったんですが、みんな笑うばかりで――。しまいには自分はバカにされているのかなと思ったりしてね（笑う）」

乗員が目前に現れた!?

――それから二、三日後のことだったんですね、不思議な人間が現れたのは――。高校の受験勉強中の真夜中ですか。

「そうそう、そうなんです。ああ、そのことがね、すごく――いまだに気がかりなんです。そのことが――」

――ガイド誌の記事によりますと、牛小屋の前に――？

「いや、あれは違うんです。牛小屋の前ではないんです。私はそうは書かなかったんです。

私の勉強部屋は（図を描いて示しながら）この二階にあったんです。月夜であったからわかったんですね。雨戸の節穴からのぞいたんです。

〝人間〟の色が鮮やかに見えるんです。月夜であっても普通でしたら黒っぽく見えるはずでしょう。

とにかく変わっていたのは、裸のようでもあるのに、やはり何かを着ていたことです。全体が金色のようなんです！　ダンサーが踊るときに着るあれのようにピカピカキラキラした感じなんです。月夜でしたから――。

二人とも背丈は一メートル二十センチ前後といったところでしょうか。塀よりは高くなかったんですが、それでも塀から離れていたから、ここからでも見えたんです。

頭には鉄カブトのような感じのものをかぶっているようでしたよ。小人の戦士みたいと言えばよいか――、でもオモチャのあれとは違って――」

――人相ははっきり見えませんでしたか。たとえば目とか鼻とか口とかは？

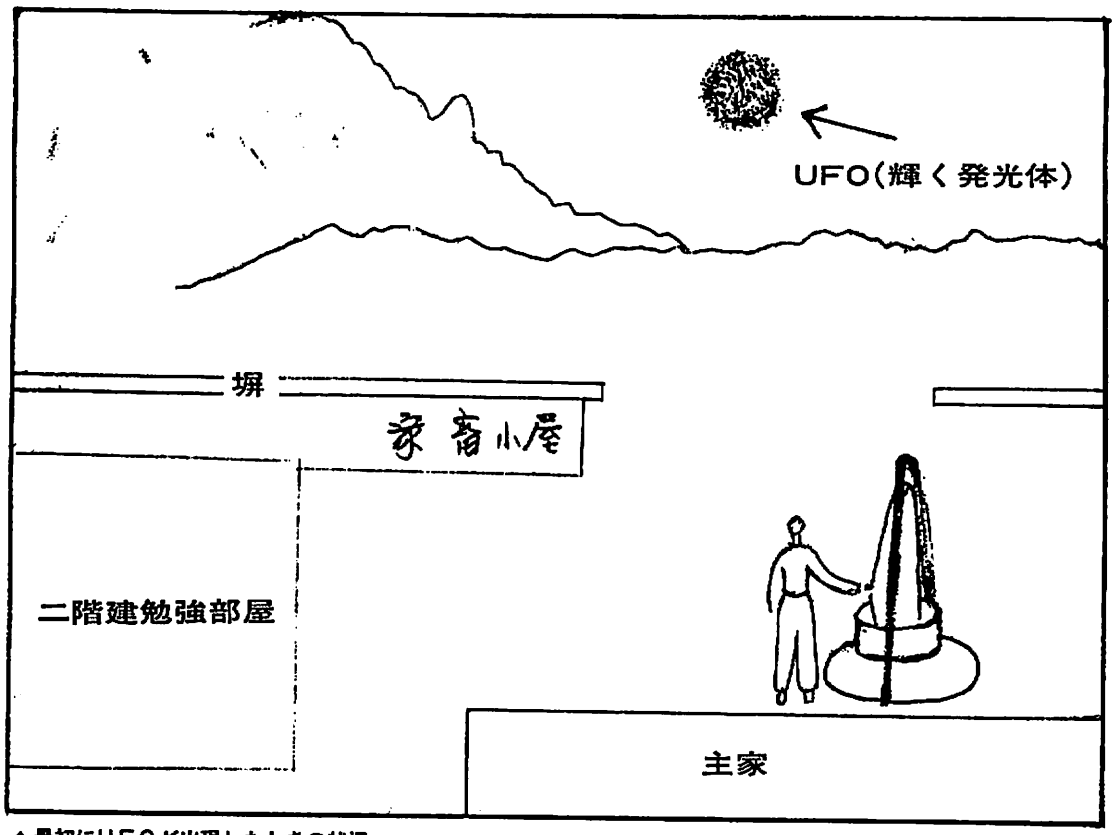
「はっきりしません。ただ全体にぼかり気をとられていましたから――。それにそれほどの明るさでもないし――」

――なにやらヒソヒソ話し合っているようであったと――？

「ええ、なにやらわけのわからないペチャペチャという変な音が聞こえたんです。何を話しているのかわからなかったんですがね。話をしているんだろうなというだけのことだったんです。

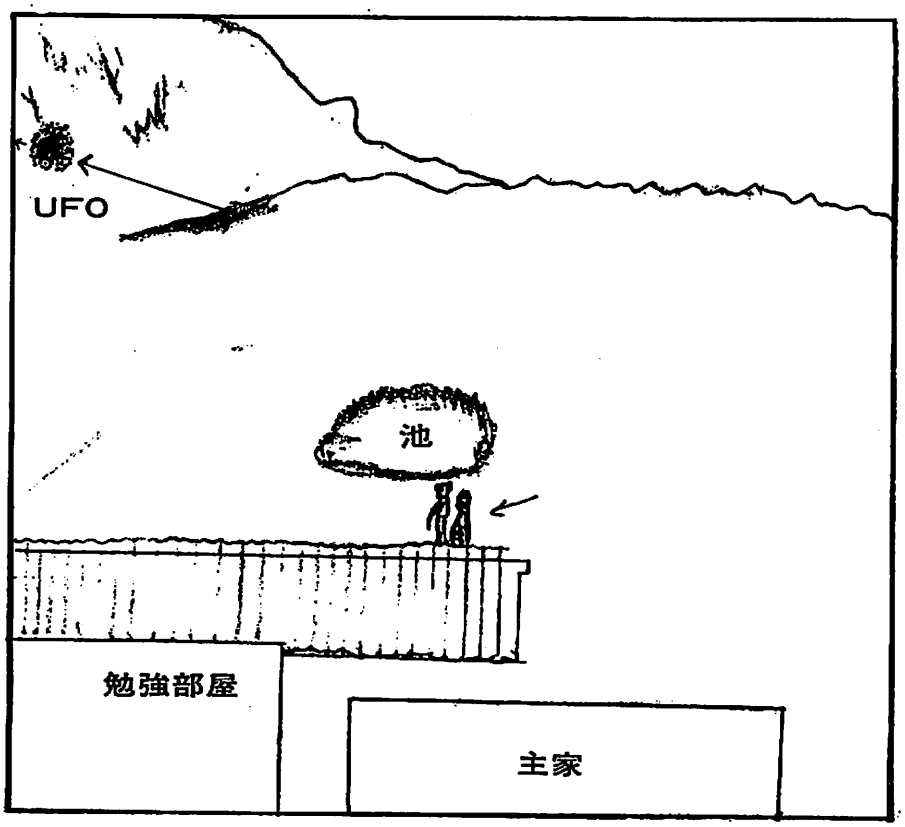
ただもう腰を抜かすほど驚くとはあのことだろうなあ。あの当時のことで、あした服装を見たこともありませんからね。

要するにあれはチンドン屋――いや、



▲最初にＵＦＯが出現したときの状況

●赤嶺氏によるスケッチ



◀二人の不思議な〝人物〟が現れた図。

そう言ったらちょっとおかしいな。あ・で・や・か——は・な・や・か——とにかくはでな感じでしたね。でも人間だったかどうか私は知りませんよ」

——どれぐらいの間見ていたんですか。

「さあ、あまりにも特異なことだったので、自分が夢を見ているのではないことを確かめてから、もう一回のぞいたんです。そしたら、もういないんです。それで思いきって雨戸をパッとあけてのぞいたんですが、やはりいないんです。

そこで塀にかくれて見えないかもしれないと思って、窓からトタン屋根を恐る恐る四つんばいになって近づいて行ってのぞいたんですが、やはりいません。

そのときです！　家の向かいにある、その山のあたりから、その郷く物体がスーッと音もなく斜め左へ一直線に飛び去ったんです。そして、それきりなんですがね」

——季節はいつ頃ですか。

「冬です。受験が三月でしたから——十二月前後でしたね」

あるいは宇宙ロボットか

——寒かったということであれば、鉄カブトのような物は防寒具であったことも考えられますね。

「とにかくあれがもし人間であったとしたら、そのようにも考えられますが、もし人間でなかったとすれば、そうは考えられないんです。つまり宇宙服みたいなというイメージしか私にはないんですがね」

——何か話し合っているように感じたのであれば、人間であったことに間違いはないと思うのですが——。

「いやいや、それが人間の会話といった感じではないんです。発音が違うんです。ノドから出る声というものは英語にせよ何語にせよ人間の声であることはわかります。私も歌をうたっていますから声楽の面は——。あれはそんな〝声〟ではないんです。ただのペラペラペラペラという感じなんです」

——そうしますと、たとえばロボットだったという可能性は？（ここで彼は考え込んだ）

「そう言われると——待って下さいよ——わからんな——でもアッというまにいなくなったんだからね、要するにね、いなくなって二、三分間であんな遠い所まで移動していたわけだから、今でいうテレポートという感じしか考えられないもんね。だからちょっとわからなくなったな。人間だったかロボットだったか——」

心の準備はできている

——そうですか。まあとにかくそのことがあってからUFOに関心が起こったのですか？

「そうです。よくあのときのことを思い出すんです。たとえば長距離を飛行機に乗っているときでも、あまり眠らないんです。雲を見ながらあのときのことを考えて——。

また会えそうな気がしましてね。もう一度会いたくてね。そのために双眼鏡も買いましたよ。ちょっと値の張る物をね。

UFOに関する新聞記事の切り抜きなどもやっています。不思議なんです。なにげなくラジオのスイッチを入れると、ちょうどUFO事件のニュースが流れていることがたびたびあるんです。

家内にも冗談まじりに言うんです。もしも再度こうした地球の物でない未知の物に遭遇したときに、私を連れて行こうとするのであれば、自分は行くよとね。遺言みたいに話してあるんです。私を調べるために連れて行くというのであれば、いつでも心の準備はしてあるよと話をするんです」

——私にちょっと興味があるのは、一度ならず二度も彼らがあなたの近くに現れたことなんですが、これについて何か——。

「私にもその辺のことがよくわからないので、よけいに気になるんです。私に何を言いたかったのか、何をどうしたかったのかと」

——単なる偶然ではないような——？

「そうかもしれませんね」

——あれ以後、似たような体験はもうないんですか。

「あれっきりです。当時から最近まではもっぱら生活のことやら仕事のこと、事業や金儲けなどにばかり気をとられていましたね。最近になって仕事以外のことを考えるゆとりも少しはできるようになりましたが——」

——そうですか。あの記事（某ガイド誌に載った体験記）は、UFOの目撃体験があれば書いてくれと頼まれて書いたのですか？　あの方はUFOについての話を初めからバカにしてかかるタイプの人ですか？

「いいえ、彼からUFOの体験をと頼まれて書いたわけではないんです。ただ私にはあの体験が強烈なもので、それで書いたんです」

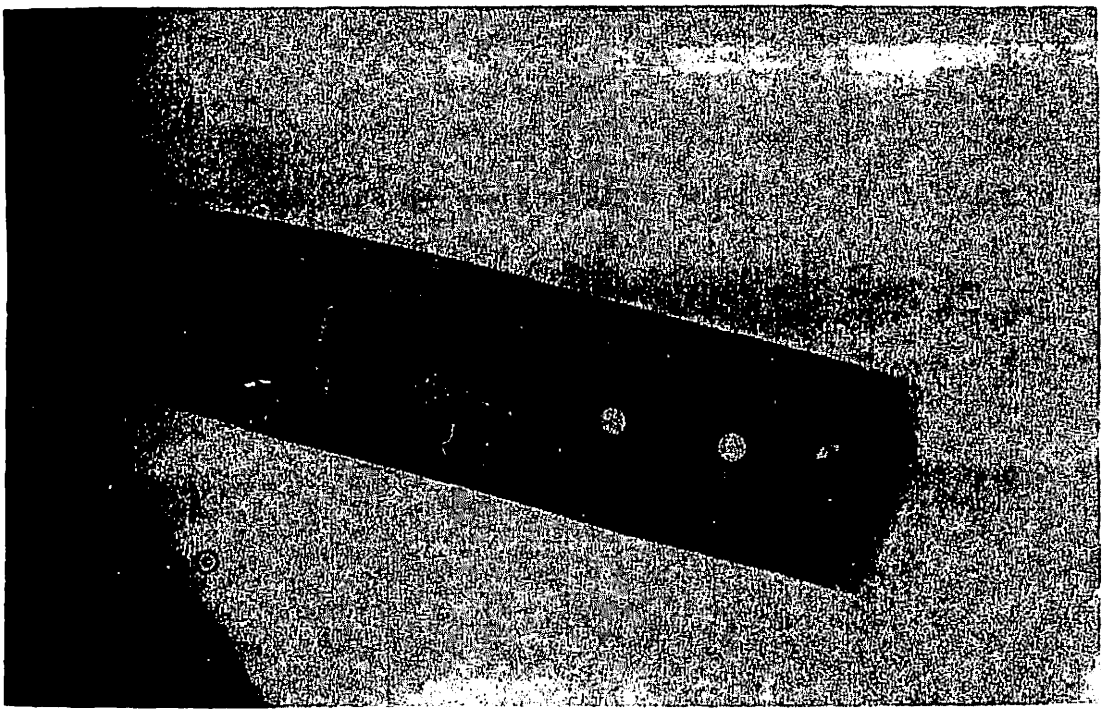
なぜ宇宙に目を向けないのか

——最後にこの問題について何かお話しなさりたいことがございましたらどうぞ。

「はい。広大な宇宙の、無数の太陽系の中の天体で、地球だけに人間がいると考えるのはおかしな話です。広大な宇宙からみると地球はゴミみたいなものです。

地球が誕生してから四十五億年たつともいわれていて、そこでの人間の歴史はまだ浅いにもかかわらず、たしかに地球人は現在のような文明を築き上げてきたわけですが、この文明も別な天体から見ると、これは彼らが遠い昔に通りすぎた段階で、今では我々からすれば想像もつかないほどの進歩をとげた文明があると思うのです。その彼らが地球に来るのは何十億光年離れていようが、わけないことにまでなっているだろうと考えます。彼らが地球まで来るのは我々が車を運転して那覇まで行って来たりするのと同じほどに容易なことだろうと思えるのです。（ちなみに、熱っぽく語る赤嶺氏はこの時点ではまだアダムスキーに関して全く知らない人である）

彼らからすれば地球は非常に遅れているということです。ですから彼らが地球へ来ても大衆の面前に公然と姿を見せな



▲1952年5月1日、アダムスキーが6インチ反射望遠鏡で撮影した母船。
左側の黒い影は鏡筒によるケラレ。フォースフィールドのため、いびつに写っている。

いのは、これに関係があると思うのです。たとえば我々が原始人の面前に機関銃を持っていきなり姿を見せたら、驚いて駆ぎ出すにきまっています。これと同じに、彼らが今地球人の大衆の面前にいきなり姿を現したら、パニックが起こるにきまっています。これはもう大変な問題になりますね。戦争だの何だの、アメリカだのソ連だのと言っていられないことになりますね。

いったいみんなは何を考えているのかと言いたいんです。なぜ同じ人間が戦争だの何だのとやる前に、宇宙に目を向けないのかと思うんです。金があれば戦争をするための武器を作るよりも宇宙開発のための科学的な面に全力をそそげと言いたいのです。私がもし大国の指導者または権威者であったとすれば、この面への世界的な大計画を持つように働きかけたいところです。

しかし、こうしたことも関心のない人に話したって始まらないことなんですがね。

たとえば地球人がまだ成しとげていない乗物で、地球まで来るほどに高度に発達した彼らの科学力を、地球人の科学力による武器で破壊することができるはずがありません。つまり地球の科学ではついてゆけない現状にあるわけです。

ですから我々はもっとこのことを考えて、この面に目を開かなければならんのではないかと申し上げたいのです。今日だの明日だのと目の前のことを考えているだけでは——これも生きてゆくのに大事なことではあるけれども——だめですね。少しはこの問題（宇宙の問題）にも目を向けるべきでしょう。

我々はしょせん短い一生という寿命のなかであくせくするだけです。だからせめて命のあるうちに、たとえば一つの段階として地球人みんなの全力を結集して宇宙ステーションを造り、将来にたいする備えをするべきだと思うのです。こうしたことにエネルギーをそそぎ、子孫にたいして我々は大きな物を残すべきだと思うのです。それが本当でしょう？」

——全く同感です。これがやれれば失業だの不況だのという問題も、戦争問題すらも一挙に解消してしまうんですがね。今日はどうもありがとうございました。

筆者付記

赤嶺氏は初めて会ったときから活発で、バイタリティーを感じさせる二十二歳の人物である。現在も十八年前の日撃場所である具志川市田場に在住され、食品関係の会社を経営しておられるが、UFO問題に精通しているようには見受けられなかった。アダムスキーについても私から聞かされて初めて知ったのである。そのような氏の口から出る地球人の覚醒をうながす言葉は驚くほど進歩的・宇宙的で、傾聴にあたいするものがある。最後に『宇宙からの訪問者』と日本GAPの入会案内書をお礼がわりに差し上げて私は家路についた。

○○○○○○○

スペースプログラムへの協力と宇宙的成長

伊藤達夫〈日本GAP松山支部代表〉

私は日本GAPの東京月例会に出席するたびに、上野の森へ来て、故郷へ帰ったような懐かしさと心の和みを覚えます（東京月例会は上野の東京文化会館で毎月開催）。上野の森の緑の木々や小鳥たちやアカデミックな文化の殿堂が建ち並ぶ様子にはたまらない魅力があり、強く心をひかれています。

大学時代には授業で数多くの講義を受けましたが、日本GAP会長・久保田八郎先生の宇宙的フィーリングに溢れた高次元なご講義に比較すれば、かつて受講したいかなる教授による講義もその足元に及ぶものではありません。

先生のお話をお聴きしていますと、不思議な高揚感に満たされて、この地球にいながら別な惑星の教室で学んでいるような錯覚すら覚えます。この地球といういまだ低次元な精神レベルにある惑星で、これほど宇宙的なお話が聴けること自体が驚くべきことであり、いい知れぬ幸福を感じています。

GAP活動こそ私の人生の目的

約三年前に松山支部が設立されたのを機会に支部代表にさせて頂いたときが、私の事実上のGAP活動の始まりでした。そこに至るまでは人生における自分の本来の役割が全く認識できず、一銀行員として多年のあいだ終日お金の計算に追われる生活で、残業につぐ残業、休みもまともにとれない状態のなかにあって、心は荒れ放題となり、テレパシックな感知力はおろか、およそ宇宙的な印象を感受するには程遠い人間になり果てていました。

しかし支部活動を始めて以後は急速に宇宙的な方向に変化してゆきました。それを可能ならしめたのはひとえに久保田先生との出会いであり、熱心な会員の方々の激励のおかげでした。ここにおいて私は長く人生で探し求めていた今生での役割を見い出して、ようやく精神面での放浪生活にピリオドを打ち、定住する場所を見つけることができたのです。

この三年間のGAP活動を振り返ってみますと、自分で申すのも恐縮ですが、予想外に積極的に活動している自分の姿におどろいています。本来はむしろ消極的で内向的な性格の私が、どういうわけかGAPのことになると全く人が変わったように生き生きとなるのです。自分の意志とは違う何かの力が背後から後押しをしているような気がするときがあります。

スペースブラザーズは注目している

「スペースブラザーズ（友好的な異星の人々）は確実に日本GAPを見守り、援助して下さっている」と久保田先生はよくおっしゃいます。先生は昨年六月にすごい体験をされました。

昨年七月の静岡支部大会の翌日、たびたび円盤が出現したのをこの目で確認できたことは、日本GAPとブラザーズが協力してスペースプログラムを遂行している事実を確かめたことになり、きわめて貴重な体験でした。

日本GAPに入会したのは九年前のことでしたが、その間に私なりに以前から宇宙空間に関連したいろいろな体験を通じて（UFO目撃その他により）アダムスキー問題を探求する上で客観的な裏付けを得ることができ、そうした体験がGAP活動のための強力な支えとなり、確固たる信念と正道をはずれない指針になったのです。

日本GAPに入会するずっと以前から私は他の惑星とその文明に思いを寄せ、そこに住む人々と地球に来ておられるスペースブラザーズの存在に深い関心を持ち続けてきました。私たちが今学んでいる宇宙哲学の書物も、アダムスキー氏を通じてブラザーズから与えられたものです。

この事実を考えますと、ブラザーズなくして宇宙哲学はむろんのことGAP活動すら語れないと痛感しています。私たちがまじめな態度で宇宙問題と宇宙の法則に関心を持つならば、ブラザーズはかならずあたたかく見守って下さると信じています。

アダムスキーの著書を学ぶ

中学生の頃にアダムスキーの体験記に触れて以後、私は地球に来ておられるブラザーズの方々に、機会があればぜひ一度お会いしたいという願望を持つようになりました。どんな方々なのだろうかとあれこれ考えをめぐらせていたのです。

▲筆者・伊藤達夫氏（左）と久保田会長

しかし自分がお会いする資格を得るには前方に遠い道のりがあることはわかっていました。どうすればよいかはよくわかりませんでしたが、ただ自分がまじめな態度で宇宙に関心を持ち、他の世界の人々から謙虚に学ぼうという気持があれば、いつかは会える日が来ると信じていました。

そのためには自分の想念レベルをある程度高める必要があることに気づいて、大学に入学してからはアダムスキーの、「空飛ぶ円盤同乗記」(「宇宙からの訪問者」と改題の上、改訳版を文久書林よりアダムスキー全集第一巻として刊行中)や「空飛ぶ円盤の真相」(これも「UFO問題の真相」と改題改訳の上、全集の第二巻として刊行予定)などをテキストとして使用しました。これらの書物には宇宙哲学の大要が述べてあり、想念を抑制すること、万人を平等とみなすこと、古い習慣的想念を排除して新鮮で宇宙的な想念を保ち、それを生活で実行すること、あきらめないで忍耐強く努力することなどが書かれてありました。

その頃はGAPに入会する前だったので、想念観察やテレパシーの開発については何も知らなかったため、自己流で生き方の原則ともいえるものを考えて努力してみました。

私なりの宇宙的生き方の原則

その第一は「古い習慣的な想念にとらわれない生活をする」ということでした。現実の社会では因習にとらわれた古い考え方が根強く存在権を主張し、あらゆる分野で無知と偏見に起因する差別が存在しています。多くの人々がそうした考え方が正しくないことを知りながら、自己の身の保全と恐怖のとりこになって、そこから脱却する力と勇気を持たないで不本意な生活を送っているのです。

最初のうちは内部から起こる古い想念と行為を新しいものに転換する努力を続けた結果、今では前時代的な考え方の中核をなしている人種や民族、男女の差別、家柄、身分、職業、学歴などによる差別と偏見がことごとく心から消滅するに至りました。そしてすべての人を創造主から与えられた役割によって平等とみなし得る心境にまで達することができたのです。他人に接する場合には、だれであろうとその社会的地位や立場に関係なく、放たれる人格の響きと人柄とによって判断するように心がけています。

第二は「絶対に感情を抑制することができる」という盲目的信念を持つことでした。その頃は想念観察の方法を知らなかったので、かわりに「破壊的感情のドレイにはならない」という強烈な信念を心に吹き込みました。

この方法はいたって単純なものでしたが、意外にもかなりの効果を発揮して、それまでなにかと怒りっぽい性格が、かなりおだやかになったのです。これにはアダムスキーの体験記の中で火星人のフォーコンが「破壊的感情は一度悟りさえすれば抑制されるかまたは完全に消滅させることができる」と述べている点に注目し、他の進化した惑星の人が語っているのだから必ずできるはずだと信じ込んだのが予想外の効果をあげた原因ではないかと思います。

スペースブラザー(?)に会う

私が、初めてスペースブラザーではないかと思われる人に出会ったのは大学二年の春のことでした。それは大阪府下のある組立工場へ見学に行ったときのことです。

春のある日、文学部の教授の助手が、「T教授が工場見学をするので伊藤君を誘ってみてくれないかとおっしゃっているんだが、行ってみないかね」と話しかけてきたのがきっかけでした。

ふだんその教授とはさほど親しい間柄ではなかったので、なぜ誘ってくれたのか不思議に思いましたが、せっかく声がかかったものですから同行させて頂きました。

行ってみると集まったメンバーは教授や助教授、それに助手といった人たちばかりで、一般の学生は私一人という、なんとも不自然な組み合わせでした。

最初に一室に通されて社の幹部の人から概要についての説明が行われましたが、その部屋には他にも三、四名の社員が同席していました。

そのなかに不思議なフィーリングを放つ人が一人いました。その人は三十歳ぐらいの男性で、私たちへの接待係のような役目をする人だったと思います。目はぱっちりと大きく開かれ、肌のキメがこまかいのが印象的でした。

その人をひと目見るなり、「この人は普通の人ではない」という異常な直感が内部からひらめくのを感じたのです。その頃すでにプラザーズに深い関心を寄せてはいたものの、この日本国内に日本人そっくりの顔をしたプラザーズがいるとは考えてもいませんでした。

しかし今、目の前に愛と調和に満ちた形容しがたい波動を放つ人物に接して、盲い知れぬ精神の高揚感と畏敬の念が湧き起こるのを押さえることはできません。並いる教授や会社の重役がその人の前ではまるでしおれた枯れ尾花のように見えるではありませんか。ここには全く次元の異なる人間がいるのです。

その人から放たれる高次な想念波動が淡い粒子となって私の体をさらさらと浸すように思われます。約十五分間というものは高揚のあまりにまともに顔を上げられない状態でしたが、その人はその間もあたたかく私を見つめていて下さいました。

そのあと、その人が立ち上がって工場見学の説明をされたのですが、その発音は完全な標準語で、美しい自然のリズムを伴って心地よく響きました。その場に居合わせた全員が関西弁か関西なまりの発音なのに、なぜこの人だけが完璧な標準語を話すのかと、不思議な思いにかられるのでした。

続いて工場内の視察に移りましたが、この間、約一時間あまりこの人と行動を共にすることができました。

この体験は遠い昔の思い出になりましたが、今でもその光景を思い浮かべるた

びに何ともいえぬ高揚感にひたります。この人が果たして本物のブラザーであったかどうかについては何の確証もありません。私の思い違いなのかもしれません。

しかしその人が真のブラザーならば、その高次なフィーリングを記憶しておけば、先々スペースブラザーらしい人に出会ったときに見分ける基準として役立つはずです。そして後年、ブラザーかどうかを見分ける際に、このときの体験が役に立ったのです。

今度はスペースシスターが出現?

その後月日は流れて松山支部が設立され、支部代表として本格的にGAP活動を開始しようとしていたときに起こったある体験を述べてみましょう。

五十年の春に第一回の松山支部大会が開催されたあと、正式に松山支部が設立されて、四月の第四日曜日に最初の月例研究会が開かれるのを二週間後にひかえた日曜日、私は四国の山間の町で不思議な人物と対面したのです。

支部代表をお引き受けしたものの、不慣れなこともあって多少の不安も起こり、うまくゆくかどうかと思案していたときでした。その町には親しい親類の家があったので、日曜日にもなるとよく訪れたのです。

汽車で行くとけっこう時間がかかるのでいつもは自動車で行くことにしており、その日も車で行くつもりでした。ところが急に内部から「汽車で行きなさい」というはっきりした印象が起こったのです。心は「なんで倍も時間がかかる汽車で行かねばならないのか」と思いましたが、一応その印象に従うことにして、早朝の汽車に乗り込んだのです。自分でも何のことやらわからず、けげんな気持が続いていました。

その町の親類の家に落ち着いたあと、午後からふとした用件で街中へ出ることになり、街の中心部の大通りに並行している裏通りを歩いていて、ある十字路を左へ曲がったとき、突然一人の若い女性が近寄って来て、私に話しかけたのです。

年齢は二十四、五歳で、色は白く、肌のキメはこまかく、丸顔で、白いスーツに身を包み、白いハイヒールをはいていました。話しかけてくる言葉使いは美しい完璧な標準語で、そのリズミカルな響きが心地よく私の耳をゆさぶりました。

その女性はその土地の人ではなくて、どこか遠方から来たらしいことがわかりました。その場所は、もし私が車で行っていたら決して会うことのない所です。

彼女の美しいリズミカルな声、一点の曇りもない澄みきった高貴な噸、気高く高次なフィーリングに触れたとき、「この人はスペースシスターだ!」と直感したのです。この町の人々の一般的なフィーリングを知っている私は、目の前にいる人がそれとは比較にならない波動を持った人物であることに気付いたからです。

そしてそのフィーリングから、かつて大阪の工場で会った男性と共通したものを感じました。内部の印象が、この人は他の惑星から来た人であることを教えてくれました。二週間後に最初の月例会をひかえたこの時期に起こった宇宙的な体験に直面して、スペースシスターらしい人のあたたかい思いやりに私は心から感謝の涙を流したのでした。

大学時代に初めてブラザーらしい人と出会ってから、このシスターらしい人と対面するまでに実に十三年の歳月が流れていました。今生で初めてGAP活動というライフワークに目覚めて泥沼からは い上がり、やる気を起こして、これまで自分を取り囲んでいた諸般の事情をかえりみずにスペースプログラムのために立ち上がる決心をしたときに、ふたたびあの懐かしくも気高い人に対面することができたのです。

献本運動を開始

この体験でアダムスキー氏が『生命の科学』の中で述べている次の言葉が真実であることを知りました。

「ブラザーズは読者の多くがこの講座の研究グループを組織することを望んでいます。この講座はブラザーズによって伝えられた知識です。それゆえこの世界を良き社会にしようとしている彼らがブラザーズに協力する人はだれでも彼らからの援助を受けるでしょう」

ただし彼らの援助を受けるためには、自己拡張や自己満足におちいったり、他人を支配したいという所有欲や莫大な娘度を排除し、報いを求めない奉仕精神に徹することが大切だと思います。絶えず私たちを公平かつ平等に見守って下さるブラザーズの存在を絶対に忘れないように心がけて、一体感を深めることが必要のようです。

つい先日もふと「もう一度『宇宙からの訪問者』をじっくり読んでみなさい」という印象を受けたので、早速じっくり読み返してみました。すると(旧版の)百六十四頁にオーソン氏(金星人)がアダムスキー氏にたいして母船の中で次のように述べている箇所に気がついたのです。

「私たちは私とあなたの砂漠における体験の事実ができるだけ遠くまで広がることを望んでいます。そして勇敢にも最初の記事を掲載したあなたの国のある新聞社のスタッフをほめたたえています」

この言葉はオーソン氏ばかりでなく、偉大なマスターを含む友好的なブラザーズの一致した願いなのだという強い印象を受けました。

松山支部はこのようなブラザーズの願いになんとか応えたいと考えて、現在アダムスキー関係の書物を中・高・大の各学校をはじめ、公立図書館や公民館などに寄贈する運動を行っています。

最初にこれを始めたきっかけは、静岡支部代表の野口敏治氏が献本運動を提唱されたことに共鳴したからで、「これこそスペースプログラムに協力する具体的な方法だ。松山も静岡を見習ってやるのだ!」と思いついて、すぐ実行に移しました。

その後、支部月例会などで他の会員の皆さんにも趣旨を話して行動を呼びかけたところ、協力したいという方が続々と現れて、目下自主的に寄贈活動や本誌の

書店卸しを積極的に買って出て下さいました。現在文久書林からアダムスキー全集の刊行が始まりましたことは大変喜ばしいことです。寄贈運動は決して一時的な線香花火に終わらせることなく、長く地道に続けてゆくべきでしょう。

私の活動上の基本原則

最後に、私のGAP会員としての日頃の心がまえと活動上の基本原則ともいうべきものを述べてみましょう。これはデマやトラブルに巻き込まれることなく正道を歩み、末長くGAP活動を続けるために自分で考え出した自己流のやり方ですから、皆様にあてはまるかどうかはわかりません。

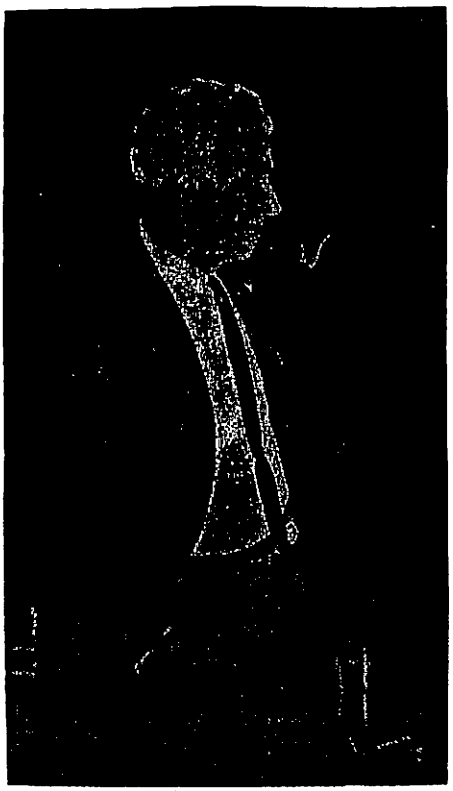
まず第一番目に、イエスが語った「人は同時に二人の主人に仕えることはできない」という教えを固く守ってゆきたいと思っています。この言葉は「人は同時に二人の師に仕えることはできない」と言い換えてよいでしょう。

進化した他の惑星の方々がアダムスキー氏を通じて伝えて下さった宇宙哲学を学んでいる私たちは、アダムスキー氏亡き今、宇宙的な特殊なカルマを持つ久保田先生を唯一人の師として師事してゆかねばならないと考えています。

昔からおよそ教育や求道の場においては、生徒は一つの科目を学ぶに際して、かならず一人の教師に仕えたものでした。この原則は今の時代でも守られています。今後もそうでしょう。

これはもし生徒がその原則を無視して、同時に二人の教師に仕えた場合、本人は混乱ばかりを身につけて、何も得るものはないという事実が長年の体験でわかっているからです。この例は宇宙的な学校ともいえる日本GAPにも等しく適用できるものです。宇宙哲学とアダムスキー問題という特殊な分野を学ぼうとする際に、かりに私が日本GAPに入会して久保田先生のご指導を受ける一方、同時に他の類似のグループにも入会し、別な教師の言葉にも耳を傾けるというふうな不誠実な態度をとったとしたら、混乱に巻き込まれて正道を踏みはずすばかりでなく、性格までいいかげんな中途半端な人間になるでしょう。宇宙的な向上をするためには一人の立派な教師に仕えて、誠実に学んでゆきたいと思っています。

二番目に、ブラザーズが計画されたスペースプログラムに協力することを今生でのライフワークにして生きてゆこうと決めています。



▲ジョージ・アダムスキー

コズミックマンを目指して自己研鑽を積むのと並行してスペースプログラムに協力するという公共的で高貴な動機を伴った目的に生きたいと思うのです。ブラザーズが私たちに何を望んでおられるかを察知し、その願いに具体的に応えるにはどうすればよいかを絶えず意識しながら努力してゆきます。

こうした宇宙的な動機に支えられた姿勢と、向上するための手段たる〝想念観察〟や〝テレパシー開発〟を結びつける必要を痛感します。

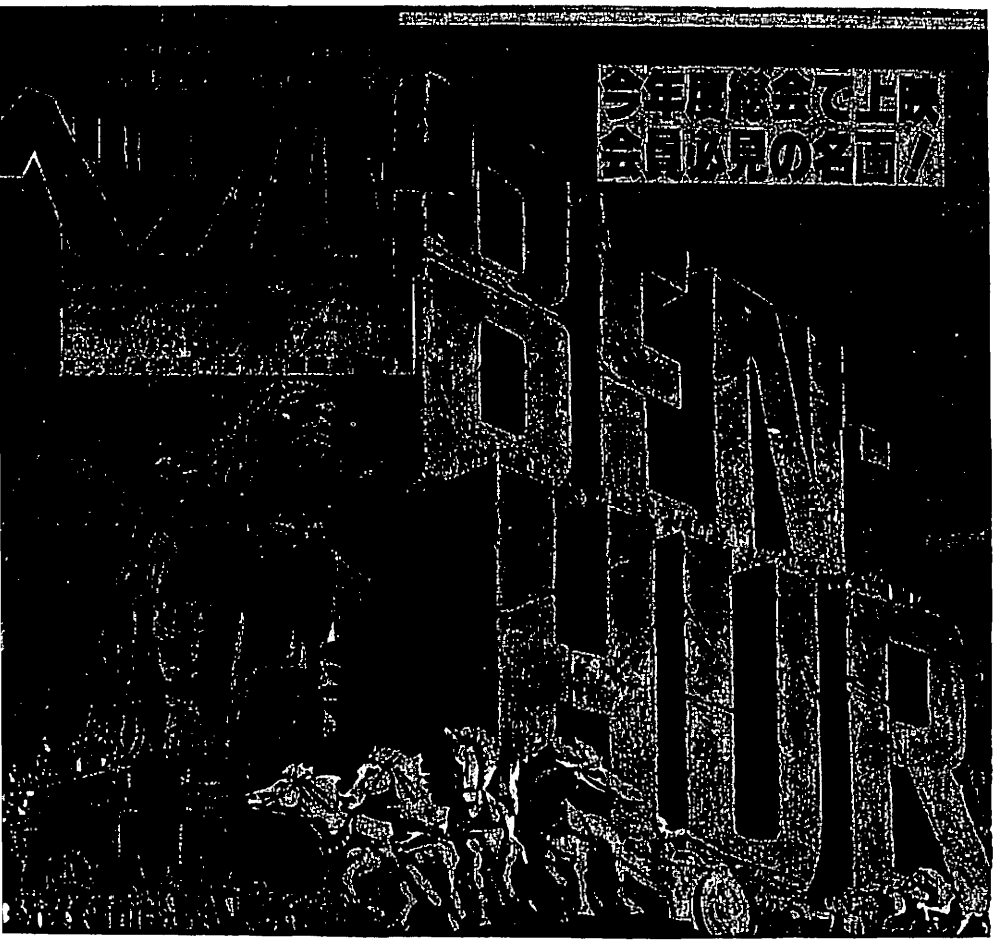
会員の皆様のなかには過去世や未来の透視をはじめ、テレパシーの送受信にすぐれた方やオーラの見える方など、素晴らしい特殊能力を持つ方が多数いらっしゃいますし、想念観察の徹底した実践によって高い精神レベルに達して聖者のごとき境地に達した方もおられます。その方々を私は心から尊敬するものです。

しかしそうした超能力の開発や想念観察などを個々ばらばらに行うという発想ではなく、その訓練を「スペースプログラムの中に生きる自分だ」という認識と結びつけるようにしないと、宇宙空間に意識を拡大して宇宙的な成長をとげるのはむつかしいでしょう。

他の偉大な惑星の人々やその文明に思いを馳せようとはせずに、スペースプログラムの一環である『知らせる運動』の公共的な役割を理解しないで、特殊能力の開発という個人的な面のみにエネルギーをついやすことは、場合によっては本人を自己拡張や自己満足におとしいれるかもしれません。

三番目に、日常生活の中で生じるいかなるトラブルやアクシデントも宇宙の内部で変化してゆく一時的な現象であるから、心をひっかからせないようにする、という点に留意しています。GAP会員として比類なき高次な宇宙哲学の学徒として、少々のトラブルや不幸な出来事にこだわることなく、かならず状況は変化することを認識して〝宇宙の意識〟との一体感を深めるならば、道は明るく開けるでしょう。絶えざる変化の連続が宇宙の実体であることはアダムスキー氏も久保田先生も説いておられるところです。

『知らせる運動』に協力する人はGAP会員のみです。他のだれもやってはくれません。互いに助け合いながらGAP活動を通じて宇宙への旅を続けようではありませんか。



世界三大名画（「風と共に去りぬ」、「十戒」、「ベン・ハー」）の一つであるこの映画は、一九五九年度のテクニカラーなるも、完成までに六年半、当時の金にして五十四億円の巨費をつぎ込んだ超豪級作品。巨匠中の巨匠ウィリアム・ワイラー監督指揮下に実に十一部門に及ぶアカデミー賞を獲得。アメリカ南北戦争の勇士ルー・ウォーレス将軍原作の小説を説画化したもので、小説は聖書に次ぐ大ベストセラーだが、雄大なスケールのこの映画も見る人を驚異と感動で爆発させる。イエスの時代のエルサレムを綿密な時代考証により見事に再現し、イエスその人も重要人物として登場する。GAP会員必見の名画。

★来たる十月九日（日）日本GAP総会で上映。総会の詳細は本号39頁を参照。

★米メトロゴールドウィンメイヤー映画。映写時間は四時間（途中休憩あり）。

あらすじ

二千年前、ユダヤ地方がローマ帝国に支配されていた頃、人口調査と課税の必要からユダヤ人はベツレヘムの町に集合させられたが、この中にヨセフとマリアというカプルがいて、この町の馬小屋で一夜をすごしたとき、マリアは男の子を生んだ。この子が後世偉大な人物となる。

ローマの圧制に苦しむユダヤ人は不穏な情勢をかもし出す。そこへローマの新総督グレータスの赴任に先立って先遣部隊の指揮官としてメッサラ（スティーブン・ボイド）がエルサレムに乗り込む。

この地の豪族の息子ベン・ハー（チャールトン・ヘストン）は少年時代にメッサラを親友として過ごした仲。すぐに彼の所へ駆けつけて再会を喜び合うが、ローマ一辺倒のメッサラと非惨なユダヤ人同胞に同情するベン・ハーは思想上の対立を起こす。

新総督が着任してパレードが行われたとき不幸な事件が突発し、無実の罪でベン・ハーは奴隷として軍船に送られ、母親ミリアム（マーサ・スコット）と妹のティルザ（キャシー・オドネル）は牢獄に投げ込まれた。

ベン・ハーはメッサラに復讐を誓い、激しく憎悪しながら熱砂の中をローマ兵のムチで追い立てられる。砂漠で猛烈な渇のため死の苦痛にさいなまれていたとき、ローマ兵の制止も聞かずに水を与えてくれる男がいた。夢中で飲みほして見上げた目に映る顔は限りない慈愛に満ちていた。そしてベン・ハーの肉体的苦痛も奇跡的に消滅した。

以後三年間ベン・ハーは奴隷としてローマの大型艦をこぎ続ける。艦隊の新司令官クィンタス・アリアスは海賊との大激戦でベン・ハーに命を救われたため、ローマへ連れて帰り、養子にする。やがてベン・ハーはローマ第一の剣闘士、戦車御者として名声をはせるが、養父の友人ポンティウス・ピラトのユダヤ総督赴任を機にエルサレムへ帰郷する。

懐かしい自宅の前で彼は思いがけなく昔の愛人エスター（ハイヤ・ハラリート）に出会う。彼女はかつてハー家の忠実な番頭であったシモニデスの娘で、いまは父親と世を捨てた生活をすごしていた。

ハー家の莫大な財宝をローマの追求から守り通してきたシモニデスは、この財宝をローマ打倒の資金にせよと説得する。

ベン・ハーはメッサラを訪ねて母と妹の消息を尋ねるが、メッサラは冒葉をにごす。実は二人ともライにおかされて、郊外のライの谷に移されていたのだ。この事実をエスターは知っているが、ベン・ハーには知らせない。

母と妹が死んだと思い込んだベン・ハーは、近く開催される大戦車競争にメッサラが出場すると聞き、やっつけようと

決意し、砂漠の族長イルデリム自慢の四頭の白馬を駆って出る。

アテネ、コリント、シリア、キプロス、カルタゴなどの名選手の戦車を不正な手段で次々と撃破したメッサラはベン・ハーと対決する。これはローマ対ユダヤの戦いでもあった。観衆とピラト総督までがメッサラの卑劣さに怒ったが、最後に地上に叩きつけられたのはメッサラであった。

死の床のメッサラは前非を悔いて、ベン・ハーの母と妹が不治の病でまだ生きていることをベン・ハーに告げる。ライの谷に駆けつけたベン・ハーは食事を運んできたエスターに出会うが、母と妹に会うことを阻止されて岩陰から変わり果てた二人の姿を見る。

帰途エスターはナザレのイエスという人が多くの病人を奇跡的に治す話を聞き、またもライの谷へ行って、その人に会えば病気が治るかもしれないとミリアムやティルザにすすめる。

一方、ベン・ハーは総督からローマ市民権を与えられることを聞くが、これを拒否してエルサレムの町を歩いて行くうち、行列の中に一人の罪人が重い十字架を背負わされてよろよろと歩く姿を見て叫ぶ。「ああ、あの人だ！」。

これこそかつて砂漠で一杯の水を与えてくれた慈愛に満ちた人だったのだ。涙を浮かべて見送るベン・ハーの前を行列は通り過ぎて行く。

ミリアムとティルザもエスターに連れられてこの悲惨な行列を見送っていた。

奇跡はその後に発生した！　ベン・ハーが母と妹と一緒にわが家へ帰ったとき二人の不治の病はいつしか癒えていた。そしてベン・ハーの激しい憎悪の感情も消えうせて、いまは不思議な平和な喜びと新しい世界への希望が体に満ち溢れるのを感じていた。

見どころ

最大の見せ場は大戦車競争の場面で、疾駆する戦車群を大写しに描いた部分はどのようにして撮影したかわからないほどに驚異的なスペクタクルとなっている。この競技場のオープンセットはローマのチネチタ撮影所に隣接する石切場に建設されたもので、広さ七万三千平方メートル、一千人以上の労働者が働いて一年以上かかった。また戦車競争シーンには一万五千人のエキストラが動員された。その他、ぼう大なエルサレムのセットも驚嘆のほかない。

主役のチャールトン・ヘストンは昨年の総会で上映した『十戒』でモーゼに扮したおなじみの大型アクション映画になくてはならない大スター。エスター役のハイヤ・ハラリートは一九二六年イスラエルのハイファ生まれの名花で、ベン・ハーに起用されて世界的大女優になった。その他四百七十七名に及ぶ各国の俳優が出演し、仮空の人物なるもエルサレムの一貴公子の波瀾の人生をめぐって、富める人、貧しい人、残酷な人、親切な人、愛する者と愛される者、憎む者と憎まれる者、凶暴な人間と神のごとき人など、さまざまな人間が織りなす雄大な感動のドラマが展開する。

都会の公園。一組のカプル。1mは離れた位置から見ると1mの広がりだが、10秒ごとに10倍ずつ離れると視界も10倍ずつ広がってゆく。

10^{2}＝百m四方。まだ車やボートが見える。

10^{3}＝千m四方。視界は大都会となる。

10^{4}＝一万m四方。大きな湖の全景になる。

10^{5}＝十万m四方。人工衛星が十秒で飛ぶ。

10^{6}＝百万m四方。地球の丸い輪隔が、そして全体が、やがて地球は遠ざかる。

10^{9}＝月の軌道を横切り、太陽を回る惑星である地球、金星、水星、火星の軌道や大きくずれた冥王星の軌道も現れる。

10^{14}＝やがて太陽光から離れ、太陽も一つの星となる。

$10^{18}$$10^{16}$＝一光年の距離。

10^{18}＝百光年で、牛飼い座の最大星アークツルスや北斗七星のいくつかを通りすぎて、銀河系を出る。更に遠ざかると銀河系の巨大な平面状の渦巻が見える。

100万光年＝銀河系の二つの衛星銀河、大小のマゼラン雲が見える。輝く一点の光はすべて星雲（銀河）。

1億光年＝巨大な乙女座の星雲群を通過するともう視界限度。また地球へ引き返して、今度はミクロの世界へ。

10^{-1}＝十cm。

10^{-2}＝手の表面に近づき、数秒で皮膚に入る。更に進むと細胞膜、赤血球、リンパ球が泳ぎまわる毛細血管が見える。細胞の原形質には細胞核の核膜があり、DNAのコイル状の輪の中には人間の遺伝情報がつまっている。

10^{-10}＝一オングストロームの世界。外側と内側の電子を通過して、原子の重力の中心に向かうミクロの旅の途上に広大な内宇宙が展開する。

10^{-14}＝ついに炭素の原子核が見えてくる。原子核の中には陽子や中性子があり、原子は電子を含み、結合して分子を作っている。この法則ははるかな銀河系にまで通じている。

ついに一個の陽子が画面をおおうところまで来た。この先は科学でもまだ謎。だが人類は何かを発見するだろう。

驚異のカメラアイが、公園で昼寝中の人間から銀河系宇宙の果てのマクロの世界へ移動し、逆に人間の体内に入り込んで極微の世界へ案内する。

特殊撮影を駆使したこの短篇作品は、銀河から原子まで驚異の世界を10という数字を基準にして描き出す素晴らしい科学映画である。そこで上映時間も10分間。

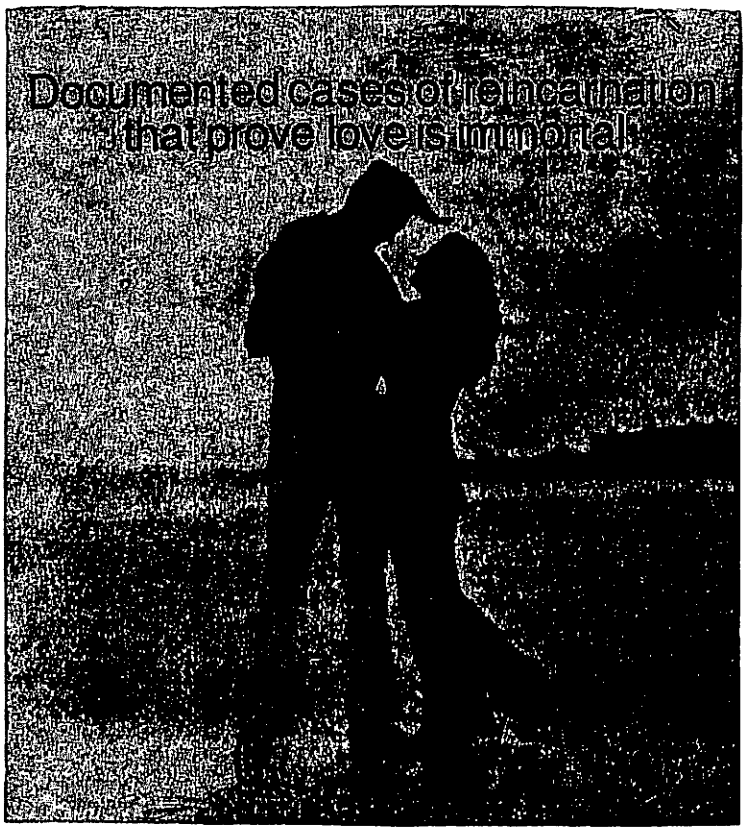
（久保田記）

■宇宙哲学解説講座■(1)

転生とカルマ

逆行催眠実験による驚くべき過去世の透視と
カルマの法則による宇宙的生き方への指針

久保田八郎
〈日本GAP会長〉



アダムスキーの著書『宇宙からの訪問者』や『UFO問題の真相』（いずれも文久書林刊アダムスキー全集の第一巻と第二巻）によると、二千年前に宇宙の法則を伝えたイエスなる人物は、地球人を救うために金星から転生（生まれかわり）して来たという。また彼を援助した十二弟子も高度な発達をとげた別な惑星から過去世の記憶を失ったまま転生して来た人々だと述べてある。

もっと驚くべきインフォメーションは、アダムスキーの夫人であったメリーが一九五〇年代に他界したあと、金星に転生して金星人の少女として成長し、大母船でその惑星に連れて行かれたアダムスキーがその少女と劇的な会見を行うという報告である。しかもその少女は地球にいた当時の生活についてすべてを記憶していたけれども、地球上の過去の事を話し合うのは宇宙的な進歩の妨げになるので何も聞いてくれるなと言い、アダムスキーにむかって宇宙の法則に関する素晴らしい言葉を伝えている。この驚異的な出来事の詳細はアダムスキー全集第三巻、『UFOとアダムスキー』に『金星旅行記』と題して収録の予定である。

人間は数秒間で生まれかわる

以上はアダムスキーのインフォメーションだが、この転生の問題については他にも多くの報告や情報などがあり、過去世の記憶を持つと称する人の体験談が、調査の結果、正確であった例もインドで二、三出ている。

また人間に転生が行われることを確信していた有名人も少なからずいる。ざっと挙げただけでも、プラトン、ボルテール、ベートーベン、R・W・エマーソン、ビクトル・ユーゴー、H・D・ソロー、ジャック・ロンドン、H・G・ウェルズ、マーク・トゥエイン、ルイザ・オルコット、ヘンリー・フォードなどがそれだ。

ところが、この人々の大半は心霊的な思想の持主で、人間死後の霊界の存在を信じて、他界後人間は霊魂としてどこかの空間にあると思われている霊界という世界へ行き、そこで現象界と似たような生活をしたり休息したりし、一定期間を経てからふたたび地上の新しい肉体に宿って、新生児として出発するのを〝転生〟と考えていたようである。

しかしアダムスキーによれば霊界は存在しないという。人間は死後数秒間（二、三秒間）で死者の〝実体〟（霊魂と呼んでもよい）は別な新生児の肉体に移行する。それは胎児が母体から誕生する瞬間であって、厳密に言えば胎児がこの世界の空気を初めて吸い込んだ瞬間だという。したがって死と生との中間に霊界なるものは存在しないということになる。

そもそも霊界の存在を認める思想は古代エジプトのオシリス信仰にみられるもので歴史は古い。古代エジプト人は人間の死後、霊魂は幽界へ旅立つけれども、また現世に帰ってくると信じて死体をミイラにし、王の埋葬時には山のような副葬品を添えた。これを原始的といって嗤うわけにはいかない。現代でも死者が霊魂となってどこかで生きていると信じた

くなるのは遺族の心情として当然だろう。だから棺の中へ愛用品を詰めたりする。

ところが死者は霊魂のまま生き続けるのではなく、遺族が悲嘆にくれて野辺送りを行っている頃には、すでにどこかで別な肉体を得て、元気よく泣き声をあげており、両親は赤ん坊を見て喜んでいるというわけだ。つまり人間は瞬時にして肉体を取り替えながら生き続けるのであり、これを〝生命の連続〟と私たちは言っている。

アダムスキーは、この知識をスペース・ブラザーズ（偉大な進化をとげた近隣惑星群の人々）から伝えられたということなので、地球人の考え方には合わないかもしれないが、二十一世紀になれば後述の記憶のメカニズムとともに重要な課題となるだろう。

霊媒は死者の声を伝えない

反論が出るかもしれない。「霊界通信によって霊媒が死者の声を伝えるではないか」と。

この場合は霊媒が死者の声を伝えているのではない。いかにも死者の霊魂が霊媒の体に乗り移っているように見えるけれども、トランス（失神）状態になってしゃべる霊媒（普通は年盛の女性が多い）の口をついて出る言葉は、霊媒自身の肉体を構成する細胞のどれかから発せられたメッセージなのである。

これまた現代科学では未解明の事象だが、人体の細胞は秩序ある（宇宙的な）細胞と、クセの悪い外来習慣細胞とから成り、それらすべては、それぞれ周囲に小さな分子群を従えた一個の送受信局を持っており、そこから発せられるメッセージがあたかも死者の霊魂から来るかのごとく考えられていたのだ。特に高級霊と思われるのは、霊的な指導者を求めようとする心（マインド）によって創造された外来細胞から来る印象が、霊媒の体内で増幅されて音声となって出てくるのである。

未来の恐ろしいカタストロフィー（大破局）などを予告したりして人間に恐怖を与えるような霊界通信なるものも、実はそのようなカタストロフィーを予想したり恐れたりする人間の心（マインド）によって創られた外来細胞から出る印象なのであって、他の霊魂が予言するのではない。これに関する詳細はアダムスキー著『生命の科学』（文久書林刊・アダムスキー全集第六巻に収録予定）を参照されたい。進歩的な人なら首肯できるものがあるだろう。

霊界通信というものが存在しないのならば、当然のことながら高級霊や守護霊なども存在しないことになる。守護霊に守られて良き運命が展開してきたと思われるような現象は、実は本人の想念波動が良き運命を引き寄せたのであって、外部の不可視の実体による干渉のためではない。存在するのは波動だけであって、人間にとりついて苦しめたりする浮遊霊や憑依霊なるものもいっさい存在しない。

幽霊現象はあり得るものと考えられるけれども、これは霊魂の具体化ではなくて、死者の生前の強烈な想念波が家屋その他の物品に浸透して、輻射伝熱による熱放射線に似た〝残留意識放射線〟が放射され、それをキャッチした人の体内で未知のメカニズムにより映像化されると思われる現象である。したがって現場に一緒に居合わせても幽霊の見える人と見えない人がいるのである。

カルマとは何か

人間は瞬時に生まれかわるのだが、けっして無意義な生が続くのではなく、必ず過去世にまいた種（原因）の結果として新しい環境を迎えることになる。この因果の法則を私たちはカルマと呼んでいる。

カルマという語は古代インドのサンスクリットのカルマンからきたもので、バラモンのヴェーダに属するブラーフマナ末期から古ウパニシャッド前期（前五世紀頃）にかけて出てきた〝業〟と輪回の思想を意味する。これを展開したのは偉大な哲人ヤージュニャヴァルキャで、これは善業が善き結果を生み、悪業は悪しき応報を得るという〝善悪の行為〟が主体をなすのだが、私たちが宇宙哲学で用いるカルマという言葉は、もっと幅の広い〝原因と結果の法則〟という意味がもたせてあり、かならずしも古代インドの哲学書ウパニシャッドの原義にはこだわらないことにしている。

たとえば「あの人は宇宙哲学の研究実践を人生の目標にしている」と言う場合、「あの人にはそのようなカルマがある」というふうに用いるのである。この表現には、「本人が過去世においてつくった何かの原因により、今生では宇宙哲学を研鑽しなくてはならないような宿命を持っている」という意味も含まれている。

（注＝宇宙哲学というのはアダムスキーの説いた宇宙的な哲学。テキストは彼の著書『宇宙哲学』『テレパシー開発法』『生命の科学』が主体をなす。いずれも改訳決定版がアダムスキー全集の一部として今秋文久書林から刊行される）

たしかに人間として同じような環境のもとに同じような教育を受けながら、Aは宇宙哲学に熱烈な関心を寄せて、ひたすら自己の精神の向上を図ろうとするが、Bはこのような求道精神のかけらもなく、もっぱら金儲けに励んでいる、というような差が出てくるのは単なる偶然でもなければ遺伝の影響でもない。なぜなら、宇宙哲学に全く関心のない両親またはそのような家系から熱心な宇宙哲学の探求者が出てくる例があるからだ。あるいは平凡な両親のもとに天才児が生まれる例もある。これを遺伝とかたづけては不合理だ。ここには遺伝や環境を超えた神秘的な要素が存在すると思われるのだが、それは過去世から或る〝記憶〟を持ち越してくる転生に起因すると考えるほうが合理的である。

したがって一個人の持つ思想傾向、性格、生活態度などは後天的というよりも先天的にある程度きまっているのであって、これも過去世からのカルマである。ただし絶対的な宿命というようなものではない。なぜならきわめてすぐれた資質を有し、高次な精神を持つ人が、環境の影響により堕落することもあるからだ。

アダムスキーによると、人間は地球上

で転生をくり返すばかりではなく、惑星間を転生することもあるという。この例は初めに述べたようにイエスと十二弟子、アダムスキーの夫人メリーなどにみられるが、たまに地球上に出現する偉大な精神的指導者や大発明家なども、だいたいに地球人を救済するために高度な進化をとげた異星人が転生してきたと考えられるのである。その場合、記憶の持続という問題が出てくるが、これは後で述べることにしよう。

逆行催眠実験による過去世の記憶の再生

転生の宇宙的な分野に関してはアダムスキーの著書類を参照されたい。ここでは一般の男女の絆もおおむね過去世からのカルマによることが多いという理論とその実例について紹介しよう。

過去世の記憶の呼び出しを逆行催眠によって研究している学者にディック・サトフェンという人がいる。米アリゾナ州スコッツデールの催眠センターの所長であったこの人は、きわめて興味深い実績をあげており、その詳細は著書「この世で一緒になるために再び生まれてきた」に述べてある。その冒頭に「愛とカルマ」と題する興味深い次のような一章がある。

「愛は宇宙で最も強力な力である。時間、誕生、死、転生なども、深い精神的または肉体的な絆で結ばれた人たちを切り離すことはできない。魂の類似性が確立されているからであり、愛し合った人たちは常に〝一体〟なのである。

過去世で愛し合った恋人・夫婦は、同じ世代で生まれかわる。新しい生涯で初めて出会ったとき、二人は過去世のことを記憶してはいないけれども、互いに強烈に引かれ合って、またも新たな愛が始まるのだ。

新たに転生するごとに愛は深まり、互いに献身的となって、多くの転生を経た後に愛は成就される」

自分の生涯で深い絆によって結ばれた人々は（恋人・夫婦でなくても）前生で親しかった人なのである。恋人であったか、友人か、それとも親類縁者であったのかもしれない。あるいは親子だったかもしれない。しかし今生で特別に親密な関係にある場合は、過去世で一緒に暮らしていた可能性が大である。互いに相手から何らかの援助を受けたり導かれたりしているのだ。

大人の男女が熱烈に愛し合う場合、最初は肉体的個性的な特徴によって惹かれると思われるが、実際にはこの〝引き合い〟は、互いに過去世でつくった絆を潜在意識が認めたのだ。つまり互いに過去世で知っていたということなのである。

ある異性を初めて見た瞬間に魂が震えるほどの魅力を感じることがある。相手もそのような感じを起こして二人は文句なしに愛し合い、一体化し、結婚して互いにこよなき伴侶として幸福な生涯をすごす。このような出会いは二人の魂の生長のための教室に入るようなもので、過去世からのカルマによりこうなるべく運命づけられて、それを潜在意識が認めたのだ。もし二人のあいだにトラブルが発生すれば、それはレッスンなのである。

トラブルのない完璧な関係ならばレッスンは生じないが、大抵のケースでは、過去世から持ち越した未学習のレッスンが顔を出してくる。そして究極には二人のカルマのバランスをとるのである。過去世からのレッスンを学びきれない限り、人間は同じ過ちをくり返すように運命づけられている。人生における学習は過去世を思い出すための一つのプロセスである。

カルマの清算 (1)

アリゾナ州のテンプルに住むあるカップルは典型的な例であった。逆行催眠により次の事実が判明した。

この夫婦の最初の出会いは四世紀のイギリスにさかのぼる。彼のほうはイングランドに住みついたチュートン民族の軍団の一人として北海の沿岸地域からやって来た。彼女はサクソン人で、当時その国を支配していたローマ帝国の市民であった。男の属する海賊団はイギリスの沿岸に上陸し、田舎で略奪を始めた。

ある日サクソンの乙女が畑で仕事をしていたとき、突然チュートン人の一隊が侵入し、彼女は一人の男に捕えられて強姦されたのである。

続く数カ月間、彼女はその男の捕虜となり、慰みものにされた。必死になって逃げようとしたけれども、捕獲者と囚人とのあいだに愛と憎しみの関係が芽生えてきた。だが一年もたたぬうちに男は戦闘で死んで、彼女は自分の家に帰ることができた。

以後二人は何度も転生をくり返したが、二度目に出会ったのはメキシコのトルテカ族の男女としてである。しかし今度は男女の性が逆転して互いの役割も相反するものになった。つまりかつてのサクソンの乙女は男として転生し、獰猛であったチュートン人の男は娘になったのだ。男が荒々しく残忍で、娘は悲運に泣いた。

しかしこれはカルミックな（カルマ的な）視野からみれば、四世紀にイギリスで体験した出来事のバランスをとる行為なのである。

今生のすぐ前の過去世では、二人はイギリス時代の性に返って、南カナダ沖の太西洋に浮かぶ島で暮らしていた。若くして結婚し、漁業で生計をたてていた。二人の関係は不安定で、争いの絶えまがなかったけれども、三人の子供を育てて、二人とも老齢で生涯を終えた。

今生では二人が結婚して十一年になる。男女の性は前生と同じだ。男は陸軍の職業軍人で、彼女はその愛妻である。二人の子供があり、幸せな生活をすごしている。ここまでくるのに、共に四回の生涯を必要としたのである。

カルマの清算 (2)

別な例をあげよう。ミネソタ州ミネアポリスに住む一人の男は妻君との結婚生活がうまくゆかずに悩んでいた。結婚してから四年以上になるのだが、性関係でどうしても満足が得られないのだ。彼は

妻を不感症ではないかと考えていた。そこで商用で来たアリゾナ州でサトフェン氏の逆行催眠実験を受けて次のような結果が出たのである。

二人は過去世でアメリカの植民時代に農民として一緒に暮らしていた。男女の性も職業も現在と同じである。

ある一時期、彼のほうが農場を離れていたことがあった。その間、妻が三人の見知らぬ男にひどく乱暴されて輪姦されたのである。それ以来、彼女にたいする夫の冷たい態度によって、彼女の精神的ショックは増大した。夫は発生した出来事に我慢がならず、妻にたいする肉体的な関心のすべてを失ってしまった。

彼女は過去世の性的体験から、消極的な態度や夫に対する無意識な敵意などを今生に持ち運んだというわけだ。

逆行催眠によりいまや過去世における原因が判明したので、彼は忍耐と理解により妻に愛情を示すことができるようになったし、妻も夫にたいする敵意と性交の恐怖を克服した。いまや二人は悪しきカルマを今後も長引かせるか、それとも愛と知恵とにより、それに打ち勝つかの選択で勝利を得たのである。

人によっては今生の途中で夫婦関係を中止するように運命づけられている場合もあるとサトフェン氏は言う。つまり夫婦が今生で互いに相手から学び得るすべてのものを学んでしまい、新たな機会が二人を待ち受けている場合は、離婚というかたちになるのだ。そのときはそれ以上悪しきカルマを作らないで別れるのが最重要である。悪しき行為や感情は悪しきカルマを作り出す。そしてそのレッスンを学ぶために来世でまた二人が出会って一緒になるだろうと述べている。

リンダとジムの転生の例

以上の他にも逆行催眠実験による多くのテスト例が氏の著書に出ている。催眠下で実験者と被験者とが交わした会話をテープに録音したものが克明に記録されており、たいへん興味深い。

たとえばアリゾナ州フェニックスに住むリンダとジムという恋人同士のケースでは、リンダの逆行催眠実験により、彼女は十三世紀にイングランドに住んでいた富裕な商人の娘ティリーナであり、青年農夫のアイバンと親の許さぬ恋仲になって駈け落ちし、波瀾に満ちた短い生涯をすごしたあげく、領主の武士団に二人とも矢で射殺されるという劇的な最後を詳細に語るのだが、不思議なのは南部なまりの強いリンダが実験中にしゃべる英語はイングランドのクリスプ・イングリッシュの発音に変化し、しかもエドワード二世とエドワード三世治下の重税に苦しむ農民たちの暴動の歴史を知るはずのないリンダが、その動乱の時代をまるで劇映画を見ているかのごとくしゃべり続けるという事である。この記録もあとで調査の結果正しいことが判明した。実験記録の一部を掲げると次のとおりだ。

リ「ああ、彼は行こうとしています。自分で金属製の胸当てを作りました。……彼は行きます……あるグループに加わろうとしているんです……」

サ「行ってもらいたくないの?」

リ「そう（リンダの声が震えて涙が頬を流れる）」

サ「ほかの男たちも行くの?」

リ「行く人もいます」

サ「次に起こった重要な場面へ進むことにしよう（指示を与える）」

リ「私は小さな娘を連れ出して別れを告げています。……隣家の……女の人の所へ子供を連れて行きます。子供は泣いています」

サ「今度は何をやろうとしているの?」

リ「彼のあとを追って行きます」

サ「それは、なぜ?」

リ「彼を助ける必要があるんです……でもよくわからない……わかるのは一緒にいる必要があるということだけ……一緒におれと何かが告げるんです」

サ「よしわかった。この部分はこれでおいて、あなたが彼に追いついた場面へ進むことにしよう（指示が与えられる）」

リ「ああ……私はずいぶん疲れています。ずっと馬に乗ってきました……ずいぶん長い道を……」

サ「状況を話しなさい。彼に追いついたのだね?」

リ「たき火が見えます……アイバンの馬……だれかほかの人が馬に乗っている……」

サ「その乗り手を知っているの?」

リ「いいえ。私は静かにしていなければならない……静かに……その男はたき火の方へ歩いて行きます……（突然リンダの声が恐怖で震える。長い沈黙）」

サ「その男はたき火の方へ大っぴらに歩いているの?」

リ「いいえ……ああ神様……（リンダの声は絶叫に変わる）その男がアイバンを殺そうとしている!……私は男を刺した!……ああ神様……血が流れている……血が……」

サ「男をあなたが刺したのだね?」

リ「そうです……ああ……男は大きな石を持っていて、アイバンの頭を打とうとしたんです……」

サ「アイバンは寝ていたの?」

リ「ええ……ああ神様、血が流れている」

サ「すると、あなたは自分のナイフを持っていて、この男がアイバンの方へそっと退いながら接近するあとを、あなたもつけて行って彼を刺した。そうでしょう」

リ「そうです……ああアイバンが私を抱きしめている……私は泣いている……」

サ「しっかりしなさい。あなたは過去の観察者にすぎないのだ。その男はだれだった?」

リ「領主の武士の一人です」

サ「その男はずっとアイバンを尾行していたの? それとも偶然に出会ったの?」

リ「偶然だと思います」

サ「よし、この部分はこれでおくことにして、翌朝の場面へ進むことにしよう。（指示が与えられる）」

リ「アイバンは前進して仲間と合流したいと言っています。私の両手にまだ血がついているような感じがする。洗ったんだけど」

サ「あなたはその男を殺したんだね?」

リ「そうです」

サ「あなたもアイバンと一緒に行くの?

それとも家へ帰る?」
リ「いいえ、彼は私を一人で帰らせません。アイバンと一緒に行きます」
サ「他の仲間に出会った場面に進むことにしよう（指示が与えられる）」
リ「二人は仲間たちと話し合っています。みんなはひどく血に餓えています」
サ「みんなは何をやろうとしているの?」
リ「戦おうとしているんです。怒り狂っているわ……長いあいだみんなは領主からあらゆる物を奪い取られてしまったんです」

約六百五十年昔のイングランドにおける血なまぐさい光景を、まるでテレビドラマを見るように無意識で語るリンダの過去世透視の物語はまだ延々と続くのだが、これは一貫して理路整然としたドラマであって、リンダ自身がでっちあげながら語っているのでないことはもちろんである。

一九七三年七月に行われたこの逆行催眠テストにおいて実験者と被験者による右の会話は約四十分間続いた第一回実験の最後の部分である。実験前、リンダは逆行催眠については心底から信じなかった。だからこの件について充分な説明を聞いても、被験者としての心構えはできていなかったのである。こういう人がよい被験者になるという。

いま覚醒したリンダはゆっくりと現世の現実の世界に返ってきた。両手を見てこすり合わせる。「すごい光景だったわ! 何時間ぐらい眠っていたの? ジムがここにいてくれればよかったのに。すごく彼に親近感を感じるわ。今生ではまだ赤ん坊を生んだことはないのに、生んだような感じがする——。まだあの光景が心から抜けきれない。あの血を見たとき、吐きけをもよおしたわ」

リンダは今生で不幸な結婚をして夫と別れたあとジムという青年を愛するようになるのだが、これが実はかつてのアイバンであった。

ここで重要な事実に気づく。リンダは逆行催眠実験中、完全な失神状態ではなく、自分が見た光景や話したことをすべて覚えているのである。したがって霊媒などがトランス状態から返って自分が何をしゃべったか全くわからないでキョトンとしているのとは性質が違うのだ。

サトフェン氏は数千回の逆行催眠を実験してきたベテランで、この研究は科学的な基礎の上に築かれてきた。だから実験者の想念を被験者に感受させて、その誘導のもとにしゃべらせたということはあり得ない。もしそうだとすればサトフェン氏は世界中の古代からの歴史に精通していなければならないことになる。ただし素人が催眠術を用いるのは危険であるから、絶対にまねをしては、いけない。

過去世から運ばれる記憶の謎

そこで核心に入ると、問題は数百年昔の過去世の記憶がどのようにして一個人によって運ばれるかという点である。

人間の脳は推定十兆ビット、つまり二十四巻の百科辞典の一千セット分に相当するぼう大な量の情報を貯えることが可能だという。だが記憶のメカニズムについては、脳内における化学分子の組成や形の変化を含む化学変換の問題であろうということ以外、科学ではほとんど何もわかってはいない。だいいち記憶情報がどこに貯蔵されるのか、これが全くの謎なのである。脳内に貯えられる可能性は大であるが、記憶用の神経中枢は存在しないことが判明している。

しかし体内の百億以上の神経細胞のうち、十分の九がつまっている脳に関連があるとすれば、一度肉体が死んで焼かれる以上、いわゆる普通の記憶なるものは消滅するはずである。こうして何度も肉体が焼かれて何回もの転生をくり返しながら、リンダのごとくテレビ画面を見るかのように鮮明に数百年前の記憶をよみがえらせるとは、どういうことなのか。

アダムスキーによると、人間はいわゆる普通の記憶以外に〝宇宙的記憶〟を持ち運ぶという。これは人体を生かすコズミック・コンシャスネス（宇宙の意識）が人間の唯一の真の永続的部分であるから、個人のあらゆる行為が記録されるのはこの〝意識〟の中であるというのだ。いささか抽象的であるが、人体ばかりでなく宇宙空間に存在するすべての物は、このコズミック・コンシャスネスに支えられ生かされているというのがアダムスキーの宇宙哲学の根本理念である。この場合の意識というのは普通に用いる意識ではなくて、いわば宇宙力（コスミック・ファース）ともいうべきものである。そこで、心を静めて、この内部のコズミック・コンシャスネスと同調または混和させれば、人間は遠い過去世の記憶をよみがえらせることができるというのだ。

サトフェン氏によれば、人間の過去世の記憶はすべて潜在意識に貯えられているので、被験者の心を眠らせて（本当は眠ってはいない）潜在意識の情報を引き出せばよいのだという。

いずれにしても物質としての脳細胞の次元をはるかに超えたミステアリアスな〝何か〟の作用によるものなのだろう。この実体は脳細胞をどんなにメスでつついても解明されることのない謎として残るだろう。だいいち普通の記憶の実態が不可解であるというのに、宇宙的記憶なるものが現段階の科学でわかるはずはないけれども、しかし〝転生〟とか〝過去世の記憶〟というものは、どうみても真実の現象として存在するとしか考えられない。実例からみて帰納的にそう言えるのである。

〝過去世病〟に要注意

かつてGAP内で〝過去世病〟ともいうべき現象が流行した。やみくもに自分や他人の過去世の状態を〝透視〟しては、自分とだれそれさんとは、いつの時代、どこそこの国で兄弟だった、恋人または夫婦だったなどと言い合うのである。ほとんどヒョーキといえるほど熱中した人もあった。

この病気は約十年ぐらい前に一度GAP内の一部の人々のあいだではびこったが、五、六年前にもリバイバルのブームが発生した。

その結果、はなはだ面白くない事態も

起こってきた。安易に他人の過去世について言及し合うのでトラブルが発生したことも二、三あるし、私自身もそれに巻き込まれてひどい目にあったことがある。

いったいに自分や他人の過去世の姿や状態が写真を見るかのごとく透視できる人が、そうざらにいるものではない。大抵は心中の印象か単なる空想または想像で言っているだけである。こんなのは本当の透視ではない。「あなたは過去世で美しい顔をした金髪の白人でした」などと言われようものなら、白人コンプレックスの強い日本人は飛び上がって喜び、相手を権威づけてカリスマ化し、自分は宇宙天になって本来の精神修養は忘れてしまうということになる。「あなたは偉大な発達をとげた別な惑星から転生して来た人だ」と言われて傲然エリート意識を起こし、傲慢になるなどはもってのほかで、むしろこれは本人が別な惑星から転生した人間でも何でもないことを示している。もちろんそのような〝透視者〟の発言にも注意を要する。真実の透視ならば、そんな性質の人間にそんなことを言うはずがないからだ。

私がこの記事で過去世の話を持ち出したのは、人間の生涯は一般で信じられているような一回限りのものではなく、何度も転生するということと、それにはカルマの法則が厳然として存在するということを力説したいがためである。自分でまいた種は自分で刈り取らねばならないという因果の法則は今生でさえも適用する。私たちは日々この法則に従って生きているのだ。

▲この若き2人は、いかなる過去世を経たのか。未来の世では、いつ、どこで再会するのだろうか。
（ポルトガル・リスボンの街角にて。筆者撮影）

そして善行を積めば善き報いがあるというウパニシャッドの哲学も永遠をつらぬく法則であろう。具体的に言えば、今生では物質的に恵まれなくても、宇宙の法則を探求して、万物との一体化のフィーリングを起こしながら宇宙的な人間として生きるならば、この生涯を終えてからは偉大な発達をとげた惑星に転生できるだろうし、あるいは別な惑星へ行けなくても、次の生涯では非常に恵まれた環境下におかれて幸福な人生をすごすことになるだろう。

こうした法則を知るためにこそ人間は生命の連続、すなわち転生の実態と過去世の記憶を保つことが必要になるのである。したがって自分で自分の過去世の記憶を呼び起こすことは重要なのだが、過去を〝知っている〟ことと〝執着する〟ことは別問題である。

だから金星に転生したアダムスキーの夫人メリーも言っているように、過去世に執着するのはむしろ宇宙的進歩の妨げとなるのである。これは遠い過去世どころか、ほんの昨日の失敗でいつまでもぐずぐず泣き言を言うのが前進をストップさせるのと同様である。過去は消滅してしまったのだ。ないものにしがみつく理由はない。成長のためにあるのは現在と未来のみである。

とまあエラク説教じみてきて恐縮だが、とにかくサトフェン氏の逆行催眠実験記録を読むと、一人間の生涯（ライフタイム）の連続というのは千変万化の様相を呈し、一千年ぐらいにわたって壮大きわまりないオムニバスのドラマが展開する。あるときはたくましい白人の男が次の生涯では東洋の貴女に生まれかわり、次は南米のインディオの山男、次はヨーロッパの上流階級の有閑マダム等、へたな小説よりもよっぽど面白い。そしてこれらの物語は関係した国の歴史や時代背景などを全く知らない若いアメリカ人男女の口から出ているのだ。この不思議な現象が科学で解明されるのはまだ遠い先のことだろう。

人間は宇宙の旅人

人間は本質的に旅人である。一生涯で苦楽の人生の旅路を終えてから次に別な生涯の旅路について新たな体験をし、カルマの法則のもとにレッスンを学んでゆく。

こうして転生により肉体という衣（ころも）を次々とまとっては脱ぎ捨てながら、あるときは男として、ときには女として、さまざまな人との出会いと離別をくり返し、国から国へ、惑星から惑星へ、太陽系から太陽系へと限りなく宇宙の旅を続けるのである。この実態を知るとき、人間は現生涯の自己の生活環境や立場に固執（こしつ）しすぎて、あまりにも視野が狭かったことを悟るだろう。そして宇宙空間と一人間との関係の意義を認識するだろう。「自分とは大宇宙であり、大宇宙とは自分である」と。

〔改訳〕 ―連載第2回―

テレパシー開発法

触覚こそ人間の本体／互いに争っている四つの感覚器官をコントロールして、内部の意識の声を聴く／そのためには想念の観察が最重要／その方法は？

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

第3章　触覚は基本的感覚

一般人が信じているところによれば、人間は五つの感覚、すなわち、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚を持っているといわれており、そのいずれも他の感覚から独立して働く能力を持つことを私たちは知っています。私たちは聴覚、味覚、嗅覚などを用いないで物を見ることができますし、酸っぱいものと甘いものを区別するのに聴覚、視覚、嗅覚は必要ありません。耳、目、口などの助けをかりなくても鼻は立派に働きますし、音声は聴覚器官によって感受することができますので、他の三つの感覚は不要です。以上はみな四つの感覚器官がそれぞれ独立して働くことを立証しています。

触覚は基本的生命力

そうすると、いわゆる第五感とは何でしょうか？　私たちが視覚、聴覚、嗅覚などでやったように、もし人間から触覚を取り除いたら、ただちにどんな結果になるでしょうか？

その人は無意識になり、触覚が回復するまでその状態を続けるでしょう。この状態にあるあいだも、各感覚器官は肉体の中にあって完全な状態を保っています。こうして目、鼻、口、耳などは無傷のままにあるにもかかわらず、それらは見たり嗅いだり味わったり聴いたりしません。そして、もし触覚が完全に肉体から取り除かれたら本人は死にます。ですから、四つの感覚器官のどれもその存在を触覚に頼っていることは全く明らかです。

さて、四つの感覚の一つ、たとえば視覚を取り除いたとしましょう。これは肉体内の生命力に影響を与えるでしょうか。全く与えません！　これをさらにふやして二つ、三つ、または四つの全部を取り除いたとしても、その人はなおも意識ある生き物です。実際の感覚器官は機能を果たしていないのですが、本人は喜び、悲しみ、安らかさ、苦痛などを意識していて、さまざまの精神的な印象を感じたり、それらを完全に描いたりできます。

テレパシーが働くのは、このいわゆる第五感（触覚）なのです。したがって私たちが触覚なるものは肉体的感覚だという考えに固執するならば、テレパシーの定義はまちがっており、科学は軌道をはずれていたということになります。想念伝達、透視、予知、その他不可視の知覚作用にたいしてどんな薬を用いても、これらの働きは心の協力によって脳を通じてあらわれる触覚要素の全く正常な機能なのです。

一般に理解されているように、第五感とは触覚から起こる感じではなく、接触によって起こる感じであると多くの人が私に注意してくれましたが、これは以上に述べた理論を変えるものではありません。四つの感覚器官のどれもこの触覚の能力、すなわちそれなくしては知覚性のない意識的接触の要素を持っているからです。感触というものは肉体の神経反応ですが、一方、触覚は基本的な〝生命力〟です。〝感じ〟というものが生み出されるのは、この〝生命力〟の意識的接触によるのです。

接触の法則で知覚が生じる

私たちは比較の法則によって物の動きを知ることができるのですが、これは実際には接触の法則、すなわち一つの現象面と他の現象面とのあいだの関係です。私たちは指である物体に触れるとき、その物体の印象を感受しますが、これは大きな振動と小さな振動の接触によってつくり出される圧力のためです。同じように、私たちは目の網膜または耳の鼓膜でもって光または音の波動と接触することにより、目に見える印象または耳に聴こえる印象を受けます。また大気の分子と

肉体の細胞との接触により、大気の状態や温度の変化に気づきます。これらの例によって、触感というものは接触による神経反応にすぎないことがわかります。feeling と touch は事実上同義語ですから、いわゆる第五感を意味する場合には（原書では）feeling という語を用い続けることにしましょう。

この触覚の要素、すなわち自己表現のために意識的な状態において反応を示す能力を持つ英知ある力、いいかえれば、存在する波動の接触すべてを記録する要素を四つの感覚器官のどれも持っているがゆえに、私たちが認めねばならないのは、テレパシーはたしかにいわゆる感覚器官の正常な働き以外の何物でもないという点です。なぜなら受信経路の如何にかかわらず、想念が知られるようになるのは触覚が経路になっているからです。

疑問が起こるかもしれません。触覚を持たないで生まれたごくまれな人たちをどのように説明するか。この人たちは肉体的苦痛を感じないし、重傷を負っても苦しまないではないか。これは本人たちのテレパシーの能力を低下させることになるのではないかと。

絶対にそんなことはありません。これは神経組織が不完全なためにひき起こされた全くの肉体的状態であって、その人が一本の指が欠けたまま生まれた場合と同様に、〝生命力の働き〟すなわち真実の触覚とは何の関係もないのです。視覚、聴覚、味覚、嗅覚などの感覚器官は右のような人々にも正常に働いています。人間が苦痛を記録する度合は神経組織にかかっていますから、その組織が鋭敏であればあるほど苦痛はひどく感じられるのです。

この不幸な人々は、うらやましい存在というよりもむしろ哀れむべき存在です。なぜなら、なにかの異常な状態が起こったとき、自然の配電盤である脳に警報を打電するために、肉体の全体を通じて絶えず見張っている小さな歩哨（神経）たちは私たちの忠実な友であるからです。

たとえば手の中に破片が突き刺さったとしましょう。この歩哨すなわち神経はたちまち大騒ぎを始め、周囲の組織に異分子が圧力を加えていることを脳に伝えます。そこで破片を取り除いて圧力をなくしますと傷は治ります。しかし神経が正常な機能を果たしていないために脳がこの情報を受けとらなかったとしたら、肉体が異分子を追放しようとしてそのあたりを化膿させるまでは、本人は破片の存在に気づかないかもしれません。しかしそれは肉体の状態ですから、この神経の感覚の欠乏はテレパシーの感受力とは何の関係もありません。それは瞳（ひとみ）の色がどんな色であってもこの感受力と関係がないのと同様です。

人間は小宇宙です。したがってその見地から人間を分析してみることにしましょう。

心は暴君にすぎない

現象の世界における万物は四要素、つまり土、水、火、空気にもとづいていることはだれも知っています。この四要素の組み合わせからさまざまの形ある物が無数に生み出されていますが、これらの四要素に含まれるどの原子にも、破壊できない、説明しがたい一つの力があります。それは研究家がどんなに努力しても解明することのできない、存在することがはっきりわかっていてもとらえがたい何物かです。最も熱心な研究家でさえもその力の性質または根源を明らかにすることはできません。物質の創造に刺激を与えるのは、この活動的な力なのです。

人間においても同じ状態が存在していることがわかります。つまり人間の内部に衝動すなわち活動をひき起こす不可解な力によって助けられ、支えられている四つの活動面（目・耳・鼻・口）です。

したがって次のことが明らかになります。つまり、自然界において活動を与える力がけっして四要素の一つではないのと同様に、触覚も肉体の一感覚器官ではないという事実です。

ひとたびこのことを理解すると、〝宇宙の英知〟から生まれたこの力こそは、あらゆる生命の基礎であるということが私にわかりました。これ以上何物もつけ加える必要はありません。すべてが存在するからです。

しかし肉体人間として私はこの万物を包含する力を認めて応用し始めねばなりません。この点において私は自分の心（マインド）を仔細に調べてみました。すると驚いたことに、それは不正確な状態にあって、まるで暴君のようにふるまっているではありませんか！　それはただ感覚器官の反応を伝えるスポークスマンにすぎないことがわかりました。〝宇宙の因を知る者〟ではなかったのです。

これを次のように説明してみましょう。日常私たちが出会う普通の人々の心（マインド）は、本人の四つの感覚器官（目・耳・鼻・口）から集められた意見を表現しているにすぎません。したがって本人のいわゆる知性は、その人の好き嫌い、その人の理解していないものすべてにたいする一人勝手な判断などによって左右されるのです。

だからといって、そのような人をひどく非難してはなりません。それは長い間につちかわれた普通の態度であるからです。

私たちはこれまで四つの感覚器官を、それぞれ威張り散らす支配者として、たがいにケンカさせ、反目させていました。そして、それらを存在せしめた〝創造力〟に全然気づかなかったのです。

四つの感覚器官は争い合っている

この四つの感覚器官の働きを注意深く調べて私にわかったのは、どの感覚器官も孤立し、他の感覚器官と調和しないで互いに争っているという事実でした。各感覚器官はそれ自体の意志を持っていますから、他の三つの感覚器官と対立することができますし、また常に対立していてもいるわけです。そうすることにおいて、それは〝宇宙の意志〟にも対立しているのです。人間が統一された存在となり、肉体を構成するあらゆる部分について自分自身というものを理解するようになるまでは、人間にとってこの状態は続くで

しょう。

各感覚器官がいかに調和しないかという点で二、三の例があります。まず次のような空想的場面を応用することにしましょう。一千人の収容力をもつホールの中に、一匹の昆虫が落ちてもその物音が全員に聴こえるほどに床面の感度が高くしてあるとします。そしてこの知識を出席者の心によく植えつけておくために、床の感度を証明する実験を何度も行ったとします。

そこで、厚い当て物をつけた靴底を使用するというトリックによって、足音をたてないように一人の男が中央の通路を歩くとしますと、出席者の目と耳のあいだに次のような会話がかわされるかもしれません。

目「私には一人の男が中央通路を歩いているのが見える」

耳「とんでもない！　ぼくには音は聴こえないよ」

目「だけど男はそこにいるんだ。真ん中辺にいる」

耳「そりゃあ君の空想だよ。この床がどんなに感度が高いかは、ぼくたち二人とも知ってるじゃないか。人が通路を歩いているのなら足音が聴こえるはずだ」

目は人を見ますが、耳は音を聴きません。そこで、「君はウソをついている」といって聴覚は視覚を非難します。人間はそこにいるのですが、感覚器官同士が互いに相手を尊敬しないために、目も耳も過ちをおかすことがあるということを認めようとしないのです。ですから二つの感覚器官のあいだの論争は満足に解決することはありません。

次にこの手順を逆にして、遠隔操作によって通路を歩く足音をたてさせることにします。今度は目が耳にむかって、その音は君が空想でつくり出したものだといって非難するでしょう。すると、またも二つの感覚器官のあいだに激論が起こって、互いに一歩もゆずろうとはしません。

実際には両方とも正しいのです。目は男を見ましたし、耳は足音を聴きました。もし二つの感覚器官が正しく調和または同調しているならば、目は自分の見たものを耳に語ったでしょうし、耳はひどく反論するかわりに目の言うことを信じたでしょう。耳は音を聴いたにもかかわらず、目が男を見なかった場合、目はホールを注意深くジッと見渡してから、それが自分には理解できないものであることを認めて、耳が伝えた情報を受け入れたかもしれません。言い替えれば、ウソをついているといって相手を横柄に非難するかわりに、自分が間違っていたのだろうと両方が互いに謝り合ったかもしれないのです。

これと同じような不和は他の二つの感覚器官の関係にも存在しています。珍しいチーズのおいしい味を口（味覚器官）は味わうことができますが、多くの場合、チーズからたちのぼる芳香に鼻のほうはたまらなくなって、珍味をひとりで楽しんでいる口と衝突します。

したがって次のことがきわめて明瞭になってきます。つまり互いの交渉において四つの感覚器官は絶えず口論しており、他を支配しようとしているのです。

ところで、私が感覚器官同士の闘争をとりあげる理由がおわかりですか？　それらがいかに一致していないか、いかに互いに非難し合っているかという事実がおわかりですか？

四つの感覚器官が心（マインド）を作り上げる

こんにち人間の心（マインド）を作り上げているはこの四つの径路（感覚器官）なのです。これらは人間を結果の世界（現象の世界）に閉じ込めている牢番です。人間が自制によってそれらに打ち勝ち、それらの足枷（かせ）をはずさない限り、人間は各感覚器官の気まぐれの奴隷（どれい）の状態を続けるでしょう。

人間がさまざまの状態や人々や国家などについて勝手な判断をし、万物が〝宇宙の因〟と一体であることを理解しないのは、われわれの感覚器官（複数）のためなのです。

ですから人間が自身の内部でおだやかな統一体になろうとするなら、このすねた感覚器官を絶えず警戒して、それがもつ非難や偏見に打ち勝たねばなりません。なぜなら、この感覚器官たちこそ人間関係という家族の中に分裂をひき起こす最大の原因であるからです。人間の個人的な判断が兄弟と兄弟、国家と国家を引き離すのです。

自己訓練を行う

このことに気づいたとき、私は忍耐の法則を応用して自己訓練を始めました。最初は私の感覚器官がこの法則を理解しなくても、訓練によって結局は忍耐の法則に従うことが私にわかっていました。そして、各感覚器官はより高次な法則に従属していることを認めるという事実そのものによって、それらは各自の働きの背後にひそむ目的や、結果の奥にひそむ〝因（創造主）〟をやがては理解するにちがいありません。したがって、私の最初の段階は、私の感覚器官たちの反応を〝因〟と調和するように調整し、これを理解させることでした。

一例としてバイオリンをあげてみましょう。演奏者はこの楽器が生み出すことのできる微妙なハーモニーを奏（かな）でる前に、バイオリンの四つの絃をきわめて正確に調絃する必要があることはだれも知っています。各絃のピッチは他の三つの絃にたいして完全に合っていなければなりません。

人間の四つの感覚器官は、このバイオリンの四つの絃にたとえることができます。人間の生命の真の目的を遂行するためには、これらの感覚器官が一つの統一体として働くように調和させる必要があるのです。そしてバイオリンが下品な音楽の演奏に使用されることもある一方、名演奏家の手になれば、魂をゆさぶるようなメロディーを生み出すことができるのと同じように、結果（現象）から〝宇宙の因〟に向きなおった感覚器官の知覚力は、迷いの泥沼から自身を救い出すでしょう。このようにして感覚器官の知覚

力は、各器官を通じて自動的にあらわしている古くさい考え方や習慣などを打ち破るでしょう。

本来怠け者である〝肉体の心〟は、感覚器官たちがそれぞれの接触や体験によってつくり上げてきた意見をそのまま受け入れるのであって、万象の背後にひそむ真の〝因〟の探求などをやろうとはしないのです。

宇宙の感覚の意志に従う

これらすべての事柄を深く考えながら私は自問しました。

「かりに私が偉大な視力を持っていて、テレビ受像機の助けを借りずにテレビの画像が見えるとし、また私の耳が異常に鋭くて、ラジオ受信機を用いないで放送局から空間を流れている美しい音楽を聴くことができるとすれば、私の視覚と聴覚は四次元にまで発達したのではないだろうか？」

次に私は味覚と嗅覚という感覚に注意を転じました。

「もしリンゴが熟する前に私がそれを味わうことができ、また花が咲き出る前にその芳香を嗅ぐことができるとすれば、私は超人間の感覚を持つということになるのではないだろうか？」

するとただちに私自身の解答が浮かび上がってきました。

「こんな能力はすべておまえの内部に潜在している。ただし各感覚器官が自分の個人的な意志を捨てて、〝宇宙の感覚の意志〟に従うならばだ。なぜなら〝宇宙の感覚〟こそ〝基本的な感覚〟であり、自分という存在を通じて溢れ出る〝宇宙の因〟の現れであるからだ」

このとき私にわかったのは、〝宇宙の感覚〟こそたしかに私のこの肉体を作った〝主なる建設者〟であり、他の四つの感覚はなくても、さまざまの帝国を建設することができたということです。

この結論から、私の心は生命とその目的に関する自分の限られた知識に従って反映し反応しているにすぎないことが理解できました。

以上のすべてはスペース・ブラザーズ（友好的な異星人）によって正しいと確証されています。彼らはこれらの人間の活動の面を宇宙との関係に照らして観察し評価していたのです。

しかし異星人（ブラザーズ）とコンタクトする以前から私は進歩しようと真剣に努力していましたので、自分の各感覚器官を〝宇宙の因〟と調和させ充分に理解させるように調整することが緊急の要務であることに気づきました。この〝宇宙の英知〟は万象の奥にあり、万象に浸透しているからです。したがって、意見の不一致を起こしがちな感覚器官の知覚力をこのように服従させることが、心の作用をコントロールするのに主要な要素となるのです。

◀8ミリで撮影するアダムスキー。彼は光学機械類に熟達していた。

想念の観察と記録

私の次の段階は、各感覚器官の訓練と、心によって感受される印象類の観察でなければならないことに気づいて、私はある一定の計画に従うことにきめました。つまり一種の精神手帳を作るのです。

すなわち、一日を通じて感じた想念で個人的性質を帯びているものすべてを片方の頁に記入し、他方の頁には私の行動のもととなった宇宙的な想念を記録しました。こうして毎日の終わりに、偏狭な個人的意見か、または宇宙的な洞察力のいずれがその日を支配したかをきめるために、得点数を集計していったのです。

これには全く大変な忍耐を要しましたが、ついに私の各感覚器官に聞き耳をたてさせて、外部から来る印象をはっきりと感受し得るように馴らすことができました。

だが実際にはこれを行うのは最も困難なことでした。古い考えがしつこく顔を出して私の心にその解釈を与えるからです。

しかし自分のセンスマインド（感覚器官の心）をコントロールし続けるうちに、私が受ける印象類は明瞭になってきて、しだいに多くの宇宙的性質を帯びた想念を含むようになり、個人的意見は少なくなってきました。

印象とは何か

次に私は印象とは何かという問題の解明に転じて、その多くは私たちが意見として分類しているもの、つまり私たちの心が絶えず肉体の各部に伝達している命令と同じく、意識的な想念であることを発見したのです。

たとえばあなたは読書をしています。一頁を読み終わると紙をめくってまた読み続けますが、あなたの手が紙をめくろうとして動き出す前に、あなたの心がまず次のような考えを起こす必要があります。

「頁の終わりにきた。紙をめくって次の頁を読み続けよ」

通常私たちはこんな考えを起こしたことに気づきません。どんな行動でも一つ一つこんなように意識的に表現されねばならないとすれば、それこそスローモーションの世界に生きることになります。しかし、あらかじめ設計図が描かれて命令が与えられないことには、いかなる運動や動作をも行うことは不可能です。肉体のあらゆる運動にたいする命令は、まず心の中に起こす想念でなければなりません。

私たちは成長するにつれて脳からの命令が自動的に来ます。しかし赤ん坊が歩く練習をするのをごらんなさい。彼の最

初の試みは片足を他の足の前に置こうという意識的な努力によってなされます。ところで、あなた自身の運動を分析してごらんなさい。たとえば、髪を後ろへ撫でつけようとして、あなたの手が額にちょうど届いたとします。その動作を調べてみますと、まず皮膚の表面でくすぐったい感じに気づくでしょう。もっと注意深くこの動作を分析しますと、くすぐったい感じを伝えるメッセージが脳に送られ、次に脳が手にたいして「さらに上へ伸ばして髪を撫でつけよ」という命令を下すことがわかります。習慣によってほとんどの動作は感覚器官の反応になっていますが、私たちのいわゆる感覚器官の反応は知性的にコントロールされているのです。現在私たちが意識的な想念を起こさないで行っている物事は、私たちの発育においてかつては大仕事でした。

これはもちろん印象類のなかの一つの面にすぎませんが、人間が理解するのに非常に重要なものです。あらゆる生命が想念すなわち知性に依存していることをそれが説明しているからです。多くの肉体の心が自分の狭い偏見に満ちた考え方または習慣的想念を形成するのは、この面の印象類からです。

自然界においては、動作をうながすこの衝動は万物を造っている〝宇宙の因〟から直接やってきます。大自然はリンゴの種子から松の木を生やそうなどと気まぐれなことはしません。したがって宇宙は創造と改造の秩序ある現れの中に動いているのです。

人間もこの法則のもとにあります。だからこそ私たちは自分の現在の制限を越えて、より高度な理解をめざして努力しようという内部からの衝動にかられるのです。

第4章　エネルギーとしての想念

宇宙を理解することが必要

私の心の基本的な働きについて、以上のようないっそう明瞭な理解は私を目覚めさせて、印象類は多くの異なる径路を通じて来るのだという悟りに到達せしめました。いまや私にとって必要なのは、各印象が結果の（現象の）世界の一小部分として知られる肉体的な源泉から起こったのか、それとも〝宇宙の因〟から私の内部にある純粋な〝因（または力）〟にやって来る真実の宇宙的な印象なのかを知るために、各印象を注意深く調べることにありました。

私たちはテレパシーすなわち想念伝達の問題を取り上げるとき、想念そのものについて多少とも知らねばなりません。これをなすには私たちが生きている宇宙を理解する必要があります。というのは、人間は大自然の産物であり、人間の自然の精神状態においては、意識していないとにかかわらず自分自身をその法則（自然の諸法則）に結びつけているからです。

人間の知る限りでは、宇宙は三つのもの、すなわち〝英知、力、形〟から成り立っています。私がここで英知という言葉を用いるのは、これ以上に適切な言葉がないからです。地球上の言語で〝宇宙の英知〟の真の意味を定義するほどの表現力を持つ言葉はありません。私たちはただこの〝至上なる英知〟から万物が現れていることを知っているだけです。

〝力〟と〝形〟は、前者が衝動すなわちエネルギーとして、後者が現象すなわち形として考えられます。しかし両方の創造主、つまりキリスト教で〝父〟と呼ばれる原理は、人間の理解力を超えたものです。

宇宙力については、それが二つの活動の分野、すなわち吸引力と反発力を持っているということ以外に私たちはほとんど何も知っていません。これらはエネルギーに変えられ、物質すなわち形ある物すべてに充満しています。私たちは力学の分野でエネルギーとして知られている力を、その運動の結果によってのみ認め、心理学の研究では想念や感情などとして認めています。

想念は化学作用

物質の原子を存在させ活動させているのはこの宇宙力です。しかしこの意味における物質は目に見える現象だけに限りません。固い物質を作り上げているのと同じ原子が、また空間の諸元素を作り上げているからです。

人間の現在の知識では、およそ百いくつの元素があり、それらから無数の化合物や合成物が創造されています。人間はまさに〝英知によって創り出され、〝力〟によって永続せしめられている化学的な宇宙ともいうべき世界に生きているのです。私たちが周囲に見る万物は化学的な作用と反作用の結果です。光、熱、音響、成長と崩壊は、すべて化学作用によるものです。そして信じられないかもしれませんが、想念もまた一種の化学作用なのです！

私たちは周囲に見える現象から〝根本的な創造〟を説明することはできませんし、親和の法則によって引き起こされる一つの活動だという以外に、想念の創造を説明することもできません。ある種の吸引と反発の作用を何が引き起こすのか私たちにはわかりませんが、ただ、このような法則が存在し、それがエネルギーを持つ形ある物を作るために化学物質の結合を支配しているという事実を私たちは認めねばなりません。それはあらゆる方向に放射する一つの攻勢的な力であり、周囲の力の空間に圧力を起こし、それによってその成分の中に波動を生じさせるのです。

あらゆる想念は空間に振動として記録されます。想念が耳に聴こえる状態にされるとき、それは、それ自体に比例した高低の度合すなわち振動数を生み出します。これと同じ法則が無言の想念にもあてはまるのです。というのは、想念もまた空間という感光板上に記録される一定の振動率を持っているからです。

想念は鉄砲の銃身から発射される弾丸

のように直線状で放射されるのではなく、あらゆる方向に無数の直線となって進行します。想念を光のスパークとして想像すればよいでしょう。それはあらゆる方向に等しい力として伸びて行く放射線群であり、その広がりにおいてどの一点でも球型の感じを起こさせます。そして光と同様に、想念の振動も一度作り出されると、この特殊なエネルギーの放射線を吸収したり散らしたりできる何かの物体で阻止されない限り、無限に進行するのです。

心（マインド）とは何か

ここで疑問が起こるかもしれません。「想念が化学作用によって生み出されるエネルギーの放射線にすぎないものならば、心（マインド）とはいったい何なのか?」と。

心（マインド）とは想念を一点から別な一点へ運ぶ媒体なのです。普通の推理によりますと、波動的なものにせよ物質にせよ何かの被伝達物は、それを伝達する媒体がない限り、一点から別な一点へ進行することはできないといわれています。電気エネルギー、光、音波などの研究において、科学は種々の媒体を認めています。光の伝達の媒質を科学者はエーテルと名づけました。彼らはエーテルの性質がわからないと言う一方、その存在を信じていますし、それがあらゆる物質中に存在し、空間のすべてに充満していて、さまざまのタイプの波動を一点から一点へ伝えることができるという事実を確信しています。しかるにエーテルの実在について彼らが持っている唯一の証拠は、創り出された結果なのです。

同じようにして、遠方からの想念の伝達について豊富な証拠を私たちは持っていますので、想念伝達の普遍的な媒質が存在することを認める必要があります。私たちは心の性質や構成を明らかにすることはできません。エーテルと同様に、心（マインド）はあらゆる空間と物質に浸透しており、心（マインド）そのものを通じて、光の波動よりもはるかに精妙な想念波動を運ぶことが可能であることを知っているだけです。

心（マインド）が何であろうとも、それは高次な荷電粒子から成っていて、性質の精妙さは別としても、物質的形態を構成する、より以上に集中化した実体のようなものであるにちがいないのです。中継するものがあるからこそ、エネルギーは一点から一点へ運ばれることができるのです。

想念はどのようにして伝達されるか

この伝達法を説明するために、テーブル上にドミノ牌を一列に立てて並べてみることにします。各牌のあいだには牌の長さの三分の二ばかりの間隔をおきます。

さて指を用いてエネルギー化した軽い圧力を加えてやりますと、最初の牌は二番目の牌にむかって倒れかかり、そのためにその牌へ得られたエネルギーを伝えます。二番目も倒れながら三番目にエネルギーを伝え、こんなふうにして最後の牌はテーブル上に倒れて、それらの全エネルギーは音と熱とに変えられてしまいました。ここで最初の動作は二つの物体すなわち指と最初の牌との力のこもった接触によって生み出され、中継のシステムによって他の物体群に伝えられたのです。

このようにして想念も一点から別な一点へ伝えられます。二つまたはそれ以上の単位（想念が化学作用であることを忘れないように）の接触によって作られる、荷電微粒子以外の何物でもない、エネルギーを持つ想念放射線は、他の微粒子に圧力を加えることによってそのエネルギーを伝えながら放射されるのです。この力が一度発生して、その性質を変える能力のある何かの媒体に拾われるまでは、これは無限に続きます。いかなるタイプのエネルギーといえども破壊されることはありません。ある形から他の形に変えられるだけです。一タイプのエネルギーである想念も、何かに利用されるまでは宇宙空間を進行するのです。

このことからわかるのは、宇宙には中心がなく、あらゆる知識を放つ〝王座〟もないということです。行動の一つ一つがそれ自体にたいして宇宙の中心になるのです。なぜなら行動から放射された放射線はあらゆる方向に進み、宇宙空間を満たすからです。触れることのできるものと触れることのできないもの（この場合は想念を意味します）との両方にわたって、すべてのものが一つの〝宇宙の因〟から生まれ出ていますので、およそ宇宙的でない行動は存在しないということを私たちは容易に考えることができます。

真理を述べている創世記

創造の物語に目を移して宇宙の構造を調べてみましょう。創世記の第一章を注意深く読んでみますと、創造には形がなく、それは最初に神の心の中でつくられた想念にすぎなかったと述べてあります。この章においてはあらゆる事が慎重に計画されていることがわかります。青草と実を結ぶ樹木、生命を持つ生き物を沢山生み出す海と飛ぶ鳥、その種に従った生き物、家畜、その種に従った地上の昆虫と獣（けもの）――。それから神は「われらにかたどって、われらの形のごとくに人間を創ることにしよう」と言っています。

創世記の第二章では、霧が地からたちのぼって土地のおもてをあまねく潤し、種子を生長させるようにしたり、土でもって神が野のすべての獣と空のすべての鳥を創ったり、土のチリでもって人間を創り、生命の息をその鼻孔に吹き入れて、人間が生ける魂になった様子が述べてあります。したがって創造主は、すでに形づくられていて「善し」と宣言した原型に従って、形のない空間から天と地とあらゆる生命とを現象化させたのです。

この創造の物語は、私たちがこれまで信じていたのとちがって、この小さな地球に限るのではなく、全宇宙に渡るものです。天空（エーテル）からさまざまの密度の状態を通じて無機物に至るまで、万物は最初想念なのであって、続いて結果を（現象を）創り出すために物質（原子）の組成が行われました。この意味に

おける物質とは触知し得る現象に限るものではなく、創造の母性原理に及ぶものです。父性原理すなわち創造主と、力すなわち物質から成る母性原理から、息子すなわち万物が生まれたのです。

人間とは活動する想念

以上のことから私はいまや人間とは活動する想念であることがわかりました！もとの原型は〝宇宙の英知〟から発したのですから、人間は〝神の想念〟をあらわす一つの径路にすぎません。

以上の説明に初めは驚く人もあるでしょうが、しかし万物は活動する神の想念であることを忘れてはなりません。したがって、推理する心を持ち、「地上のすべてを治めしめられた」人間は、無限の潜在能力を持っています。人間の存在そのものをこの〝宇宙の英知（神）〟に負っているがゆえに、人間はあらゆる生命との親近感を本能的に感じるのです。そして人間の思考力の進歩すなわち純化は、放蕩息子が結局〝父〟の家に帰ってゆく道なのです。

ここでちょっと話を変えましょう。人間とは〝神の息〟によって刺激を与えられた〝神の想念〟である（なぜならエーテルは神の創造物であるからです）ということを理解している異星人は、あらゆる人類にたいして尊敬の念を抱いています。これが『宇宙からの訪問者』で述べられている、読者にとって不可解であった箇所の説明です。現実的な地球人は「人を殺すよりもむしろ自分のために死を選ぶ」という哲学に疑問を投げていますが、他の惑星に住む進化した異星人は、自分の前に他人が立つ場合、自分が〝生ける神〟の面前にいるのだというふうに意識しているのです。

異星人は地球人の欠点を非難しません。地球人が理解力の程度に応じて行動していることを彼らは知っているからです。地球人は現在宇宙的な成長を遂げつつあるのですが、彼らはすでにその段階を通過しています。そして私たちも考え方の自然な発達と純化とによって、彼らの現段階に達するでしょう。ですから私たちは絶えず自分たちの神を思い浮かべ、心を注意深く導くように努力する義務があるのです。

想念は万物からやって来る

想念はどれもそれぞれの程度に応じてある高低の度合つまり振動数を持っていますから、われわれは各想念のレベルが異なることが当然わかります。私たちが日常放っている想念波動は、全く各人の理解の程度に応じた段階にあるのです。

ここで重要なのは、類は類を呼ぶという言葉です。ときどき私たちは高いレベルの想念波動または低いレベルの想念波動に接することがありますが、普通は自分の理解力に応じた程度に習慣的に心を働かせているだけです。

大抵の場合、私たちが気づいている唯一の想念は、自分の感覚器官や体験を通じて蓄積した身近な想念ですが、しかし宇宙の知恵の宝石が私たちの習慣的な思考の中にもちりばめられています。

私たちがいま日常のきまりきった仕事に取りかかろうとしているとします。そのとき自分の心は静かに自分の習慣的な考え方に従います。

すると〝天空〟の彼方から、私たちの普通の考え方にとって全く未知な一つの想念――宇宙的な性質を帯びたもの――が来るでしょう。発生している事の重大さを理解しない大多数の人はハッとして疑問を起こし、その想念の流れをときとしてせきとめてしまうのです。「こんな考えはどこから来たのだろう？」

ところが、もしそのとき自分の肉体の心を静めて、内部の低い静かな声を聴くならば、広大な理解の視野が展開するでしょう。

以上の説明は、心に入って来る異常な想念のすべてが宇宙的な性質を帯びているので受け入れなければならないと言うのではありません。なぜならこの研究で進歩するにつれて、私たちは想念というものが多くの異なる源泉から来るものであることを知るようになるからです。

想念は他人から来るだけだという考えに私たちは習慣づけられていましたが、実際には〝宇宙の因〟、肉体の原子そのもの、自然のあらゆる物などから放たれているのです。したがって明らかなのは、人間は心の中で抱く想念については、極力これを選択しなければならないということです。

ある助力を無意識に受け取ることもあるという例がもう一つあります。これはだれもがかつて体験したことです。私たちの心が一つの難問題に苦しんでいるとしましょう。あらゆる角度からその問題を検討したにもかかわらず、解決が見い出せません。まさにあきらめようとしたとき、突然解答がわき起こってきます。

これはべつに不可解な超感覚的知覚作用ではなく、宇宙の知識に無意識に同調した結果です。自分が応用している法則を理解している探求者は、自分の肉体の心をコントロールし、解決を生み出すのです。以上述べたことが間違いないことはスペース・ブラザーズ（友星人）によって確証されています。

第1部の要約

この第1部はあとの第2部、第3部の基礎になるので非常に重要です。第1部で述べられた知識があなた自身の一部分になるまで反復熟読して下さい。

(1) 各感覚器官をコントロールすること

あなたが行わねばならない第一段階は各感覚器官の訓練です。手足に自分を支配させてはならないのと同様に、感覚器官に自分を支配させてはなりません。私たちの四肢はそれ自体の意志を突然に発達させ、独立した行動を起こすようにはなりません。それらは心から伝えられるメッセージに従っているのです。

視覚、聴覚、味覚、嗅覚などの各感覚器官は、あくまでも脳へ情報を送る伝達者にとどめるべきであって、私たちの生活の独裁的な支配者にしてはいけません。

それらを私たちの召使とするべきで、主人にしてはいけないのです。

この四つの感覚器官を調べてみますと、それらが生命体の組織の中で絶えず自分の地位を高めようとして、自分の周囲に見る物すべてを軽視しているのがわかります。このような状態を起こさせてはなりません。

(2)自然界と一体化すること

あなたに与えているのと同じ〝神の生命の息〟によって万物が生かされていることを自覚しながら、慈悲深い理解をもって自然を見なさい。この〝息〟の中に〝大宇宙〟の刺激的な〝力〟が含まれているからです。形ある物にその目的を遂行する能力を与えているのは、万物を貫いているこの一つの〝力〟なのです。

したがって分裂というものは存在しないことがわかります。万物と一体であることを正直に感じるまで努力しなければなりません。同情に満ちた感覚こそ伝達の径路であるからです。想念伝達の成功の見込がつくようになる前に、右の基礎が確立される必要があります。

あらゆる自然は自由無碍の状態で〝創造主〟をあらわしていますので、あなたは自然を見習うように努力しなければなりません。ここで述べていることのよい例を『宇宙からの訪問者(アダムスキー全集第一巻)』に出てくる異星人のマスターたちの述べたメッセージの中に見い出すことができます。彼らは生活態度を地球人のそれと比較していますが、地球人の欠点を全く非難していないことがわかるでしょう。

(3)習慣的な考えを捨てて、想念を観察し、記録すること

あなたは自分の感情を支配し、コントロールしなければなりません。あなたの習慣的な考え方が、真の状態における物事を見ようというあなたの願望に反対しようとしても失望してはいけません。

記憶すべきは、あなたはこれまでずっと自分の習慣的な想念を自分で作っていたということです。忍耐によってあなたは周囲に見るすべての物と自分が一体であることに気づくことができ、人間のつくった分裂というものが誤っていることを悟るでしょう。

次の段階に入る前に、あなたは自己訓練をする必要があります。それで私がおすすめしたいのは、日記帳を用意して、一日中あなたに影響を与えた想念や感情をチェックし続けることです。わき起こる想念と感情の一つ一つを(善、悪の両方とも)注意深く書きとめて評価し、それらがその日のあなたの生活に及ぼした影響を調べてごらんなさい。

第二部は練習によって〝宇宙の英知〟の表現であるあなた自身に関するより大いなる自覚をあなたに起こさせるでしょう。

(第I部完。以下次号)

訳者付記

この『テレパシー開発法』講座は原書が三分冊になっており、一九五八年(昭和三十三年)に発行された。三カ月にわたって毎月一分冊ずつ訳者宛にアダムスキーから送られたことを記憶している。

この深遠巨大な書物の最初の日本語訳は訳者により『精神感応』と題して黒い表紙で三十五年に刊行され、これがアダムスキーに贈られた。後年訳者がカリフォルニア州ビスタのアダムスキーの住んでいた家を訪問したとき、書棚にこの書があったのを覚えている。その後更に改訳したのが現行の『テレパシー』(文久書林刊)で、更に訳し直した最終改訳決定版が連載中の本記事である。

大方の読者が本講座を読んで戸惑うのは、目、耳、鼻、口の四つの感覚器官が勝手な解釈をして争い合っているので、これらをコントロールしなければならないという理論であろう。この説を信じない人が多いようだが、実はこの理論は科学界で研究され、ある程度裏付けられていたのである。

戦後に東北大学の学長になられた生理学者・本川弘一博士の研究がそれで、次のとおりだ。

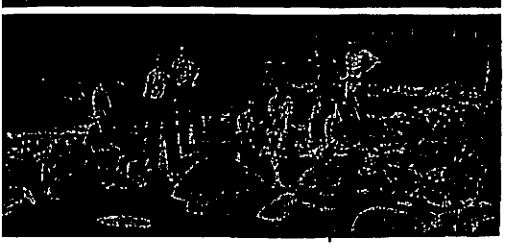
網膜が形と色を明確化するというのは、必要な信号を強調し、不要な信号を消去する作用であって、これで網膜が状況判断機構の第一段階の役割を果たす。これは本川博士がもと脳波研究を行っているときに目からも不思議な波動が出ることを発見してこれを『X波』と名づけたことに始まる。これは世界的大発見であったが、戦争中のため各国の学界から認められなかった。数年後、イギリスの生理学者エドガー・ダグラス・エードリアンがこれと同じ現象を発見し、神経単位ニューロンの発見によりノーベル賞を授けられたけれども、本川博士が先駆者であったことを知って脱帽したという。

博士は更に光と図形を用いた実験により、網膜上で図形から誘導される未知の波動を発見し、これを『網膜波』と名づけた。昭和二十四年のことである。ところがそれから四年後にオーストラリアのエックルスが、網膜を形成する神経細胞には積極的な信号(興奮)を発生する以外に、信号を打ち消す信号(抑制)を発生する要因があることを発見してノーベル賞を受けている。本川博士の網膜波の発見は抑制という実体を突きとめる所までゆかなかったために一歩先を越されたのである。しかし博士の大研究は網膜の細胞同士が横に信号を送り合い誘導場を作って図形を明瞭にしていることを意味し、これが判断や思考の働きの基本形式であるということになる。すなわち「網膜が考えている」ということになるのだ。

またかつてノーベル賞候補になった慶応大学医学部の富田恒男教授による網膜電図電位発生機構の大発見によって、目という視覚器官が〝意志〟を持つ生き物であることも解明された。

以上でアダムスキーの感覚器官に関する説が荒唐無稽どころか未来の科学を先取りした驚くべき理論であることがわかるはずである。しかもこの記事の原書は一九五〇年代に書かれたのである。

なお想念を観察するための『想念観察手帳』なるものを日本GAPでは早くから製作頒布していたが、最近品切れとなった。本記事中のゴシック体の部分は原書の指定に準じた。



第一回名古屋支部大会

●四月二十四日(日)
●愛知県産業貿易館(名古屋市)
●出席者　二十七名

中部地方で久方振りに盛大な行事が行われ、予想以上の成果を得た。会場には早くから会員の方々が詰め掛け、遠方からも多数御参加頂く。控室にて久保田会長と打ち合わせを行い、ふと窓から外を眺めると緑に囲まれた名古屋城が見え、昨日まで続いた雨が嘘のように晴れわたっている。

落ち着いた林氏の司会により、会長の「宇宙の法則とアダムスキー問題」と題する素晴らしい御講演が始まる。この中で〝四官をコントロールして静めること〟〝自分を宇宙力(Cosmic Power)とみること〟の重要性について強調された。物事の因果関係まで話は進み、会場内には宇宙的フィーリングが伝わり、精神的に一体となって行く。さらに深遠なアダムスキー問題について熱弁をふるわれる。

記念撮影、休憩、自己紹介の後、質疑応答と続き、アメリカでガンになった子供が、医学では絶対助からないので、学者の研究グループが科学的にイメージを描くことを指導し、この試みでガンを克服したという興味深いお話等、広範囲な質問と貴重な回答が対をなして進行した。又、関谷氏の資料が展示され大会に花を添えた。

大会終了後、夕食会が行われ、少人数ながらもユニークな話が飛び交う。さらに二次会となり、酔いと共に話は深まっていった。

不思議と翌日も曇ひとつない好天に恵まれ、楽しいドライブとなった。大野、犬山、小川、佐分、仲間、林の各氏が同行される。目的地の香嵐渓は東海随一の紅葉の名所であり、美しい渓谷である。途中、先生に〝生きる上で重要なこと〟について意見を伺う。愛知県緑化センターと香嵐渓にて愉快に記念撮影を行う。

理解力同様、感じ方は個人差があり、千差万別であるけれども、GAPの大会には宇宙的な独自のフィーリングがあります。

今大会は、若さあふれる自然な活気がありました。無事、大盛況のもとに終了いたしましたのも、当日、御参加下さいました方々の御陰であり、久保田先生はじめお世話頂きました方々に深くお礼申し上げます。

(武田充弘)

静岡支部大会

●五月一日(日)
●静岡交通ビル(静岡市)
●出席者　五十六名

茶畑の新芽の緑が目に染みるような美しさを見せてくれる五月一日、全国から熱心な会員多数が駆け付け、高次元な雰囲気のなか久保田会長をお迎えし大会は開催された。実践家高梨氏の司会でスムーズに進行。会員の体験講演は、支部切っての女性有力メンバー光井寿子さんで彼女の家庭での実践談等々は参加者全員の胸を熱くした。そして久保田会長の講演である。演題は「スペースブラザーズへの呼びかけ」。迫力ある会長の宇宙的大講演に、会場内は一言も聞き漏らすまいと、静寂かつ真剣そのもので出席者全員と久保田会長とが完全に一体化し、支部大会では初めてと思うほど最高の宇宙的フィーリングに包まれた。

記念撮影はプロ写真家筒井徹氏によって行われた。また質疑応答でも内容の濃い質問が出て、会長はそれらについて詳細に答えられた。

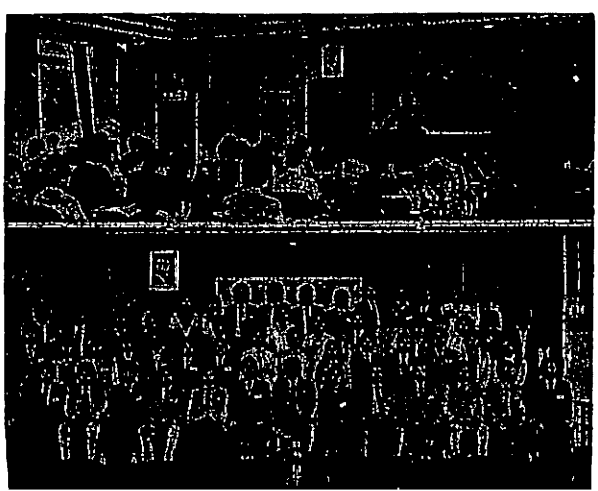
夕食会は静岡ステーションホテルで開催され五十名が出席された。こちらの司会は支部若手会員鈴木、赤池、渥美の三氏によって進行され、和やかな雰囲気のなかに親睦を深め合い、そして四月二十四日に結婚された安藤夫妻と五月二十一日に結婚される滑水正氏・敏恵さん両カップルの前途を祝福し記念品が贈られた。また福引や皆さんの素晴らしい歌、秋山氏のアコーデオン演奏なども飛び出し、夕食会も盛況のうちに幕となった。

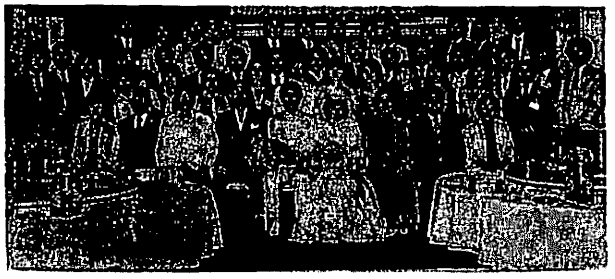
翌日は好天に恵まれ御前崎の海岸方面に観光に出かけ、駿河湾の海岸線や茶畑の風景を満喫した。道中数名の方がUFOを目撃された。

この御前崎行きはかなりの強風で風光明媚な海岸にはあまり長く居られなかったけれども、数名の人がここでUFOを目撃したのはきわめて重要である。つまりいかなる気象条件でもUFOは出現する可能性があるし、熱心な人は目撃できるという意義を含んでいる。

今回の大会では久保田会長のGAP活動に対する意気込みがより強力に打ち出された。私達も会長の意を汲み一致団結し、スペースプログラムの遂行に一役を担いたい。

(野口敏治)





第4回 山形・仙台合同支部大会

●五月二十二日(日)
●置賜綜合文化センター(米沢市)
●出席者　五十名

前日の小雨模様とは打って変わって好天気となった二十二日、予定どおり十時三十分より柴田文子さんの司会で始まった。まず午前の部は昨年度実施の日本GAP企画第四回「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」の記録映画上映で(撮影は大阪の会員・斉藤康美氏)、素晴らしい場面が展開する。毎年海外研修旅行を行うGAPのスケールの大きな教育的活動の一端をうかがい知ることができた。

午後は一時より会員講演としてまず山形大学生の伊藤睦史氏が「自然科学とアダムスキー哲学」と題して物理学の視点から細胞分裂をうながしている〝何者かの意志〟の存在を力説。続いて漆山晃治氏が「アダムスキー哲学に接して」の題で人生上のさまざまの体験を通じて宇宙哲学を生かした意義深い話に熱弁をふるう。

最後に久保田会長が登壇、「宇宙の法則の生かし方」について一時間半大演説を行われた。話の内容自体はべつだん鬼面人(ひと)を驚かすようなものではないが、直接に会長に接して独特な魅力ある低音の声を聴くと宇宙の広大さを感じさせるから不思議である。この声はむかしマダムキラーといわれて女性が悩殺された(?)との由。とにかくすごく深遠な内容で、私たちを心底から勇気づけてくれた。

夕方はホテルサンルートで、前日結婚したばかりの山形支部代表・清水正氏と、もと松山支部会員・中川敏恵さんのお祝いをかねたパーティーが華(はなや)かに繰り広げられた。結婚衣装を着た新郎新婦を囲んで歓声と拍手の中にプログラムが進行し、最後は全員が作る腕アーチをくぐって二人が退場するという凝(こ)った趣向で、終始祝福と歓喜の想念が渦巻いて素晴らしいパーティーであった。この演出はすべて久保田会長が手がけたとのこと、その若さと責任感と知的な力量に脱帽のほかない。昼夜とも盛大な集いであった。

翌日は快晴下を三十名で福島までスカイバレーを周遊。残雪に心が洗われた。皆様方に深謝する次第。　(笠原弘可)

第5回 札幌・旭川合同支部大会

●六月二十六日(日)
●北農健保会館(札幌市)
●出席者　二十四名

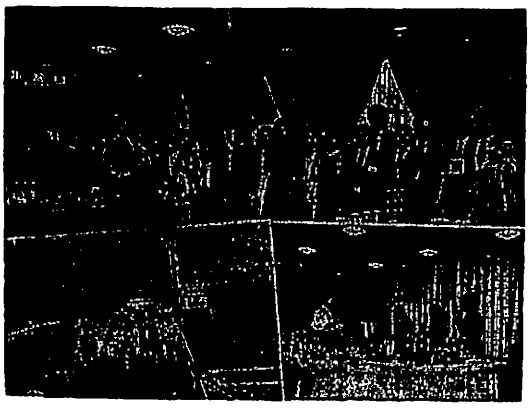
二十五日の夜、会員数名が千歳空港で久保田会長を出迎えて一路札幌に向かいました。宿泊先の京王プラザホテルには十名ほどの会員が集まり、会長の歓迎会が開かれました。

翌二十六日は曇りながら比較的おだやかな天候で、北海道内外より二十四名の会員が出席し、なごやかな雰囲気の中で支部大会が始まりました。小野陽子さんの司会で幕が開き、両支部代表の挨拶、旭川支部の山内さんより会長への花束贈呈の後、恒例になった記録映画が上映されました。今回は「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」で、UFOがキャッチされていたことには一同驚いていたようでした。休憩と記念撮影をはさみ、会長による「GAP活動の意義」と題した講演と続き、その中で日本GAPは世界でも有数の宇宙的な集団であると話され、また会長自身の体験談をまじえながら全身の細胞でフィーリングに気づくことの重要性を説かれ、あらためて宇宙哲学を実践することの素晴らしさを感じさせる内容でした。次に全員自己紹介、そして質疑応答では様々な質問に会長が一つずつ丁寧に解答されました。特に支部活動のあり方として、これからは献本や販売活動により良きカルマのある人を発掘するのが課題であるとのことでした。

夕食会は札幌のシンボル時計台の前にあるホテル丸惣の7階会場において、アダムスキー全集第一巻『宇宙からの訪問者』の発行を記念して立食形式で開催されました。軽快な音楽によるディスコ大会、カラオケのど自慢の後、秋田支部佐藤春雄氏によるプロ級の民謡により盛況のうちに終了しました。引き続き二次会三次会と参加者は夜のふけゆくまで語りあかしたようです。

二十七日は久々の晴天に恵まれ、十名がマイクロバスに同乗し支笏(しこつ)湖方面に観光に向かい、支笏湖では遊覧船に乗ったり、野鳥の宝庫のウトナイ湖では白鳥を観察するなど、北海道の雄大な自然を満喫しました。

今回も久保田会長や会員諸氏の多大な援助をいただき、一連の行事を無事終了することが出来ました。厚く御礼を申し上げます。　(伊藤重信)



御前崎でUFOを目撃

静岡県　赤池澄夫

五月二日の静岡支部大会は素晴らしい雰囲気に満ちており、久保田先生のスペースブラザーズへの呼びかけと題する御講演は最も大きな衝撃を受けて深く感動しました。

大会翌日は観光で、当初心配したお天気もウソのように晴れて大変恵まれた出発になりました。

バスが御前崎に到着して、本日のUFO観測の重点場所だと思い、私はもっぱら観測に懸命でした。日本GAPは確実にスペースブラザーズに注目されていることは、地方の大会等の日はUFOを目撃する事件が多いことでわかります。それでもしかしたら私も見れるかもしれないと期待して小型の双眼鏡を持参しました。かりに目撃できなくても宇宙的な有志の方々とお友達になれたことは生涯の有意義な体験になると確信します。

さてそろそろ海岸をひきあげる時間になった頃、私が見ている反対方向で高梨さんたちが観測している。飛行機雲を見ているらしい。私も急いでその方向に双眼鏡を向けてみると、確かに飛行機雲は見えたが、別に飛行物体が一機いることに気がついた。このようなことは初めてなのでわれを忘れて近くの会員の方に知らせようと思って油断した直後、レンズの視界から消えた。

その物体の色は淡い白銀色、形は細長く、前の底部の方が変形しているように見えた。飛行機の翼のようなものはわからなかった。多少私はあせっていたにしても飛行機の幻を見たとは思えない。幸いに笠原弘可氏も同じ物体を目撃しており、大気圏外飛行物体であると断定しているとあとで高梨氏から聞きましたので再び興奮してきました。瞬間的な目撃ではありましたが、日本GAP一団の前に出現することは重要な意義をもっていることと、スペースブラザーズのはるかに進歩した文明の存在をかいま見たように思いました。

もっと真剣な支部活動を

山形県米沢市　清水　正

米沢での山形・仙台合同支部大会と結婚式も終わって一カ月経過し、時間の流れの速さはこれまでと違って感じられるほどのこの頃ですが、久保田先生はその後お変わりございませんか。私の方はおかげでイメージどおりの女性と結ばれて幸せな気分でおります。お礼が遅れて大変申し訳ございません。

このたびの大会では私共にとりましても二大イベントを同時に行うということで、何かと手落ちもありましたが、無事成功に終わり、これからのこういった催し事などに対しては必ずやれるという自信と、GAP活動の意義についていっそうの理解を深めることができました。

GAP活動につきましては人々に直接に知らせるという行動に積極的になるよりも、着実に真のカルマを持った人々に知らせるということが大切に思われます。やたら大人数になりますとGAPそのものが集団化してしまい、真に大切なものが混乱の中に見失われてしまうように感じられました。これはこれまでの経過でもわかりますが、先生も言われているとおり、人数は少なくとも本当に熱心な方が真剣な集まりとして行うほうがフィーリングが高まって、その輪が世の中に少なからず影響を与えてゆくと信じております。心霊的な人は自然に離れてゆきますが、そのつど混乱が生じるのが残念です。

そこで最近は山形支部でも月例会においてはもっと真剣な話し合いや研究を行うことで、これまで惰性的に集まっていたサークル的状態から、もっと大人の、宇宙哲学をライフワークと考えている者としての自覚をもったものとしての場と考えていこうと思っております。月例会でのメインは久保田先生の宇宙哲学講義でもありますから、その録音テープを皆さんが必ず聴けるようにして、これをもとに更に討論を深めたいと思います。このたび妻と共に「エルサレム宇宙考古学の旅」に参加を申し込みました。この夏もよろしくお願い申し上げます。

清水敏恵

このあいだは結婚式と支部大会での素晴らしいご講演をほんとうに有難うございました。

あれよあれよという間に新婚一カ月が過ぎ、時間の経過の速さに驚いています。私などは突然環境の全く違う土地へ来ていろいろ混乱したり感動したりで、退屈しない毎日を過ごしていますが、でもこちらへ来てやはり今までとは違う生活にマインドも多少騒いでいるようです。それに自分自身の長所短所が今までよりもクリアーに見えてきたような感じで、これは自分を向上させるまたとない機会に恵まれたのではないかと思います。今後とも夫婦力を合わせてGAP活動に協力していきたいと思いますので、どうかこれからもよろしくご指導をお願い致します。

想念の力は偉大なり

千葉市　中里信彦

私がGAPに入会して今年で九年目になりますが、その間本当に色々な事を見たり聞いたりするだけでなく、実際に体験してきました。それらを全てここに書くことは出来ませんが、自分でも不思議な程です。

アダムスキー師の本の中に書かれてあるような円盤もこの目ではっきりと十機ほど見ましたし、透視、透聴、透臭、透味（こんな言葉があるのかどうか知りませんが）も少しずつですが実際に体験しました。前生も少し思い出しました。植物にも動物にも万物に宇宙の意識が存在することを知りましたし、それらとテレパシーで会話を交わすこともできることを知りました。友星人が直接テレパシーで私に問題の解答をくれたこともあります。千葉市内にも友星人がいる感じがします（証拠はありませんが）。

私の生活態度も少しずつ矯正され続け、当初のすさんだ心の状態から徐々に明るさを取り戻し、家族の皆がずいぶん性格が変わったと驚いているくらいです。十六歳から二十七、八歳ぐらいまでは本当にメチャクチャな人生でした。多くの事故にもあい、沢山の病気もしましたが、病気の八十パーセントは久保田先生が教えて下さった直道会（神戸）で治して頂きました。

私自身は宗教はあまり好きではありませんが、思念力（想念の力）が人間や万物にすさまじい影響を及ぼしているのを実際体験して驚きました。病気もマイナスの原因と感情がプラスになったとき治ったように思います。

アダムスキー師のこともUFOも何も知りませんが、非常に宇宙的に建設的な考え方をする女性と出会い、その女性と昨年結婚し、私の人生観が大きく変わりました。私と彼女との出会いは偶然なものではありません。一緒に生活し始めてから一週間目ぐらいに二人とも全然異和感がなく、ずっと前から生活していたみたいだねと二人で話し合っていました。私の現境も心の状態も以前に比べるとずいぶん向上しました。

私は今日本GAPの会員であることに非常に感謝すると共に誇りに思っています。久保田先生とアダムスキー師とGAP会員の方々、そしていつも何らかの形で地球人を援助している友星人に心から感謝します。まだまだ解決しなければならない問題が山ほどありますが、どれもこれ

以上悪くなることはないと思っています。

地方で臨時大会を

鳥取県　岸本　悟

毎日お忙しいことと存じます。再び思うことがありペンを取らせていただきました。

今私たちがこうしていられるのも久保田先生のおかげであり、心より感謝している次第です。

ところで私のように毎月どこかの月例会に参加したくてもなかなかできないという人が各地にいると思うのです。そのなかには私よりももっと条件の悪い所に住んでいる人もいるでしょう。そしてそのような人たちはGAP会員の多くに接する機会も少ないでしょうし、それに反して世俗的な人たちに接する機会は多いものと思われます。たしかにニューズレターは定期的に発行されていますし、少しお金を出せば東京での先生の講演を聴くことができます。しかしこれだけではやはり孤独感等にさいなまれるでしょうし、なかには疑惑を起こして離れて行く人もいるでしょう。

そこで私が考えたことなのですが、そのような人たちの住んでいる所で持ち回りで臨時大会を毎年一度ぐらいは開いたらと思います。それが資金的にむつかしいのでしたら、そのことを公にして心ある人からお金をいただき、そのお金を会場を貸りる代金や宿泊費等に使うならば、そこに住んでいる人の出費も少なくてすみますし、参加者の出費も少なくてすむと思うのです。そして何よりもそのことでそこに住んでいる人が勇気づけられたらと思うのです。このことはいろいろと問題があるでしょうから、これをそのまま適用するという訳にもいかないでしょうが、できればこれに近いようなことを何か行っていただければと思うのです。私自身、GAPのために何かできたらと思っている次第です。

秋田支部大会へどうぞ

秋田市　伊藤正治

米沢市の山形・仙台合同支部大会では大変ありがとうございました。高尚なるお話を聞き、又、人間的に一歩前進できたように感じております。大成功の大会でほんとうに素晴らしかったと思います。秋田支部でも来たる八月の大会をめざして支部会員一同計画実行のため頑張っております。大盛況になるべく皆さんでミラクルイメージを描いております。どうかその節には先生にもよろしくお願い申し上げます。

日本海中部地震ではご心配をおかけしたと思いますが、各地に大変な被害をもたらしましたが、幸いにもGAP会員にはたいした被害もなく、精神的動揺だけですみました。GAPのおかげかもしれません。八月に先生をお迎えするのを秋田の会員一同楽しみにしております。GAP会員の方々、多数ご出席下さい。心から歓迎いたします。

●おめでた

千葉県習志野市の会員・遠藤昭則氏は来たる十月十六日に三重県の会員池谷由貴子嬢と結婚される。

●沖縄のUFO

昨年夏、沖縄のGAP会員・石野創太氏の従兄の高江洲一哉君が友人数名と名護の瀬良垣ビーチに出かけたとき、なにげなく写した最後の一枚に奇妙な物体が写っていた＝写真の左寄り物体。撮影時には気づかなかったという。沖縄には四月二十七日にも浦添市の三少年がUFOを目撃しており、このところUFO出現が増加中とのこと。

だれにもわかる「生命の科学」1982年版
第2部刊行中！

1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録。深い理解を得るための必読の名著です。

B6版　活字タイプオフセット印刷
4～6月分　頒価500円　送料170円

申込先　〒980 仙台市五輪2丁目9-8(2F南)
安藤澄雄
☎（0222）91-7978　振替仙台7-30019
※第1部（1～3月分）在庫有￥700　〒170

〈予告〉今年度地方支部大会

	秋田支部大会
日時	8月28日（日） 午後1：00→6：00
会場	「彌高（いやたか）会館」4階広間 秋田市中通6丁目1－1 ☎（0188）35－1188 秋田駅から市民市場の方向へ徒歩10分。
会費	￥2000（写真は送料共￥700。グランドキャビネ判）
プログラム	司会　伊藤正治 1：00　支部代表挨拶　佐藤春雄 1：10　会員講演・佐々木三羊子 1：50　講演「UFO問題と宇宙哲学」久保田八郎 2：50　休憩・記念撮影 3：20　記録記画「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」 4：30　全員自己紹介・質疑応答 6：00　閉会
夕食会	大会終了後 6：10→9：00まで同会館内の別会場で希望者による夕食会を開催。 会費　￥4500
宿舎	「秋田パークホテル」をお世話します。 シングル　1泊 ￥4000 ツイン　1泊 ￥7000
申込	夕食会・男鹿観光・宿舎希望の方はハガキにその旨を記して7月末までに下記へお申込下さい。 〒019-24　秋田県仙北郡協和町境字野田167－19 佐藤春雄 ☎（0188）92－3284
備考	大会前日は秋田パークホテルで希望者だけで歓迎会を開催。大会翌日は希望者だけで男鹿半島一周遊覧ドライブの予定。（仁別国民の森を変更） ※8月は支部大会のために月例会は中止。

※上記の他に11月20日（日）には福岡支部大会を開催予定。詳細次号。

絶賛発売中!

「ジョージ・アダムスキー全集」刊行!

久保田八郎訳　全7巻　徹底的全面改訳

第1回配本
6月中旬発売

第1巻 宇宙からの訪問者

B6判・338頁・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本・￥2500　〒250

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたジョージ・アダムスキーが、驚嘆すべき異星の科学と超高次な生き方を詳細に伝えた稀覯本(きこうぼん)。アダムスキーの友人・研究家でUFO研究界の第一人者・日本GAP会長・久保田八郎先生により徹底的な改訳がほどこされ、箱入豪華保存版として、ここにふたたび脚光をあびることになりました。超絶した別な惑星の大文明を伝える本書こそ、混乱と分裂に満ちた地球に一大光明をもたらすものです。宇宙への道を歩む方はぜひお求め下さい。

アダムスキー全集　第1期刊行予定

第1巻 宇宙からの訪問者

第2巻 UFO問題の真相　昭和58年7月中旬発行　￥2500　〒250

第3巻 UFOとアダムスキー　昭和58年8月中旬発行　￥2500　〒250

※第1巻「宇宙からの訪問者」を本社へ直接注文される場合に限り，下記の割引をいたします。郵便振替または現金書留でご注文下さい。

1冊＝￥2,500　送料は出版送料は出版社負担。
5冊＝￥11,250(1割引)　送料￥500は注文者負担。
10冊＝￥20,000(2割引)　送料￥800は注文者負担。

アダムスキー全集　第2期刊行予定　昭和58年9月以降

第4巻 宇宙哲学

第5巻 テレパシー開発法

第6巻 生命の科学

第7巻 アダムスキー論説集　日本GAP機関誌に掲載されたのみで，まだ単行本化されていない論文集

文久書林　〒162 東京都新宿区榎町33
TEL 03(267)6920　振替東京4－2521

予告

●アダムスキー全集刊行記念

1983年度 日本GAP総会

日本ＧＡＰはアダムスキー全集刊行記念として今秋も下記のとおり盛大に総会を開催することになりました。今回は３日間にわたって多彩な行事を繰り広げます。年１度の宇宙的な交流の場に集まり、高次元な友情のもとに宇宙的フィーリングを高揚させてＧＡＰ活動を強化しようではありませんか。多数会員のご参加をお待ちしています。 篠　芳史ほか一同

	全国支部代表者会	総　　会	大夕食会	東京都内観光
日時	10月８日（土） 午後１：00→５：00	10月９日(日)〈２日連休の初日〉 午前10：00→午後 5：00	10月９日(総会終了後) 午後 6：00→８：00	10月10日(祭日) 午前 9：00→午後 5：00
会場	上野公園内「東京文化会館」４Ｆ・中会議室 ※国鉄「上野」駅下車「公園口」改札を出てスグ目の前。奥のエレベーターで４Ｆへ。 ※この会は一般会員は関係ありません。	皇居北の丸公園内「科学技術館」地下大ホール ※東京駅構内地下鉄「東西線」中野方面行きに乗り、隣の「竹橋」駅で下車地上へ出てそばの橋を渡り、皇居方面への広い道路を約 200ｍ行き、陸橋の所から右へ曲がって１００ｍの森の中。タクシーなら東京駅丸の内北口乗場より５分。料金は¥ 500台。 （東京駅地下の東西線駅までは遠いのでタクシーが便利で早い）	東京駅丸の内側南口構内、「精養軒」２Ｆ大ホール。 ※駅の外ではなく、南口改札のすぐそば。入口内側の階段を上がる。 立食形式。２次会も企画 ※定員 100名。	団体貸切バスにより「東京グリーンホテル水道橋」を出発。 ※定員30名。 雨天決行。 昼食付き。 （列車・飛行機等の都合により早目に引き揚げる必要のある方には便宜を図ります）
会費	不　　要	¥2800　（会場受付でご納入下さい）	¥5500（会場受付でご納入下さい）全員記念写真入用の方は別に¥ 700をお出し下さい。	¥5000 （この会費のみ事前に納入のこと。詳細は申込欄を参照）
プログラム	1：00　司会者挨拶 1：05　会長講演「ＧＡＰ活動の結束」 2：00　全員自己紹介・記念撮影 2：30　意見発表・質疑応答その他 5：00　終了 5：30　夕食会（別会場にて。会費¥2800）	9：00　受付開始 10：00　司会者挨拶（篠　芳史） 10：10　講演「スペースプログラム最前線」野口敏治（静岡支部代表） 10：50　講演「アダムスキー問題の真髄」久保田八郎（日本ＧＡＰ会長） 11：50　アダムスキー全集刊行をお祝いして（代表・柴田文子） 12：50　映画「パワーズ・オヴ・テン」 1：00　映画「ベン・ハー」(映画解説は本号18頁) 5：00　終了	6：00　司会者挨拶。 6：05　会長挨拶。 6：10　全員記念撮影。（遅れて来ない事） 6：20　宴会開始。アトラクションとしてプロ級会員数氏による歌、その他あり。 8：00　終了。 ※終了後希望者だけで２次会場へ徒歩で行くので、階下入口に集合のこと。	9：00に東京グリーンホテル水道橋を出発→ 9：10東京駅八重洲口→皇居前広場二重橋→銀座（４丁目で一時自由行動）→東京タワー→新宿超高層ビル（京王プラザビル展望台行き）→浅草（仲見世・浅草寺）→その他を周遊。 （東京タワーのみは自由選択） ※途中各所で全員記念撮影写真は別途料金で希望者に頒布。後日個々に通知します。
申込	各支部は、出席する代表と副代表計２名の氏名を９月20日までに本部宛ハガキでご通知下さい。	※10月９日夕方の大夕食会、10日の都内観光の参加希望者と宿舎の希望者は次の要領でお申し込み下さい。 (1)大夕食会＝ハガキに「大夕食会出席希望」と記して下記の申込先へ９月20日までに申し込むこと。 (2)東京都内観光＝これのみは会費¥5000を添えて、「都内観光参加希望」と記し、住所・氏名・電話番号・勤務先名とその電話番号を明記の上、現金書留で下記の申込先へ９月20日までに申し込むこと。電話による申込は不可。必ず会費を添えて事前にご予約下さい。満員の場合は返金します。 (3)宿　　舎＝希望者には「東京グリーンホテル水道橋」をお世話します。（昨年の「東京グリーンホテル淡路町」とは違うので要注意）。国電「水道橋」駅下車徒歩３分。シングル¥5900／ツイン¥9400（ツインのみは10名まで）。希望者はハガキに①①宿泊日、②シングル・ツインの別、③住所・氏名・電話番号・勤務先名とその電話番号を明記の上、下記へ９月20日までに申し込むこと。申込者にはホテルの案内書を送ります。 ■申　込　先＝上記(1)～(3)の申込は、すべて下記へ。（ＧＡＰ本部へ申し込まぬこと） 〒150 東京都渋谷区東３－24－９、サンイーストビル２Ｆ。 ワールドセプトラベル社、田中　正 ＴＥＬ（03）４９９－２４６１　夜間＝（0462）63－０６１５（自宅）	

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2：00→6：30 ※10月は総会のため月例会は中止。	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。☎03－828－2111。国電「上野駅」の公園口」下車。改札口の裏向かいスグ。 ※7月と8月のみは重厚北の丸公園内の「科学技術館」6F会議室に変更。両月とも第1土曜日。8月月例会終了後、海外研修旅行歓送夕食会を開催（会費¥2000）	¥300	2：00→3：00会員による体験講演。 3：00→4：30久保田会長の「宇宙哲学」講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。 4：30→6：30自己紹介，意見発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和義　☎06－436－3478	¥300	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」（文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「青年の家」☎0252－44－6766 連絡先＝星宮治夫　☎02579－2－5562	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
福岡支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	福岡市天神町5丁目1－23「福岡市民会館」3F　国際会議控室 連絡先＝島津紳二郎　☎092-672-6784	¥200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」（文久書林）」を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1：00→4：30 ※10月は総会のため月例会は中止。11月は第1日曜（6日）に変更。	名古屋市中区古沢町7－1「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331－2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林　国宣　☎0586－45－6468 武田光弘　☎052－622－7339	¥300	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表テレパシー練習，座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日　午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222－95－0725	¥200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00	山形市小白川町「社会福祉センター」 山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎ 0236－42－5181 連絡先＝清水　正　☎ 0238－21－5441	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011－241－9171　連絡先＝伊藤重信　☎011－742－0192	¥500	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。久保田会長の講演録音テープを公開，テレパシー練習，座談会。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00	プラザー静岡ビル8階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町9－1 連絡先＝野口敏治　☎0542－86－7729	¥200	テキストとして「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第4日曜日 午後1：00→4：00	旭川市5条通10丁目「大雪婦人会館」3F ☎ 0166－23－6588 連絡先＝阿部　堯　☎ 01658－2－1585	¥1000	東京月例会における久保会田長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「宇宙哲学」「生命の科学」を持参。質疑応答，テレパシー練習，研究発表。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→4：30	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫　☎ 0898－22－3060	¥200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2：00→6：00 ※10月は総会のため月例会は中止。 ※8月は秋田支部大会応援参加のため月例会は中止。	群馬県太田市「太田市民会館」 第6会議室。連絡先＝久保寺中一 店＝☎0276－25－5985 自宅＝☎0276－45－3544	¥200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	青森市松原「青森市民文化センター」 教養室(2) ☎ 0177－34－0163 連絡先＝中根　豊　☎ 01756－3－3386		テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習，研究発表，座談会。
沖縄支部	毎月第3日曜日 午後1：00→6：00	〒901－22 宜野湾市野嵩1547マキシアパート、新里方 連絡先＝新里義雄　☎09889－3－3695	¥500	テキストとして「宇宙哲学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介。座談会等。
秋田支部	毎月第2日曜日 午後1：00→5：00 ※8月は支部大会のため月例会は中止。10月は総会のため月例会は中止。	秋田市八橋運動公園1－2「中央公民館」趣味の間。☎ 0188－24－5377 連絡先＝佐藤春雄　☎ 0188－92－3284	¥200	テキストとして「生命の科学」「宇宙哲学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習。座談会。
神奈川支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 ※8月のみ第1日曜日（8月7日）に変更し，第1研修室より会議室に変更。	神奈川県川崎市川崎区富士見2－5－2「川崎市立労働会館」第1研修室 ☎ 044－222－4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前 連絡先＝千田光明　☎ 0468－36－7198	¥400	テキストとして「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。研究発表，座談会等。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

No.78 主要記事「火星に生命が存在」／「私は異星人から何を学んだか」G.アダムスキー／札幌市でアダムスキー型円盤目撃さる／アダムスキー型円盤、旭川に出現！／沖縄支部大会の日に葉巻型母船現る！／「宇宙と愛について(2)」／「波よ静まれ、そして風も」久保田八郎

No.79 主要記事「イエスの聖骸布の謎」久保田八郎／「聖書とUFO」G.アダムスキー／「宇宙と愛について」(3)／「円盤につきまとわれた日」／「謎の巨石と太陽円盤の国へ」その他有益な記事を満載。

No.80 主要記事「ファティマの大UFO事件」久保田八郎／「美しき惑星の思い出」中川真理子／「GAPの意義・アダムスキーの著書」／「聖書とUFO(2)」G.アダムスキー／82年度日本GAP総会賛歌・講演録　その他。

No.81 主要記事「月はUFOの基地!?」久保田八郎／「私は異星人に守られている」岩崎敏夫／「美しき惑星の思い出(2)」中川真理子／「形而上学，心霊学，宗教」G アダムスキー／「〈改訳〉テレパシー開発法」G.アダムスキー／その他。

各￥700。※バックナンバーに限り送料は不要

「宇宙哲学」解説講義録音テープ

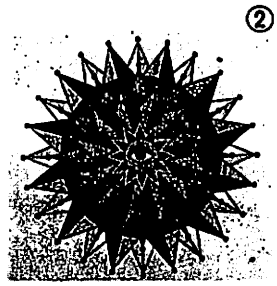
昭和58年度東京月例研究会において1月より毎月1－2章ずつ久保田会長が解説される録音テープです。アダムスキー哲学の理解を深める上の最重要な資料。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。各支部必須のテープ。

テープ1本(90分)　￥1000　〒200

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(58年1月より毎月録音。第1章より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065

①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①￥500〒120 ②￥200〒60一括注文の場合〒120

③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。品切れ

④ゼナーカード

テレパシー練習用

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。
美麗箱入り。
￥500 〒120

日本GAP

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先輩ビル・久保田八郎が故アダムスキー氏と連携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

―日本GAP―

編集後記

★本号の圧巻は野口敏治氏の「静岡に頻出するUFO」です。この題名は適当ではありませんが、究極的には上空からスペースプラザーズが同氏を見守っているということに尽きます。宇宙的な高次元な人物はかくあるべきでしょう。

★「沖縄に出現した宇宙人」も通り一遍の目撃報告ではなく、深く考えさせられるものがあります。伊藤達夫氏の「スペースプログラムへの協力と宇宙的成長」もまさにGAP的生き方の典型といえるでしょう。いったい本誌はたんなる興味本位の記事を極力避けて高密度な〝考えさせる〟内容になるよう編集に苦心しています。

★編者の「転生とカルマ」も宇宙哲学の真髄をわかりやすく解説する講座の第一回として掲載しました。この記事の反応しだいでは転生の問題の続篇を次号に載せますので、ふるってご意見をお寄せ下さい。反応がなければ連載第二回はテーマを変えます。

★アダムスキー全集第一巻「宇宙からの訪問者」が六月中旬より全国書店でいっせい発売されました。第二次の静かなアダムスキームが始まろうとしています。各支部とも図書館や学校等への献本運動を展開して下されば幸いです。一括購入の場合は割引の特典があります。本号38頁の広告をご覧下さい。

★八月実施予定の日本GAP企画第五回「エルサレム宇宙考古学の旅」も近づいてきました。七月八日現在の参加申込者は三十三名に達しており、氏名は次のとおりです。四十五名までOKですから至急お申し込み下さい。

〈申込順〉野口敏治(静岡市)高梨和明・美幸(静岡県)赤池澄夫(静岡県)千田光明(横須賀市)三浦公子(広島県)伊藤達夫(愛媛県)遠藤昭則(千葉県)池谷由貴子(三重県)坂野美津子(函館市)鈴木芳美(静岡県)白川裕基(秋田県)橋本明(栃木県)清水悟(長野県)野本俊次(東京)石川敏夫(東京)吉原逸人(栃木県)山城尚雄(栃木県)橋口眞市(静岡県)笹井敏(静岡県)磯目三鶴(東京)升田裕子(広島市)井口みい子(東京)河辺宏幸(愛知県)清水勝一(茨城県)井川博文(神奈川県)小沢アユ子(愛媛県)岡本静江(奈良市)清水正・敏恵(山形県)品野友一(埼玉県)小林由起子(埼玉県)篠芳史(神奈川県)。

ガリラヤ湖畔で日本式の野外パーティーを開こうという計画もあります。楽晴らしい旅が実現するでしょう。

★十月九日の今年度総会も着々と準備中です。プログラムその他の詳細は本号39頁に掲載されていますから、ふるってご参加下さい。行事出席・宿舎等の申込は早目にお願いします。

★熊本支部は代表の津野川俊行氏がご病気のため発展的解消をとげて、かわって福岡支部が結成されました。代表は島津紳二郎氏。すでに六月十九日に第一回月例会が開催されています。九州の会員の方はご支援のほどを。群馬支部代表の服部久氏は勤務時間の都合上、久保寺申一氏(太田市)と七月より代表交替。また新潟支部代表の足立正宏氏も仕事の都合により里新一氏(北魚沼郡湯之谷村)にバトン渡し。三人共多年ご苦労様でした。

★本誌の書店卸し協力者を募っています。希望者はご一報下さい。説明書をお送りします。

★八月も東京月例会は皇居北の丸公園の科学技術館で六日に開催し、九月より上野の文化会館へもどります。ご注意のほどを。(K)

日本GAP機関誌・季刊　秋季号
宇宙哲学とUFO　82号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色町365－818
TEL(03)651-0958
振替東京4-35912
一九八二年七月二十日発行
定価七〇〇円・送料二〇〇円